

西部開発事業（畠地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡

1983

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡

1983

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

鳥井田・横次・城の腰・安岡城遺跡はすべて伊那市西春近諏訪形に位置しています。この四カ所の遺跡付近の南側は堂沢川河岸段丘面、西側は山麓扇状地の扇端部の合わさった面に存在し、段丘崖面には多量の清水が湧出しています。

大正末年ごろに来伊して上伊那地方の遺跡を丁寧に調査され、大著「原史及び先史時代の上伊那」を出版された鳥居龍蔵博士はこれらの遺跡の重要性を同著の中で詳細に述べています。

たまたま、西部開発事業が施工されることとなり、これらの遺跡が一部分を残して破壊されるところで、昭和57年8月上旬～12月上旬まで、あしかけ4カ月間にわたって発掘調査を行うこととなりました。

発掘調査を実施した面積は凡そ4,000m²におよび、縄文中期住居址9軒、弥生後期住居址15軒、奈良時代住居址7軒、中世窓穴2基、堀址2、その他多量の遺物が発見されました。これらは伊那地方における弥生時代の全容を知るうえに貴重な資料であり、弥生式土器型式の実態を知ることができるものと思われます。

この報告書は調査成果をまとめたものであり、このような成果をおさめ得たことは、長野県教育委員会、地元の方々をはじめ直接発掘に従事された調査団の団長、以下調査員、作業員の皆さんのご尽力の賜であり、ここに深く感謝申し上げるとともに、この報告書が、今後教育文化の向上に活用されることを切に願って止みません。

昭和58年3月

伊那市教育委員会

教育長 伊澤 一雄

まえがき（鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡の環境）

位 置

鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡は四つとも長野県伊那市西春近諏訪形下班部落に位置している。

遺跡地に至るまでの道順は飯田線赤木駅で下車して、国道153号線を北へ向かって100m程行くと、左手に西春近農業協同組合南支所があり、そのすぐ北側の市道を左折して西に向かって徒歩にて5分程行くと、左手に茅葺の民家がみえてくる。この家の北側には段丘が東西に走っている。この家のすぐ西側には「城」という屋号の家がある。

茅葺の家の東側水田地帯及び北側の段丘面上一帯が横吹遺跡である。横吹遺跡の北側一帯畑地帯が鳥井田遺跡である。

「城」という家の北側段丘面突端が安岡城遺跡である。この遺跡の北側には高い土壁がみられる。しかし、この土壁も今度の土地改良事業で破壊されることがある。この土壁の北側一帯が城の腰遺跡で、畑、水田、果樹園に利用されている。

地形・地質

今回の発掘調査を実施した四カ所の遺跡は西春近諏訪形地籍に属している。したがって、この付近の地形・地質を考えてみる場合には西春近中南部地区の地形・地質を述べてみれば良いと思う。その理由としては西春近地区は南北に細長く延びており、普通に考えてみて、まず西春近北部地区の影響はないものとさしつけてもさしつかえないものと思われる。

西春近地区は天竜川が最も低い面を南流しており、この天竜川氾濫原面は平坦な地形を呈している。天竜川によって形成された竜西地区河岸段丘面は山麓から流れ出す多くの小河川によって、複雑な景観を呈し、なかでも天竜川と接する地点は深い開析地形を成し、比高差は30m近くにも及んでいる。北から主なる河川を列記すると次のようになる。

小黒川、戸沢川、犬田切川、猪ノ沢川、前沢川、大洞、藤沢川、堂沢川、大沢川

前述した河川のなかで西春近中南部地区に含まれるのは犬田切川より後の川である。いずれにしても地形・地質は大きな河川によって変化すると言っても過言ではない。そこで主なる川の諸特徴を『伊那市史 自然編』に基づいて記してみることにする。

犬田切川水系—伊那市南西部西春近地籍の河川であり、木曾山地椎現山に発し、東方に直流し、天竜川にそいでいる。流域は小さく、支流はほとんどない。山地に近いため直流型でこう配も急傾斜である。伊那地域の河川の中では、特に急こう配の方に属する。季節的に流量・流速も変化し堆積物の運搬も非常に多くみられる河川である。流路距離はこの地域の河川としては長い。こう

配・流量・流速からみて水害の危険が内在していると考えられる。

藤沢川水系—伊那市の南部地域にある河川で、木曾山脈オツ越に発し、流域は非常に小さく、支流がごくわずかである。流路距離もみじかく、こう配も急傾斜で、流量・流速の変化もはげしい。水害の危険が内在していると考えられる。

その他西春近の水系—いずれも木曾山脈の前山から発しており、直流型で急こう配。季節的に流量・流速の変化がはげしい。側方浸食が季節的におこなわれる河川のようにみうけられる。したがって、小水害的な危険は内在していると考えるべきであろう。

発掘地点の土層は上から耕作土、黒色土、褐色土、ローム層の順で堆積し、第4浮石層まで約3mくらいあった。したがって地層の層序関係は割合に一般的であった。鳥井田遺跡と横吹遺跡の一部は水成ローム層より成り立っていた。この水成ローム層のなかには赤木花崗岩が含まれている。赤木花崗岩について『伊那市史 自然編』によれば次のようなになる。

赤木花崗岩—この岩石は、赤木西方にみられる小さな岩体で石英・斜長石・黒雲母からなる中粒黒雲母花崗閃綠岩であるが、白雲母・角閃石をふくんでいないことと、そしてカリ長石が非常に少ないことなどが主なる特徴といえる。この岩体は、この付近に観察されるいろいろな花崗岩類のうちのどれと近縁関係にあるのか、あるいは属するのかわからないけれども、分布上からみるかぎりにおいては、大田切花崗岩の中の一つとして、白雲母とカリ長石の岩相としてあつかってもよいようにも考える。

四遺跡とも水利の便を考えてみると、南側の段丘崖下の各所にわたって湧水がみられ、水を利用して、ワラビ栽培が行われている。いかに湧水が多かったかは、「清水」という小字名が現存していることからも想像できる。

周辺遺跡及び歴史的環境

西春近中南部地区には現在36カ所の遺跡の存在がわかっている。これらを時期別に分類してみると次のようになる。

北丘B遺跡は縄文早、中、後期。北丘A遺跡は縄文中期、奈良。北丘C遺跡は縄文中期。南丘B遺跡は縄文中期、奈良。南丘A遺跡は旧石器、縄文中期、弥生後期、奈良、平安。南丘C遺跡は縄文中期。眼子田原遺跡は縄文中期、奈良。山の神遺跡は縄文中期、奈良。上の塚遺跡は奈良、中世。沢渡南原遺跡は縄文中期、下小出平遺跡は縄文中期、奈良。天伯原遺跡は縄文中期、奈良、平安。南村遺跡は縄文前、中期奈良、平安。東田遺跡は縄文中期、平安、中世。天伯遺跡は縄文後期。下小出原遺跡は縄文中期、奈良、平安。井の久保遺跡は縄文中期、後期、平安、中世。表木原遺跡は縄文中期、奈良、平安。山の下遺跡は縄文中期、奈良。葛蒲沢遺跡は旧石器、縄文早、中、後、晚期、奈良、平安、中世。富士山下遺跡は縄文中期、弥生後期、奈良。富士塚古墳は横穴式石室、奈良。広垣外I遺跡は縄文中期、奈良。広垣外II遺跡は奈良、平安。鳥井田遺跡は縄文中期、弥生後期、奈良、平安。高速道遺跡は縄文中期、奈良、平安。西春近南小学校付近遺跡は奈

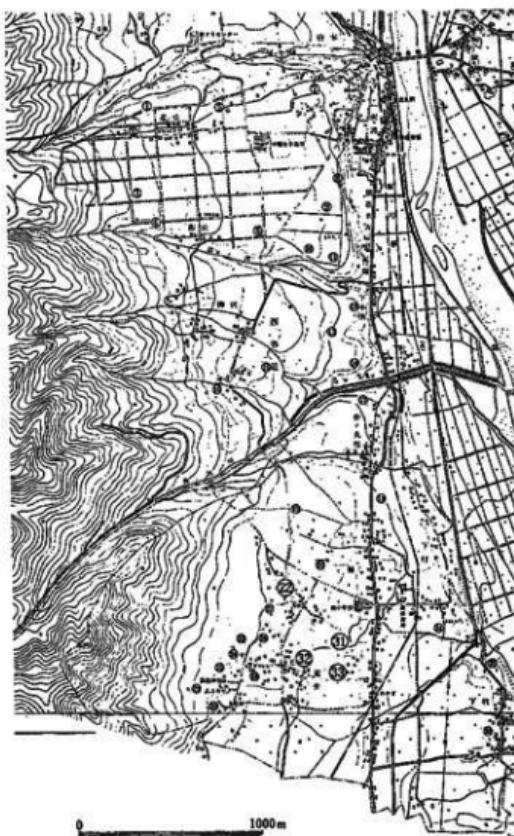
良、平安、安岡城遺跡は縄文中期、弥生後期、奈良、平安、中世。城の腰遺跡は縄文中期、弥生後期、奈良、平安、中世。横吹遺跡は縄文前期、中期、弥生後期、奈良、平安。和手遺跡は縄文中期、奈良、平安、中世。上手南遺跡は奈良、平安。宮入口遺跡は縄文中期、奈良。寺村遺跡は縄文中期、奈良。下牧遺跡は縄文早・中期。下牧経塚は平安末から鎌倉初期の経塚遺跡である。

今までに何かの動機によって発掘調査を実施した遺跡は下記のとおりである。

中央道関係では北丘B遺跡、北丘A遺跡、南丘A遺跡、南丘C遺跡、菖蒲沢遺跡、富士山下遺

遺跡の名称

- ①北丘B
- ②北丘A
- ③南丘B
- ④南丘A
- ⑤北丘C
- ⑥南丘C
- ⑦眼子田原
- ⑧山の神
- ⑨上の塚
- ⑩沢渡南原
- ⑪下小出平
- ⑫天伯
- ⑬下小出原
- ⑭天伯原
- ⑮東田
- ⑯南村
- ⑰井の久保
- ⑱表木原
- ⑲山の下
- ⑳高遠道
- ㉑西春近南小学校付近
- ㉒鳥井田
- ㉓菖蒲沢
- ㉔富士塚古墳
- ㉕富士山下
- ㉖広垣外I
- ㉗広垣外II
- ㉘宮入口
- ㉙和手
- ㉚上手南
- ㉛城の腰
- ㉜安岡城
- ㉝横吹
- ㉞寺村
- ㉟下牧
- ㉟下牧



位置及び西春近中・南部地区遺跡分布図

跡、富士塚古墳である。

養蚕団地事業としては、菖蒲沢遺跡がある。大規模農道として南丘C遺跡がある。土地改良事業としては眼子田原遺跡、南村遺跡、東田遺跡、山の下遺跡、菖蒲沢遺跡、高遠道遺跡、井の久保遺跡、表木原遺跡、今回の鳥井田遺跡、横吹遺跡、城の腰遺跡、安岡城遺跡がある。

地区的住民達に最も知られ、親密感があるのに安岡城遺跡がある。この遺跡が世に知られるようになったのは大正末年ごろである。

この遺跡を最初に紹介したのがかの有名な島居龍蔵博士である。博士は上伊那地方をくまなく踏査され大著「先史及び原始時代の上伊那」を出版された。この書物のなかにかなりのページ数をさして遺物が掲載されている。このなかでも傑出し、他に類例をみないのが室町時代末期から戦国時代の古瀬戸灰釉菊皿9枚、古瀬戸天目茶碗2個であろう。

安岡城に関連した古文献を記してみると次のようになる。この古文献とは江戸時代初期に書れた「伊那武鑑根元記」である。この古文献によれば次のように記してある。

諫訪形ノ字中村ニハ縦横30間周回疊壇現存シ之レア安岡城址ト称ス、天文ノ頃郷土ノ居址ト云フノミ由緒詳カナラズ

安岡城付近には城に関連した各種の小字名が残存しております。城が盛えていた当時には一種の城下町的組織が形成されていたことを物語ってくれる。主なる小字名を列記すると次のようなになる。

坂ノ下、城坂、星敷添、城、城の腰、的場、的場垣外、古屋敷、荒神社、中村城の内、北垣外、飛石、清水若宮、若宮、若宮八幡社、弥十垣外、駒垣外、春垣外等々

その他、中世に関連した遺跡としては、安岡城より西側へ300m程行った場所に菖蒲沢遺跡がある。この遺跡は昭和54年12月～昭和55年1月にかけて、西部開発事業によって緊急発掘調査を実施した。調査の結果を記すと次のようなになる。遺構としては住居址1軒、堀、溝状遺構1基、井戸址1基であった。

遺物としては、内耳土器、鉄釉大甕、灰釉平茶碗、鉄釉スリ鉢、青磁碗、灰釉四耳壺、鉄釉祖母巻壺、灰釉仏花器（華瓶）、灰釉皿、天目茶碗、灰釉オロシ皿、青磁香炉、山茶碗、鉄釉甕、灰釉大鉢、鉄釉水差、灰釉鉢、鉄釉壺、大型盤がある。

古錢として咸平元宝1枚の出土があった。西春近南部地域に存在する城館には次のようなものがある。城の名称と存在場所を列記する。

下牧の城—西春近下牧、町屋の城—西春近諫訪形、中村の城（安岡城）—西春近諫訪形、表木城—西春近表木、物見ヤ城—西春近柳沢、井の久保の城—西春近井の久保、恩徳寺の城—西春近下小出、沢渡の城—西春近沢渡。

（飯塚政美）

凡　　例

- 1 今回の発掘調査は西部開発事業に伴う、土地改良事業で、第9次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
- 2 この調査は県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘で、国、県、市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、昭和57年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後の機会にゆずることにした。
- 4 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一、根津清志、飯塚政美、小木曾清、小池 孝

◎図版作製者

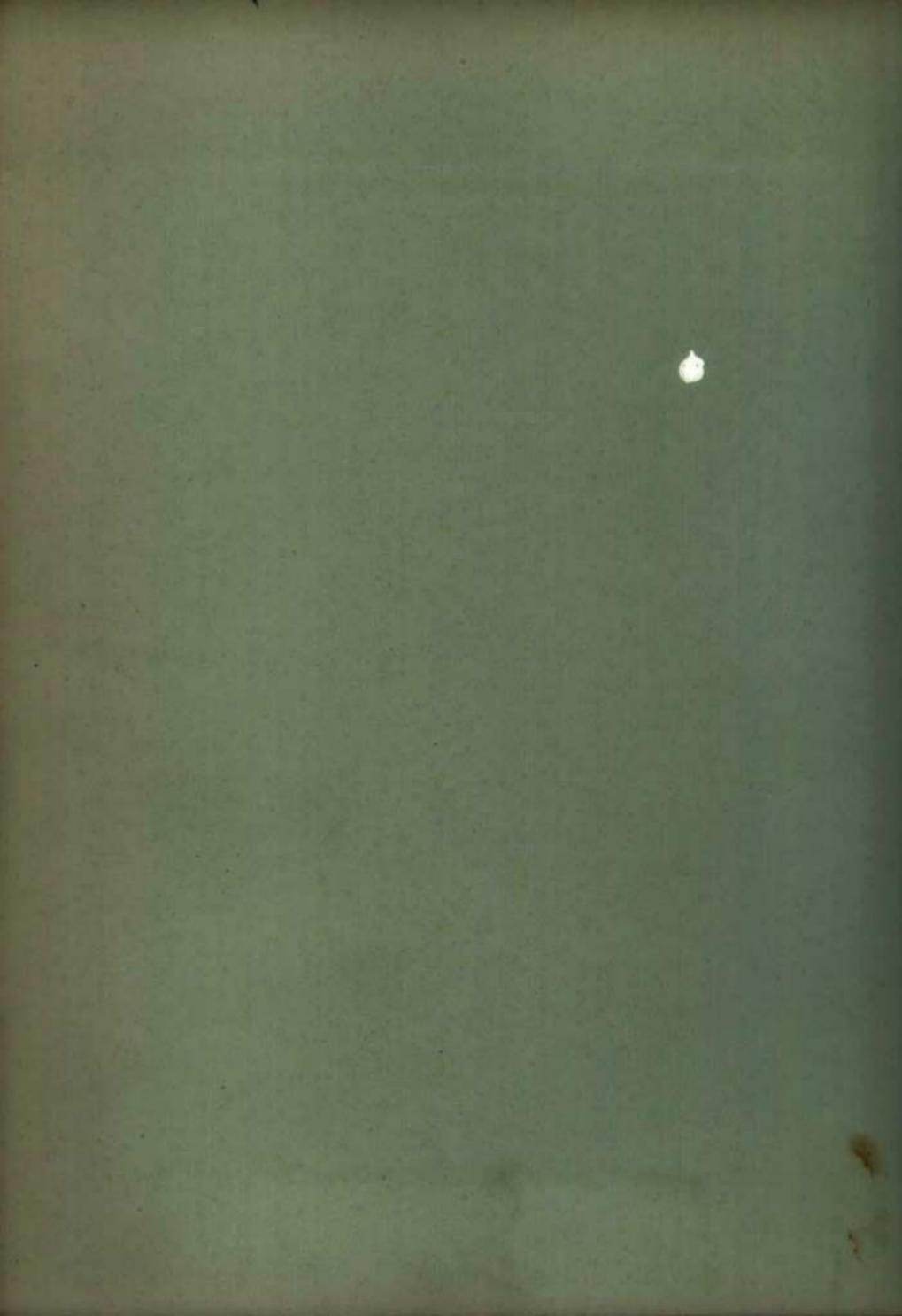
- 造構及び地形実測図
友野良一、飯塚政美、小池 孝
- 拓影 飯塚政美、小池 孝
- 石器実測図 根津清志
- 土器実測図 小池 孝
- 陶磁器実測図 小池 孝
- 土製品実測図 小池 孝
- 鉄製品実測図 小池 孝

◎写真撮影者

- 発掘及び造構 友野良一、飯塚政美、小木曾清
- 造物 友野良一、飯塚政美、小木曾清

- 5 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

鳥井田遺跡



目 次

序	
目 次	(3)
挿図目次	(5)
表 目 次	(6)
図版目次	(7)
第Ⅰ章 発掘調査の経過	(8)
第1節 発掘調査の経緯	(8)
第2節 調査の組織	(8)
第3節 発掘日誌	(9)
第Ⅱ章 造 構	(11)
第1節 弥生時代	(13)
(1) 第1号住居址	(13)
(2) 第2号住居址	(13)
(3) 第3号住居址	(15)
(4) 第5号住居址	(15)
(5) 第7号住居址	(17)
(6) 第8号住居址	(17)
(7) 第9号住居址	(22)
(8) 第10号住居址	(22)
(9) 第12号住居址	(25)
第2節 奈良時代	(27)
(1) 第4号住居址	(27)
(2) 第11号住居址	(27)
(3) 第13号住居址	(28)
第3節 時期不詳	(31)
(1) 第6号住居址	(31)

第III章 遺 物	(32)
第1節 土 器	(32)
第2節 石 器	(88)
第3節 土 製 品	(95)
第4節 鉄 製 品	(95)
第IV章 ま と め	(97)

挿図目次

第1図 地形及び造構配置図	(11)
第2図 第1号住居址実測図	(14)
第3図 第1号住居址埋甕炉断面図	(15)
第4図 第2号住居址実測図	(16)
第5図 第2号住居址炉址断面図	(17)
第6図 第3号住居址実測図	(18)
第7図 第3号住居址埋甕炉断面図	(19)
第8図 第5号住居址埋甕炉断面図	(19)
第9図 第5号住居址実測図	(19)
第10図 第7号住居址実測図	(20)
第11図 第7号住居址埋甕炉断面図	(21)
第12図 第8号住居址実測図	(21)
第13図 第8号住居址埋甕炉断面図	(22)
第14図 第9号住居址実測図	(23)
第15図 第10号住居址実測図	(24)
第16図 第10号住居址埋甕炉断面図	(24)
第17図 第12号住居址埋甕炉断面図	(25)
第18図 第12号住居址実測図	(26)
第19図 第4号住居址実測図	(28)
第20図 第13号住居址カマド実測図	(29)
第21図 第4号住居址カマド実測図	(29)
第22図 第11号住居址カマド実測図	(29)
第23図 第11・13号住居址実測図	(30)
第24図 第6号住居址実測図	(31)
第25図 龍文式土器拓影	(32)
第26図 弥生式土器実測図 1住(1~10)	(35)
第27図 弥生式土器実測図 1住(11~14) 2住(15~21)	(39)
第28図 弥生式土器実測図 3住(22~27) 5住(28~30)	(40)
第29図 弥生式土器実測図 5住(31~37) 7住(38~43)	(44)
第30図 弥生式土器実測図 8住(44~52) 9住(53~56)	(47)

第31図	弥生式土器実測図	9住(57~62).....	(51)
第32図	弥生式土器実測図	9住(63~77).....	(55)
第33図	弥生式土器実測図	10住(78~87).....	(57)
第34図	弥生式土器実測図	12住(88~98).....	(61)
第35図	弥生式土器拓影	1住(1~11) 2住(12~23) 3住(24~30).....	(62)
第36図	弥生式土器拓影	5住(31~48) 7住(49~64).....	(63)
第37図	弥生式土器拓影	8住(65~84) 9住(85~96).....	(64)
第38図	弥生式土器拓影	10住(97~103) 12住(104~116).....	(65)
第39図	土師器実測図	4住(1~8).....	(68)
第40図	土師器・須恵器実測図	4住(9~18).....	(72)
第41図	土師器実測図	11住(19~26).....	(75)
第42図	土師器・須恵器実測図	11住(27~44).....	(80)
第43図	須恵器実測図	11住(45~48) 13住(49).....	(82)
第44図	土師器・須恵器実測図	6住(1~7).....	(82)
第45図	須恵器・中世陶器実測図	グリット(1~11).....	(82)
第46図	石器実測図	1住(1~10) 2住(11~12).....	(90)
第47図	石器実測図	2住(13~15) 5住(16~21) 6住(22~23) 7住(24~26).....	(91)
第48図	石器実測図	7住(27) 8住(28~33) 9住(34~38).....	(92)
第49図	石器実測図	9住(39~46) 10住(47~49).....	(93)
第50図	石器実測図	12住(50~52) 13住(53) グリット(54~60).....	(94)
第51図	土製品実測図	(95)
第52図	鉄器実測図	(96)

表 目 次

第1表	主要弥生式土器一覧	(33)
第2表	主要土師器・須恵器一覧	(66)
第3表	主要石器一覧	(88)

図版目次

- 図版1 遺跡遺景
- 図版2 遺構
- 図版3 遺構
- 図版4 遺構
- 図版5 遺構
- 図版6 遺構
- 図版7 遺構
- 図版8 遺構
- 図版9 遺構
- 図版10 遺構
- 図版11 遺物出土状況
- 図版12 遺物出土状況
- 図版13 遺物出土状況
- 図版14 遺物出土状況
- 図版15 遺物出土状況
- 図版16 遺物出土状況
- 図版17 遺物出土状況
- 図版18 出土土器
- 図版19 出土土器
- 図版20 出土土器
- 図版21 出土石器
- 図版22 出土石器
- 図版23 出土鉄製品及び石製品・記念撮影

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区的西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は昭和48年度は上島、東方部落、昭和49年度は東方、村岡、城、山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（小字で言う限子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢、白沢、南小出部落が、昭和54年度は諫訪形区、昭和55年度は諫訪形、井の久保部落が該当しました。

昭和57年度は諫訪形区の鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡の4カ所が該当し、工事着工以前に緊急発掘調査を実施しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、鳥井田遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行ふことにしました。

南信土地改良事務所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかりました。

第2節 調査の組織

鳥井田遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽映士	伊那市教育委員会委員長
調査事務局	三沢 昭吾	伊那市教育委員会教育次長
"	石倉 俊彦	社会教育課長
"	柘植 見	課長補佐
"	武田 則昭	係長
"	沖村 喜久江	主事

発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会员
"	御子柴 泰正	"
調査員	飯塚 政美	日本考古学协会会员

調査員 小木曾 清 宮田村考古学友の会会長
 小池 孝 日本考古学协会会员

第3節 発掘日誌

昭和57年8月2日 雨時々曇 前日、伊那谷に襲来した台風10号が災害の爪跡を各所に残していった。発掘器材の運搬をする。雨のあい間を選んでテント設営を行う。テントを東西に長く三張り張る。これからは暑い日が続きそうなので、テントの横幕はつけずにそのままにしておく。

昭和57年8月4日 晴 久しぶりの晴天であった。午前中は現場は草が繁茂しておったので作業員全員でビーバーや鎌を使って草刈りを実施する。草がジャングルのようになっていたが、作業員が多数であったことと、機械力を導入した為に午前中では終了する。

午後はグリットを設定する。グリットは南から北へA～N、東から西へ1～19とし、一辺を2m×2mと決める。グリット設定終了後直ちにA1より掘り始める。遺物は多量に出土し、住居址の確認が各所にみられた。

昭和57年8月5日 晴 昨日のグリット掘りで確認された住居址を第1号住居址、第2号住居址と決め、拡張を進めプラン確認につとめる。第2号住居址の西側に2軒の住居址が発見され、これを第3号、4号住居址とする。

昭和57年8月6日 晴 第1号住居址、第2号住居址にそれぞれ東西にベルトを残す。連日のグリット掘りの状況より、各所に住居址を確認したのでブルドーザーを入れて耕土剥ぎを実施する。第1号、2号住居址の掘り下げを実施する。2号住居址より石臼が2点出土した。

昭和57年8月7日 晴 前日に引き続いて第1、2号住居址の掘り下げを実施し、夕方までにはほぼ掘り下げを終了する。第2号住居址より鉄製品と手挽き器が出現した。

昭和57年8月9日 晴 第1、2号住居址の北側に3軒の住居址が検出され、これを東側より第5号、第6号、第7号住居址とする。プラン確認に全力を注ぎ込む。午後より3軒の住居址の掘り下げを東西にベルトを残して実施する。

昭和57年8月10日 晴 前日の3軒の住居址の掘り下げを実施、第5号住居址より磨製石器出土、ベルトを残して夕方までに3軒の発掘を終了する。

昭和57年8月11日 晴 第5,



発掘風景

第1章 発掘調査の経過

6, 7号住居址のセクション図作製、同様に第1号住居址のセクション図作製、先の4軒の住居址の断面写真撮影終了。第5～7号住居址の北側をジオレンでかいていると、5軒の住居址が検出され、第8号住居址、第9号住居址、第10号住居址、第11号住居址、第12号住居址と名付ける。第2号住居址のセクション図をとる。第9、11号住居址の掘り下げ開始。第6号住居址の全掘、写真撮影及び実測終了。第1、7号住居址のベルトを取り掘り下げる。

昭和57年8月12日 晴時々曇 第1号住居址の清掃、第2号住居址のベルトをはずし、清掃、第5～7号住居址の清掃をする。

昭和57年8月17日 雨 前日来の雨が続き、本日も雨降りであった。現場作業はできなかったので一日中土器洗いをする。

昭和57年8月18日 晴時々曇 前日の雨降りが激しかったので現場には水溜りが多く、午前中の作業是不可能だったので、前日洗浄した土器の注記を実施する。午後は地面が大分乾いてきたので、第9～11号住居址の掘り下げを開始する。

昭和57年8月19日 晴時々雨 第9号～11号住居址掘り下げ続行、第9号住居址のセクション図作製、第10号住居址の完掘、第8号住居址の掘り下げ。

昭和57年8月20日 晴 朝から第1号～2号住居址、第5～7号住居址、第10号住居址の清掃を済ませて、写真撮影を終了する。第8、11号住居址の掘り下げを行う。

昭和57年8月21日 晴 第8～9号住居址、第11号住居址の掘り下げを実施する。

昭和57年8月23日 晴 前々日と同様な住居址の掘り下げ実施、第1号住居址の実測、第11号住居址の西から北側にかけて住居址が発見され、これを第13号住居址とする。

昭和57年8月24日 晴 第3号、4号、12号住居址のプラン確認と掘り下げ実施、第2号、5号住居址の実測終了。

昭和57年8月25日 晴 第3号、4号、12号住居址の掘り下げ、第6～7号住居址の実測終了。

昭和57年8月26日 晴 第8号、9号住居址の清掃及び写真撮影終了。第11、13号住居址の掘り下げを実施する。

昭和57年8月27日 晴時々曇 雨 第3、4、12号住居址の完掘、清掃、写真撮影終了。第8号住居址の実測。

昭和57年8月28日 晴 土器洗い、第9号、11号、13号住居址の実測

昭和57年8月30日 晴 第3号、4号、10号住居址の実測図、全測図の作製、土器注記。

昭和58年1月～2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ送る。

昭和58年3月 報告書を刊行する。

(飯塚政美)

第II章 遺構



第1図 地形及び遺構配置図

第1節 弥生時代

(1) 第1号住居址(第2~3図、図版3)

遺跡南東端の横吹造跡と接する付近で検出された。耕土直下から深く掘りこまれた堅穴住居址で、二期にわかれ。新址は、N72°Wの主軸方向に長い6.4×5.2mの隅丸方形を呈し、埋土には斜面上方西からの堆積が観察された。壁はほぼ垂直で、旧址の上に各々2~3cmの混ローム褐色土とロームを貼って床面とし、南側でわずか拡張がみられた。主柱穴は方形に配されたP₁~P₄で、主軸に直交方向に長い長円形プランを呈し、柱痕はさらに細長く、P₄で36×10cmを測る。炉は西側柱穴間中央やや外側にある埋葬炉で、周囲に炭・焼土粒が散在するものの炉の外側はあまり焼けていない。遺物は多く、埋土上層からより多く出土した。床面上からは炉の脇に細片となった壺(No.2)中央南東寄りに壺(No.5)のほか、敲打器(No.4)が出土している。

旧址は、新址構築時に柱が移動されず、南側でわずか拡張されたとしてもほぼ同一規模であったのである。主軸方向も同一である。床面はロームを貼ってあり、中央付近は特に堅いが、東側は軟かく貼ってもない。炉は西側柱穴間中央にある埋葬炉で、炉の外に接する土は強く焼けている。床面は中央に主軸と同方向に並ぶ浅いP₅~P₇、南東隅に壁との間に浅いP₁₀を持つP₉がある。前者のうちP₆・P₇の内面は貼られ、特にP₇は堅い。後者は入口施設であろう。西壁外のP₁₂には径14cmの柱痕が観察されており、本址に属する柱穴であろう。以上の3施設が新旧どちらの住居址に伴うかは明確にできない。旧址に伴う遺物は炉体土器のみである。

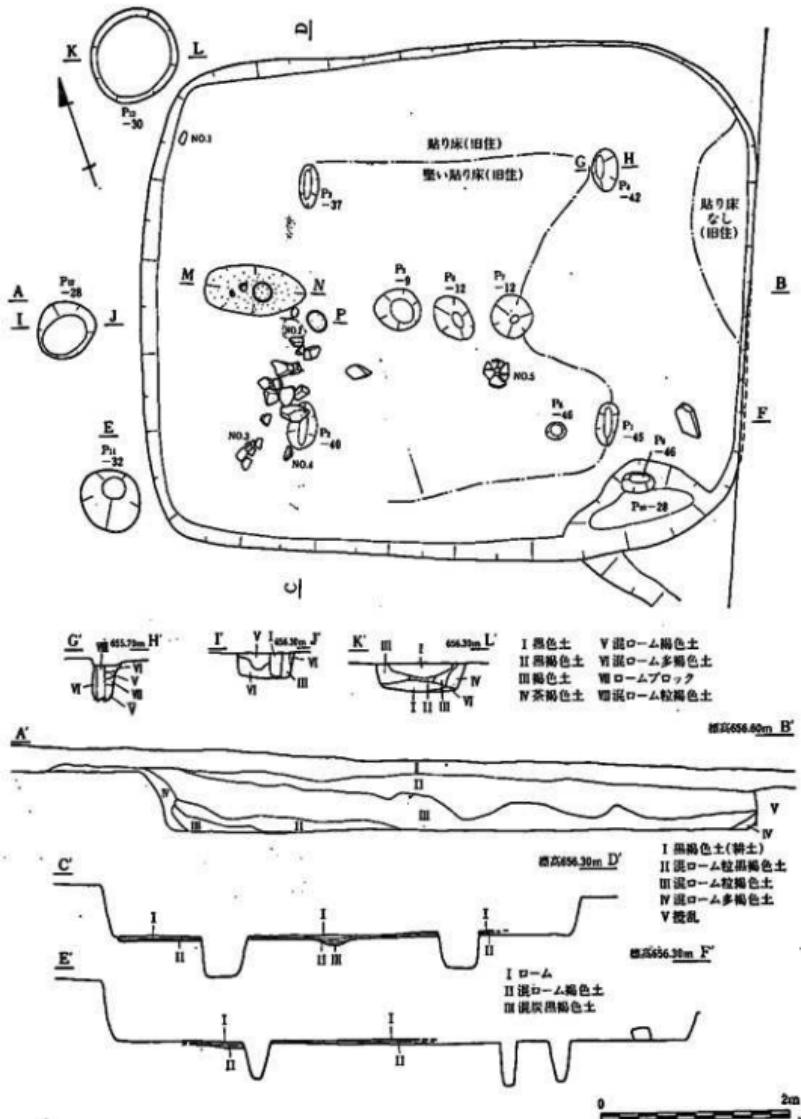
遺構と遺物から本址は弥生時代後期島式期の連続する住居址である。

(小池 孝)

(2) 第2号住居址(第4~5図、図版3)

本址はA・B・C—10, 11, 12, 13グリットの耕土下約20cmのところに検出された。平面プランは、長軸で6.73m、短軸で4.8mの規模をもつ隅丸長方形を呈する。主軸方位は、S—78—Eを示す。壁高は、39cm~67cmを測り、ほぼ垂直に立上り、壁面は堅く良好である。周溝は南側中央に僅か検出され幅15cm前後、深さ約4cmを測る。床面は概ね平らで、やや東に傾斜、比高差は10cm前後。床面は全面堅く踏み固められてはいるが、南側半分は床面に小さな凹凸があり、やや軟弱気味のところも観察された。覆土はⅦ層に埋っており覆土中には遺物は甚少で、石包丁、紡錘車、土器片など出土。床面の中央部には直径10cm~30cmくらいの花崗岩の丸石が、約35個黒土と共に堆積されていた。床面からの遺物は西側で鉄片、櫛状用具による文様のある土器片、中央付近からミニチュア土器の粗製品が出土している。主柱穴は4個長方形に位置し、P₁・P₂・P₃・P₄である。P₁は62×40~39cm、P₂は34×23~52cm、P₃は32×16~53cm、P₄は52×14~45cmの規模で共に直にロームを掘り込み南北に長い。P₅~P₇は主軸の線に直列して住居の間仕切という説もある。P₁₁は87×51~9cmを測り土器片が出土している。炉は東側中央に位置し、埋葬は検出されなかった。

炉内の地層から埋葬炉であるか地床炉であるかは、発掘時点では判明できなかった。住居内の数多いビットは内部施設の柱穴であり、住居の壁外50~100cmの位置にあるP₁₂~P₁₃は建築上の柱穴と考えられ、中でもP₂₃・P₂₄・P₂₅・P₂₆の中に二重のビットが掘られているが、これらは母屋柱の



第2図 第1居住址実測図

跡だと言う説もある。



(3) 第3号住居址

(第6~7図、図版4)

本址はA2, A1, A・

B-15, 16, 17グリッ

トに検出された。

第3図 第1号住居址埋廻炉断面図

西側壁付近で僅か第4号住居址に切られたが、床面は残存した。上部は切り合いも確認できない程度耕作による破壊がなされて、双方の遺物の移動が認められていた。平面プランは長軸で5.9m、短軸で4.15cmの規模をもつ隅丸長方形を呈す。主軸方位はN-14°-Eを示す。

壁高は20~39cmを測り、ほぼ直立に立上っていた。周溝は検出されず、床面は概ね平らで堅く踏み固められ良好であったが、やや東側に傾斜し、東壁付近は軟弱気味になっていた。床面の西北隅付近は細かい礫層が露出し、中央西側は一部貼床され堅くなっていた。主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4カ所で、P₁は46×21~50cm、P₂は40×27~44cm、P₃は33×26~44cm、P₄は40×20~44cmを計測する。柱穴は弁生式住居として一般的な形態をなし、柱穴との間隔は、南北で3.3m、東西で2.2mを測る。

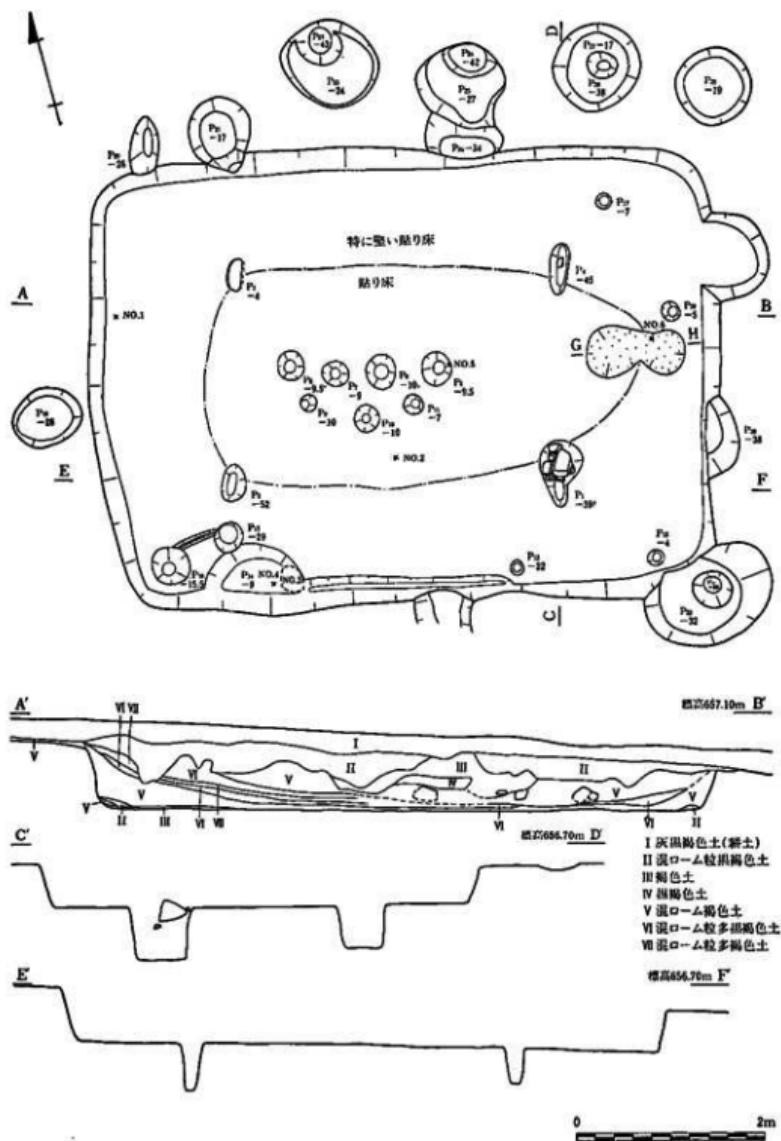
中央部のピット群として、主軸の線にP₅~P₈があり、直径30cm前後、深さ6~9cm、底は丸底で間仕切とも言われている。このほか3カ所にピット群があるが内部施設に關係をもつものと考えられる。炉は北寄りの中央にあり、埋廻炉で2個の窯が正位の状態で連なり床面より約6cm下って埋設されていた。土器は2個とも無文で、南側が後から埋設されたと思われ、直径17.2cmを測り、底部は欠損している。北側のものは、口縁及び底部が欠損して胴部のみになって全体では4分の1個体が残存、胴部の直径は17.5cmを測る。この2個の埋廻は同時に使用したか否かは、判明しないが、ここでは破損によって、その横に埋めたものと考える。

(小木曾 清)

(4) 第5号住居址 (第8~9図、図版4)

本址は調査区のほぼ中央E・F・G-8, 9, 10グリット内に検出された。住居址の南西部の一角を第6号住居址に切られたが、覆土約20cmくらいでとどまり難を免れた。平面プランは長軸で5.2m、短軸で4.4mの規模をもつ隅丸方形を呈す。主軸方位はS-78°-Eを示す。壁高は20~50cmを測り、東側が低く、壁面は礫層を掘り込んだ為、南壁面は小礫、北、西、東側は、小礫から15cm大の石が入り崩れ易く凹凸が甚だしい。周溝は南側一部にあり、幅10~17cm、深さ5cm前後を測る。床面は礫層の上に全面貼床され堅く踏み固められていたが、一部北側及び東側壁下付近は剝れて礫層が現わっていた。

主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄ではほぼ四角の位置に掘り込まれ、P₁は50×20~37cm、P₂は32×15~42cm、P₃は40×18~45cm、P₄は42×17~42cmを計測する。主軸の方向に一連のピット群P₅・P₆・P₇が検出され、規模は35~44cm、深さ10cm位、丸底で浅くなっている。内部施設として間仕切りがあったところとも言われている。P₈・P₉・P₁₀の柱穴群は内部施設でも仕事場に相当する台



第4図 第2号住居実測図

石を据えている。覆土は三層からなり、単純な土層である。覆土中遺物の出土は少なかったが、床面近くから多くの出土が見られ、特に中心より南側に多い傾向を示した。床面上から出土した遺物で復元可能なものは No. 4, No. 5, No. 7, No. 8 があり、いずれも壺で樽状用具で施した文様が画かれていた。炉は埋甕炉で、P₁・P₄の中央東寄りに位置し、100×45-35cmの落ち込みの中央に床面と同レベルで埋設され、地層断面はIV層に区分されていた。埋甕の口縁部は39cmを測り、底部は欠損し、中には炭混りのローム褐色土が入り、甕の周囲は焼土になっていた。

(小木曾 清)

(5) 第7号住居址(第10~11図、図版5)

時期不詳の第6号住居址の西に接する竪穴住居址で2時期にわかれれる。新址はN102°Eの主軸方向に長い6.4×5.5mの方形を呈する。旧址床面上に1~2cmの黒褐色土を、旧炉上面、東側旧柱穴上面とその付近に混褐色土ロームを貼り、特に南と東側で拡張してあるが、床面自体の詳細は明らかでない。壁はほぼ垂直で最も高い西側で検出面から44cmを測る。主柱穴は方形に配されたP₁~P₄で、東側では旧柱穴より外に配してある。いずれも底に石を持つが、本址柱穴下面付近の土層は砂礫層であるものの、その状態から柱の後詰とも解されよう。炉は東側柱穴間中央外側にある埋甕炉で、炉の外側の褐色土が焼け、炉内に多量の炭が検出された。炉内以外に遺物は少ない。

旧址はN81°Wに主軸方向を持つ、新址よりやや小形の方形プランを呈する住居址で、約5.5×5.0cmの規模を持つと思われる。南壁のみが壁直下の、周溝の存在により明らかである。床面はほぼ全面貼られているが、東側はない。炉は、西側柱穴間中央の埋甕炉で、炉の外側は強く焼けているが、土器は改築時に抜かれ、胴下半の無文部をわずか残すのみである。主柱穴は方形に配されたP₂・P₃・P₅・P₆で、主軸と直交方向に長い長円形を呈する。床面中央に内面を貼った浅いP₁₃・P₁₄がある。南壁下のP₈・P₁₂は位置から、それぞれ旧址・新址に属し、入口施設と何らかの関係を持つものと解される。旧址伴出遺物に時期決定の材料が無いが、造構と遺物から、弥生時代後期島式期に連続して営まれた住居址であろう。

(小池 孝)

(6) 第8号住居址(第12~13図、図版5)

本址は本遺跡のほぼ中央の北寄りに位置に検出され、東側には第11号住居址と第13号住居址が接近し、西側には第7号住居址がある。プランは隅丸方形でローム層まで掘り込んだ竪穴住居址である。その規模は、東西5m50cm、南北4m35cmを測る主軸方向は概ね、Wの方向を指す。壁はほぼ垂直に近い角度で、高さは東西共に同一の40cmで明確である。

床面は中心部が広く貼床で固く良好であるが壁近は小さい砂混りで多少軟弱の所もあり凹凸が僅かにある。壁外、両側に2カ所、北側に2カ所、東側に2カ所、経40cm前後、深さ11cm~34cmのピットあり、本址に關係あるものと考えられる。

柱穴は梢円形のものが、4カ所等間隔に検出され、P₁は20×40cm深さ36cm、P₂は20×30cm深さ55cm、P₃は40×20cm深さ36cm、P₄は50×20cm深さ56cmである。炉は西側の柱穴間の中心部にあり床面より僅かに低くした埋甕炉である。径25cmの土器で、口縁部と底部が欠損している。この炉を中

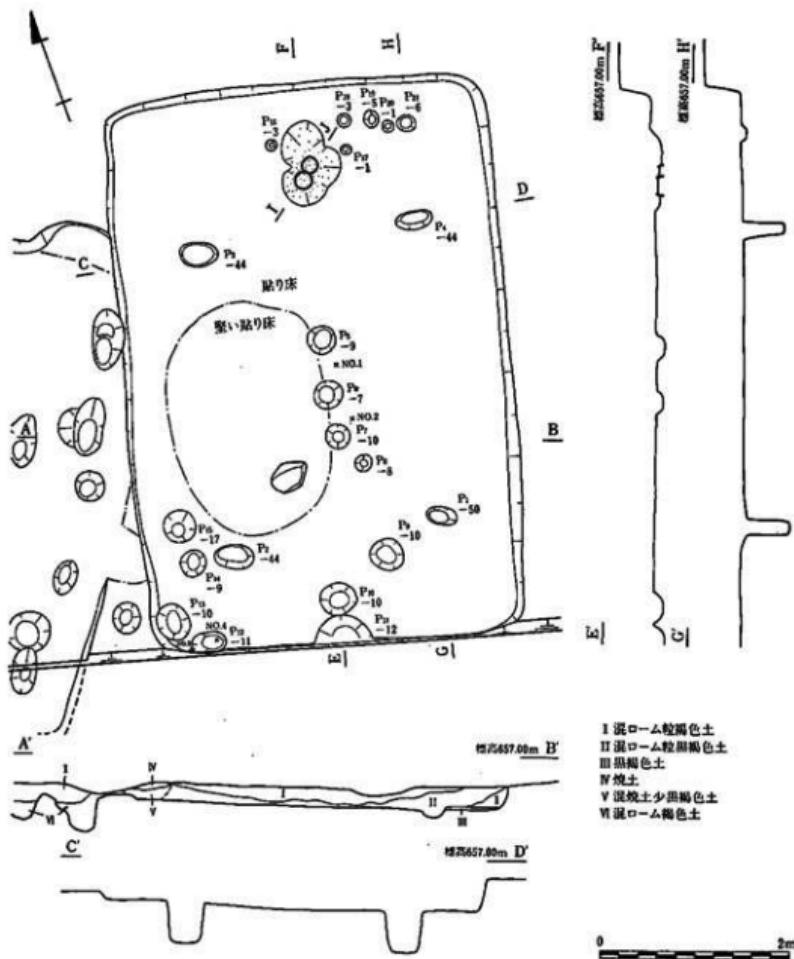
第5図 第2号住居址炉址
断面図

心に、50cm大のところが焼土と灰で固くなっている。

西側の壁ぎわに径20cm、深さ8cm大のピットが4カ所南北に並び、中心部に同大のもの1カ所、東側に径50cm×70cm、深さ16cm～24cmのものが検出され、北東の隅には食料の貯蔵穴と思われる深い大きな穴が掘られている。

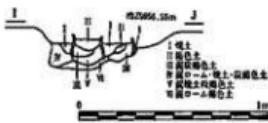
本住居址は出土遺物よりみて、弥生後期のものと考えられる。

(根津清志)

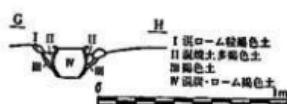


第6図 第3号住居址実測図

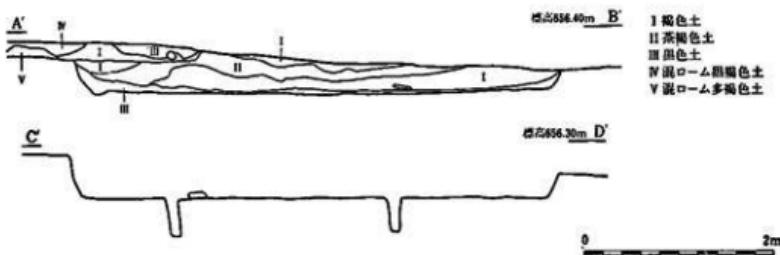
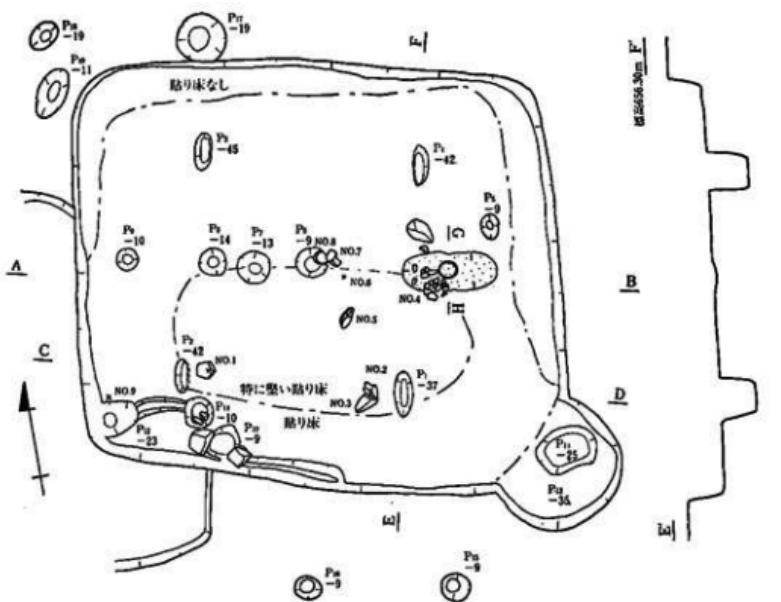
第1節 弥生時代



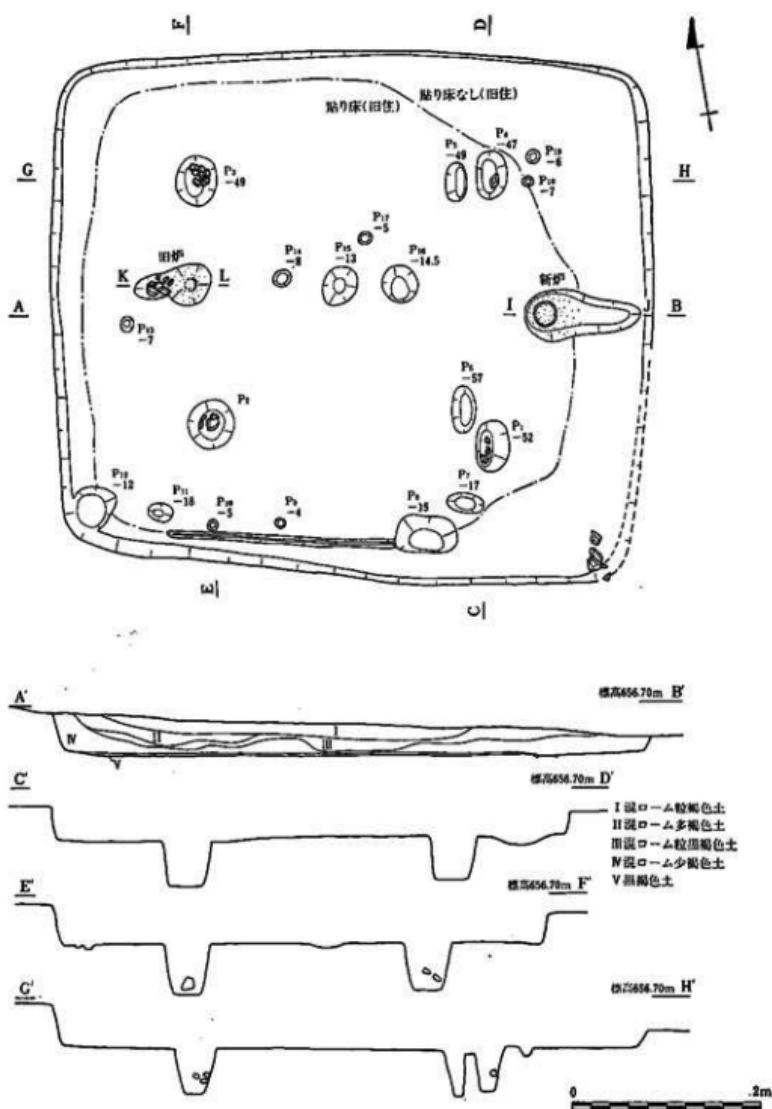
第7図 第3号住居址埋立断面図



第8図 第5号住居址埋立断面図

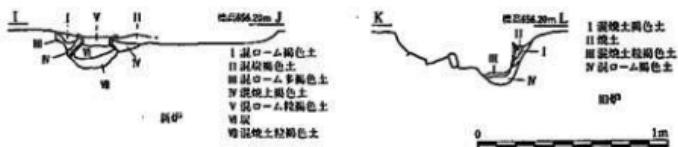


第9図 第5号住居址実測図

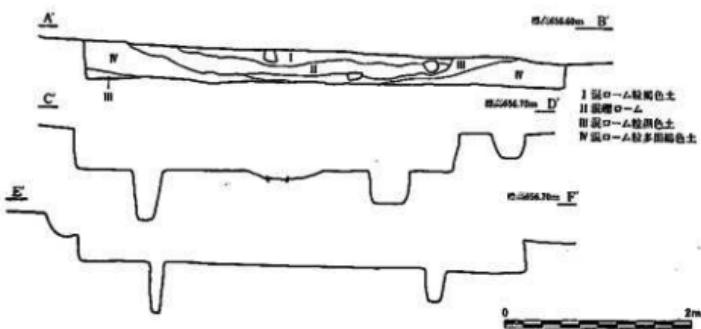
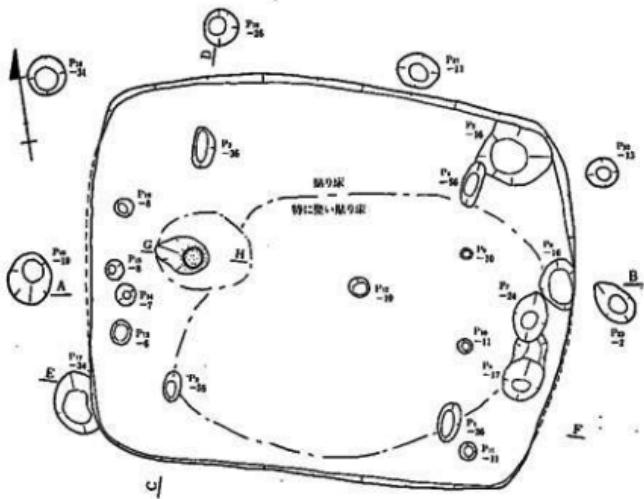


第10図 第7号住居址実測図

第1節 弓生時代



第11図 第7号住居址埋窯断面図



第12図 第8号住居址窯断面図

(7) 第9号住居址(第14図、図版6)

第9号住居址の規模は、東西方向の上面径が6.97m、下面径6.7m。南北方向は上面径が6.3m、下面径6.5mを示し、東西方向に長い隅丸方形の竪穴住居址

を形成していた。本址に隣接する遺構としては南側に第10号住居址、南東方向に第8号住居址、東側に第11号住居址、第13号住居址がある。

壁はほぼ垂直においており、全面的に壁面に礫の露出が目立った。壁高は台地面が北西から東の傾斜のために、西、北、南は当然のことながら切り込みを深くしており、西壁は60cm、東壁は16cm、北壁40cm、南壁は38cmくらいを示していた。

床面はローム層の叩きで、礫が極めて多く混入しており、凹凸が顕著であった。礫種は花崗岩や変成岩が大部分であった。床面中の石はローム層中にくい込んだ状態で発見された。この状況は敷いたものとは異っている。つまり、このロームは水成ロームと思われる。

ピットは18カ所検出されたが、主柱穴と思われるものはP₁・P₂・P₃・P₄である。壁外ピットとしてはP₁₅・P₁₆・P₁₇・P₁₈が考えられる。

炉はどこにも発見されなかった。つまり埋甌炉の跡もなく、焼土の存在もまったくなかった。この点に関して疑問が多く潜んでいる住居址であろう。

櫛土の上層面に土器が一面に敷いてあり、一種の土器層のような状態で発見された。このことはいわば住居址廃絶時に何かの理由で土器を捨てていったのであろう。本址は弥生後期中島式の住居址と思われる。

(飯塚政美)

(8) 第10号住居址(第15~16図、図版6)

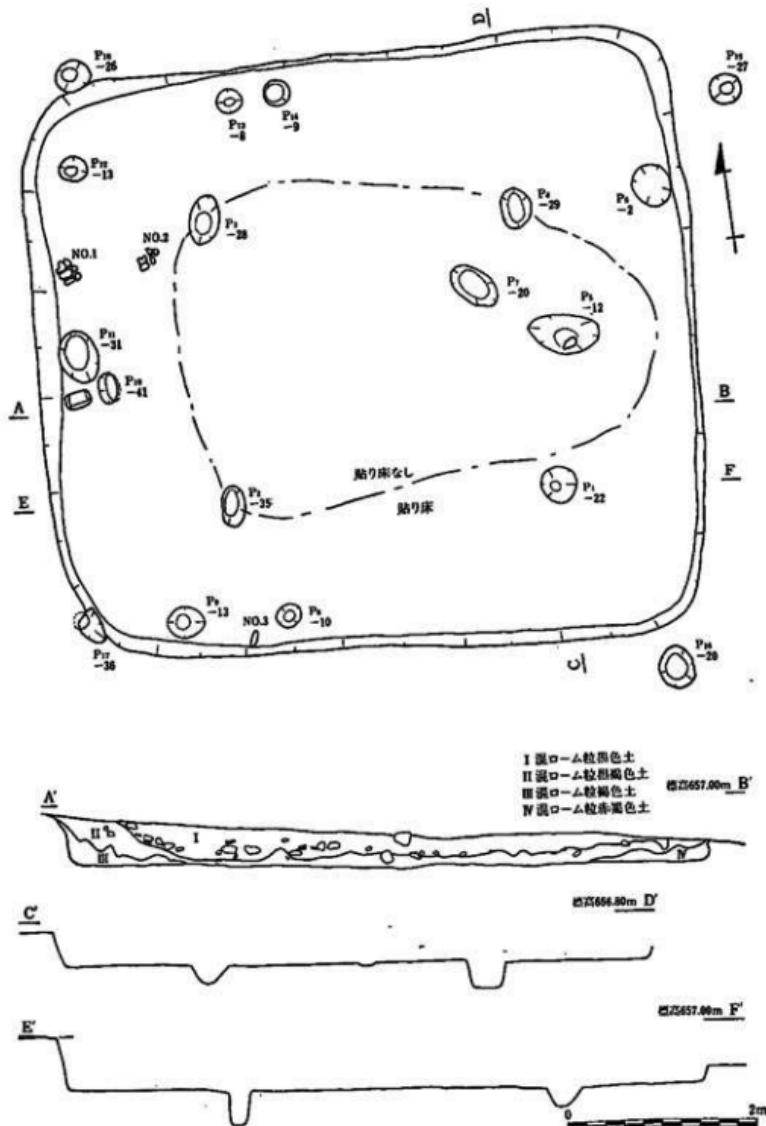
本址は今回の調査地域では最西端に位置し、南側に第3号住居址、第4号住居址、東側に第8号住居址、北側に第9号住居址が隣接して存在している。本址はローム層への掘り込みに黒褐色土の櫛土が堆積していたため検出は比較的容易であった。表土面より30cmくらい下った礫混じりのローム層を掘り込んだ隅丸方形プランの竪穴住居址である。規模は南北5m、東西5.8mを測る。壁について、ほぼ垂直に掘り込まれており、その高さは20cm~45cmくらいを示している。

床面は全般的に水平だが、ブロック的に凹凸があった。組成状態はローム層のかたい叩きである。南壁から西壁にかけてと、北壁の東半分から東壁にかけて幅10cm、深さ10cmくらいの周溝が回っている。ピットは全部で22カ所と数多く発見されたが、主柱穴となるのはP₁・P₂・P₃・P₄の4本で、いずれも南北に長い形状を呈している。炉は東壁に近く、P₁・P₄の中間地点に存在し、新炉と旧炉と二つあった。いずれも埋甌炉の形態を持ち、正位の状態で使用されていた。旧炉は18cm直徑、新炉は27cm直徑の甌を使用し、いずれも下部は欠損していた。旧炉の西側には枕石を添えてあった。これらの炉の周辺には多量の焼土が検出され、長い時期にわたって本址が利用されたことを物語ってくれた。本址からはかなりの量の遺物が検出されたが、時代決定になるのは新炉に利用された甌であろう。この甌は下伊那地方にその初源を持つ弥生時代後期の中島式土器に最も類似している。外面はかなり焼けたとみて、赤く変色していた。

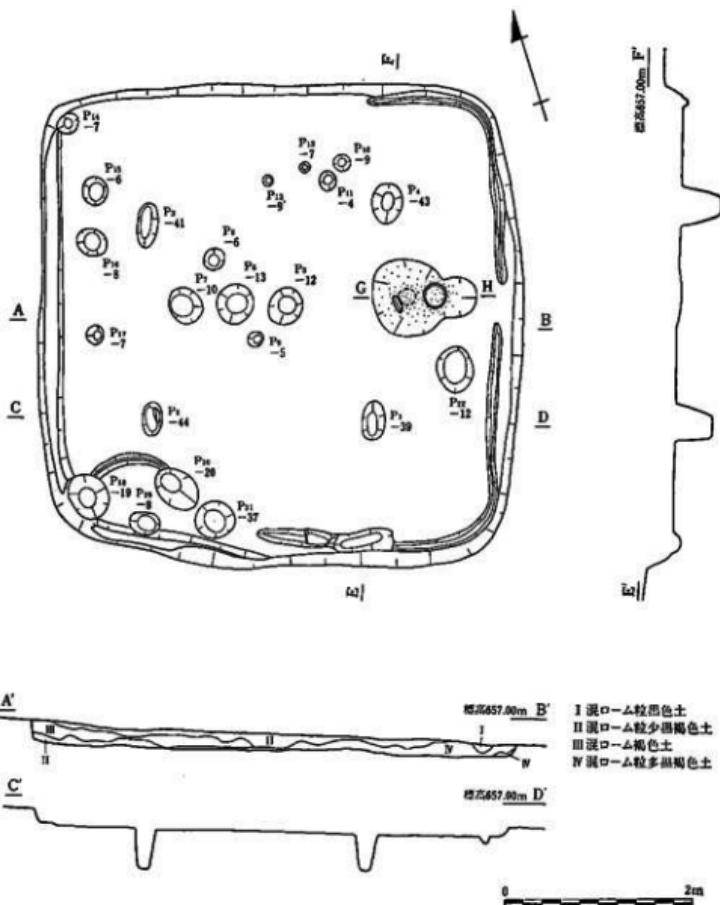
(飯塚政美)



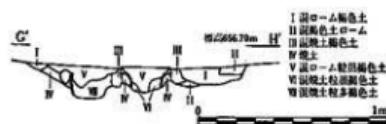
第13図 第8号住居址埋甌断面図



第14図 第8号住居址実測図



第15図 第10号住居址実測図



第16図 第10号住居址壁堀断面図

(9) 第12号住居址(第17~18図、図版7)

本址は調査地区の最東部に位置している。南側に第1号住居址、西側に第5号住居址、北側に第11号住居址が相並んでいる。

南北4.25m、東西6.40mの規模を持ち、東西にやや長い隅丸長方形を呈し、表土面より50cmくらい下ったローム層面を掘り込んでいる。壁面は全般的に垂直気味で、壁面下部には縫隙を多く含み、凹凸が顕著であった。壁高は西側が最も高く、70cm近くもあり、そのほかでは40cm前後を示していた。

床面はローム層面をそのまま用いており、それをかたくたき床面としての体裁を整えている。ブロック的な凹凸があり、一部分は貼床になっていた。壁直下に南から東、北へと回って、幅20cm、深さ10cmくらいの周溝が設けられている。

ピットは全部で14カ所検出されたが、これらのうちで主柱穴となり得ると思われるものはP₁・P₂・P₃・P₄の4本である。これらの4本は南北に細長く掘られている。P₁・P₂・P₃・P₄は割合に直線状に並び、しかも本址の大体中央部に位置することからして一種の間仕切り的なピットではないだろうか。

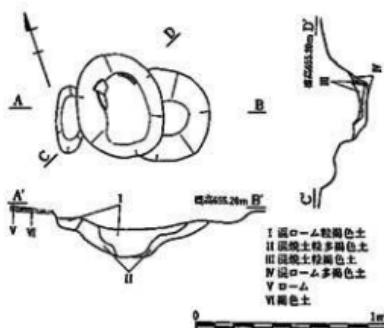
炉は本址の東壁に寄ったP₁・P₄の中間点付近にあり、この場所には南北50cmくらい、東西70cmくらいの範囲で焼土が厚く堆積していた。床面を精査した段階では甕は検出されなかったが、炉の断面を実測するために掘り下げていくと、下部に埋甕炉に使用したであろうと推測できる土器の底部が数片出土した。この状態からして、本址の構築時には埋甕炉の形態を有していたことは事実であろう。埋甕炉の埋設土層は上から順に混ローム粒褐色土、混焼土粒多褐色土、混焼土粒褐色土、混ローム多褐色土、ローム、褐色土であった。

遺物は多量の土器片が出土したが大部分は櫛描波状文を付けてある弥生後期であり、したがって本址もこの時期に比定できる。これらの土器片を編年的に細別すると座光寺原式に属しているものと思われる。

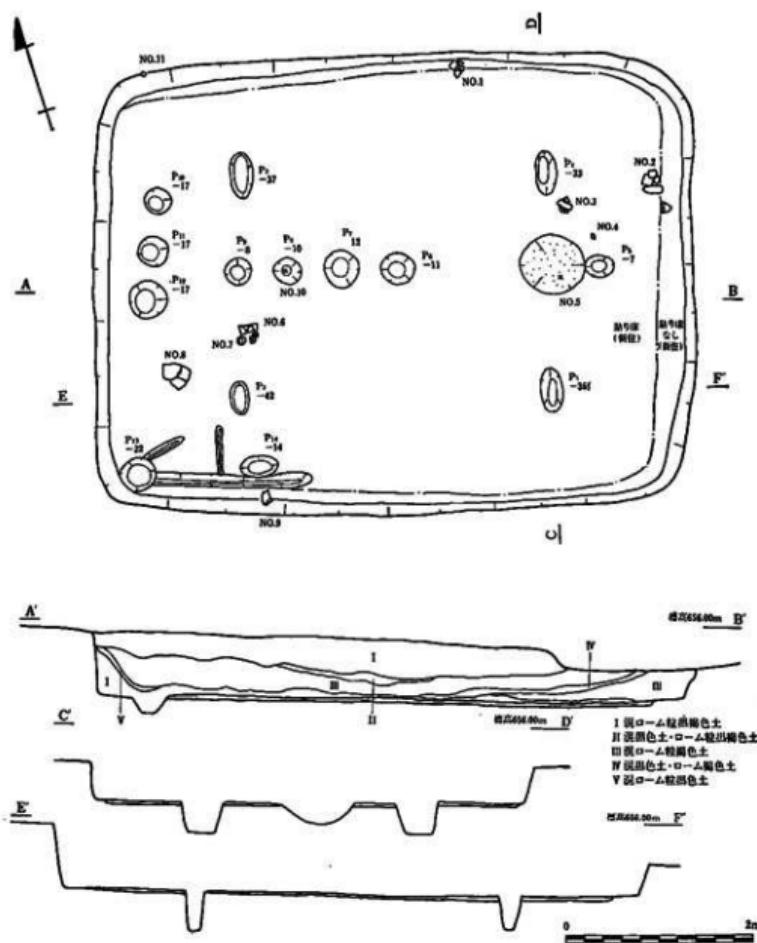
遺物のうちで土器は前述したようであるが、土器についての文様及びその大きさについて詳細なことを調査したければ、第34図(88~98)を参照して下さい。そうすればより細分された編年づけができると思う。石器としては、小形円形状石器・磨石が出土している。

以上で弥生時代住居址の節は終りである。

(飯塚政美)



第17図 第12号住居址埋甕炉断面図



第18図 第12号住居址実測図

第2節 奈良時代

(1) 第4号住居址(第19、21図、図版7)

本址は調査区の最南西のA2・A1・A-B-17-18-19グリット内に検出された。第3号住居址の西侧に接し、南側は調査地区外、西側は廃土の置場になったため残念ながら全貌を知ることができなかった。平面プランは前述の如く一部未確認のところもあったが、北壁の西のコーナーと、東側のコーナー、及び南東コーナー部分が確認されたことから推測して、長軸約5m前後、短軸で約4.2m前後の規模を持つ隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位はS-57°-Eを示す。床面は北西の部分が、やや平らで良好であったが、他は全面砂礫層の上に僅かのロームがある程度で擾乱によって大小の凹凸が甚しい。壁高は北壁のみであったが、19cm~30cmを測定する。

柱穴は新旧二通りに分けられ、P₁・P₂・P₃が一つの同一グループで、古い方に属し、P₁は90×30-49cm、P₂は62×30-41cm、P₃は50×25-39cmで、共通している点ではそれぞれのピットの方向が弥生式住居址と似て、ここでは南北に細長く、ほぼ直に穴を掘り込み底部がやや平らになっている。他方の新しいと思われるグループは、P_{1'}・P_{2'}・P_{3'}で、P_{1'}は63×55-17cm、P_{2'}は64×35-28cm、P_{3'}は46×46-19cmで、やや不整形の丸形で底は浅く丸底になっている。

カマドは東壁に第3号住居址と接して2カ所No.1とNo.2が検出され、No.1は擾乱により上部は破損したが、石組の2個の石が残存し石組粘土カマドと推定される。No.2の南側のカマドは、焼土が散在し、土器片も出土したがカマドの様式は不明で、柱穴部も古い方の前者に属すると思われる。

(小木曾 清)

(2) 第11号住居址(第22~23図、図版8)

本住居址は鳥井田遺跡の北東の隅で中央部に検出されたものである。南側には弥生時代の遺構の第8号住居址が接している。

プランは隅丸の方形でローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。規模は南北7m、東西6m20cmを測る。主軸方向は、E-10-Sの方向を指す。壁は北東の一部は用地外のため不明であるがほかは垂直で低く、東側20cm、西側25cmである。床面は中央部に面積の4分の1ぐらい貼床が残っており小砂利混りで固く叩いてある。中央より北側一部は擾乱状で軟くよくない。10cm~20cm大の自然石が数多く放置してある。床面に3カ所焼土があり、その部分が固く残存している。本遺構は、第13号住居址と重なっているために柱穴と思われるものが数多く有るが、等間隔で本址のものと思われるものはP₁~P₄である。円形と梢円形があるが平均径40cm深さ50cmぐらいである。カマドの位置は、東側の壁の中央に石組粘土でかためのものである。その規模は一部破壊されているが残部よりみて、東西1m50cm位、南北1m前後の長方形のもので、20cmぐらいの自然石11個を組み合せ粘土で固め構築したものである。カマド付近は残灰と赤い焼土が広がっている。

そのほか本址のものか第13号住居址のものか不明であるが、中央より北寄の所に径1m70cm、深さ21cmの大穴が検出された。

第二章 遺 墓

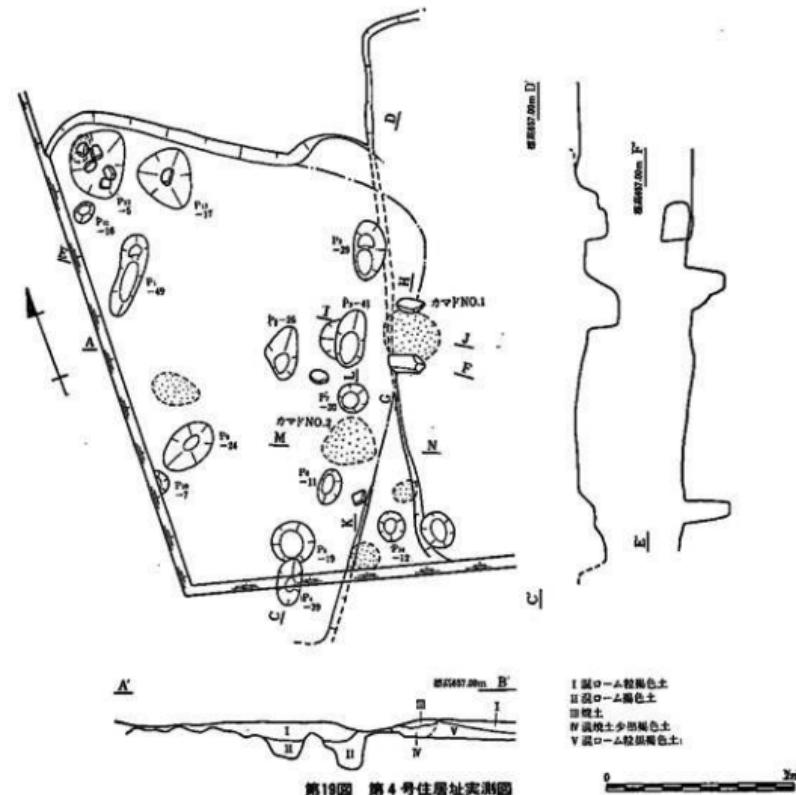
覆土中より、土師器の甕と壺の破片が多量出土した。床面のカマドの近く灰留りと思われるところより、土師器の甕の破片、須恵器の甕の大きな破片等が多く出土した。本址は出土遺物よりみて、奈良時代の造構であると思われる。

(根津清志)

(3) 第15号住居址 (第20, 23図, 図版8)

本址は造跡地の北縁の中央で第11号住居址にほとんど切られていて、西側の壁の一部とカマドが残存しているのみである。プランは推測であるが隅丸方形でローム層へ掘り込んだ竪穴住居であり、その規模は不明である。残存の壁は垂直に近く、カマド付近で27cmを測る。床面は僅かであるが残っていて、軟弱である。

柱穴は第11号住居址の中央にあるものが本址のものと考えられ他は不明である。カマドは10cm～30cm大の自然石5個を組み合せ粘土で固めたもので西北の壁外に作られている。遺物はカマドの付近より、須恵器壺完形品1個と、土師器甕の破片が出土し、奈良時代の住居址であると思われる。



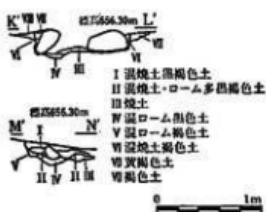
第19図 第4号住居址実測図

最後に全面発掘が可能であったならば、さらに奈良時代の竪穴住居址は数多く検出されたのに相違ないものと思われる。

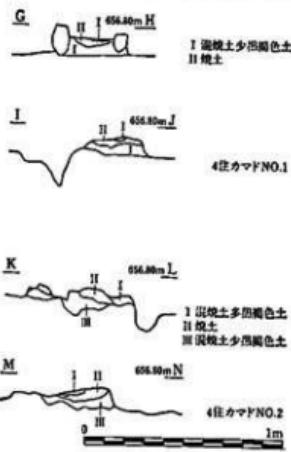
平安時代の竪穴住居址からよく出土する灰釉陶器類の出土は1点もなかった。

いずれにしても、単独に奈良時代の竪穴住居址が検出されたことは伊那市内でもまれであると思われる。

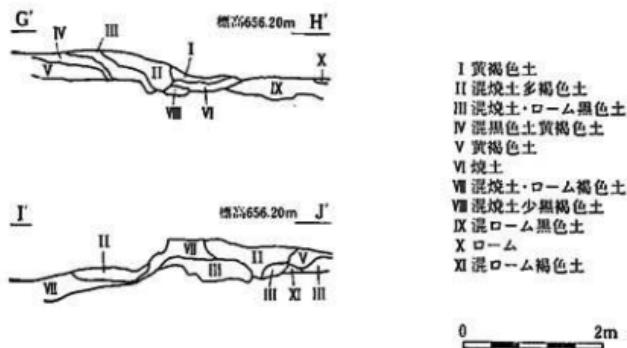
(根津清志)



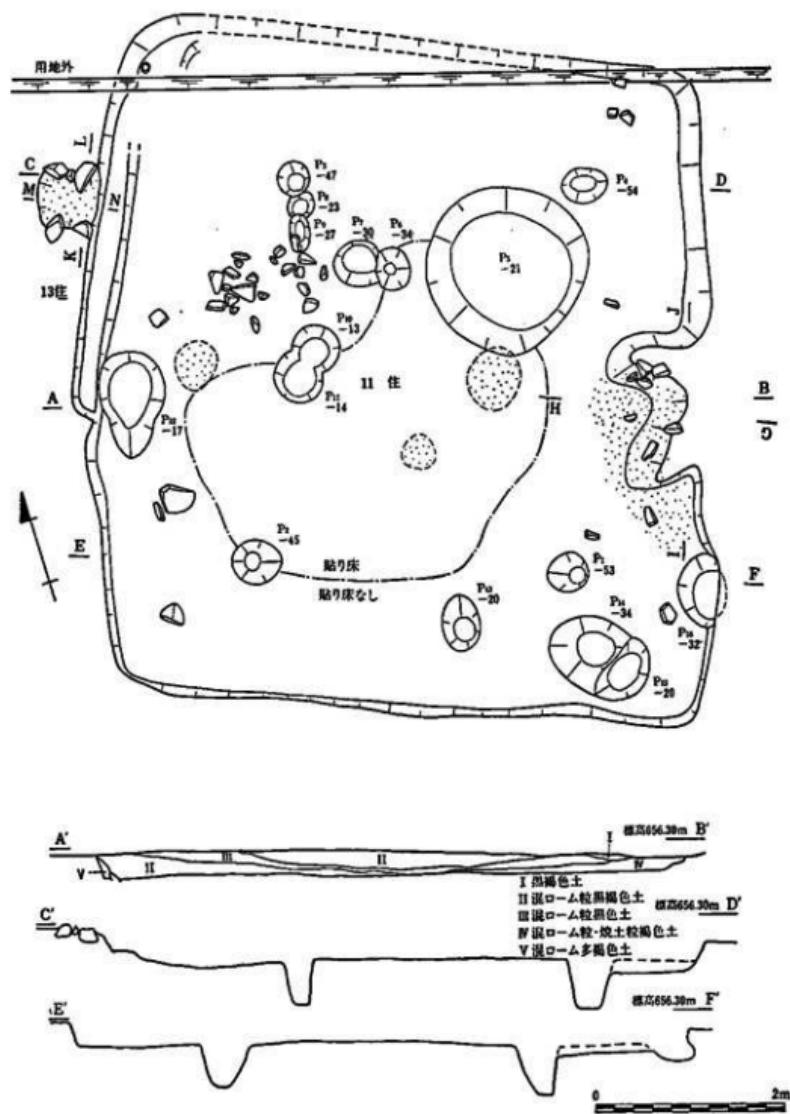
第20図 第13号住居址カマド実測図



第21図 第4号住居址カマド実測図



第22図 第11号住居址カマド実測図



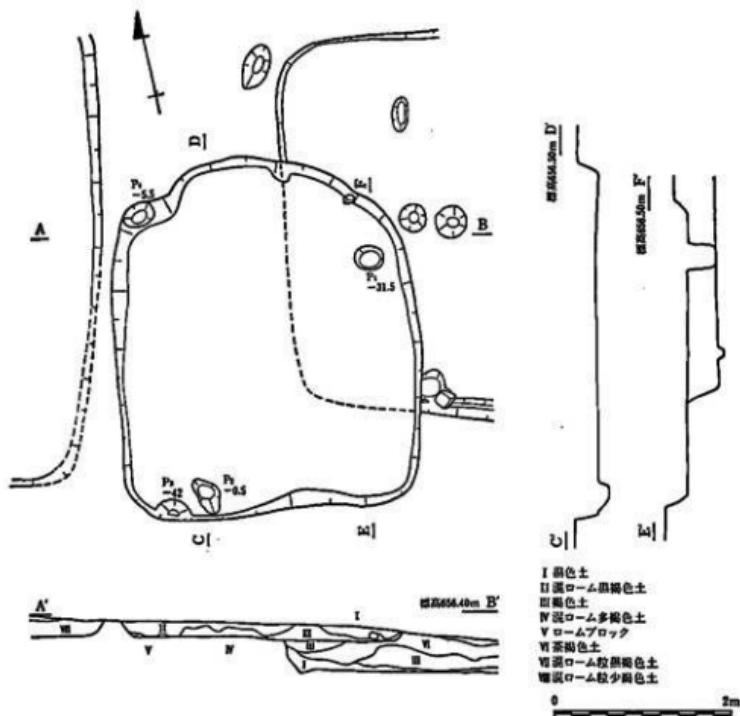
第23図 第11・13号住居址実測図

第3節 時期不詳

(1) 第8号住居址(第24図、図版8)

本址はD・E・F-9・10・11グリット内に検出された。東側で第5号住居址の西側一部を切り、西側では第7号住居址と接するが、ちょうど壁になる部分が耕作による搅乱で、プランの確認が困難であったが、南北の両壁がほぼ判明したのでプランの確認ができた。平面プランは長軸4.05m、短軸3.5m前後を推測する規模の不整形隅丸長方形を呈するものと思われる。壁高は16~27cmを測り、南壁はほぼ垂直に立上っているが、他はややゆるやかな傾斜になっている。壁土は2層よりなり、床面は、小礫とロームで固めた状態で堅く、第5号住居址の部分は貼床になっている。柱穴はP₁のみで、31×27-31.5cmの円筒形をなす。P₁は40×25-42cmで用途不明、なお床面には全面鉄分が沈澱し厚い所で2mmを測る。その他カマドの施設も検出されず、床面から土師器・須恵器の破片が出土したが、時期は不詳である。

(小木曾 清)



第24図 第8号住居址実測図

第Ⅲ章 遺物

鳥井田遺跡内13住居址及びグリットから出土した遺物は相当量に達している。その中でも数量の最も多いものは土器である。土器以外には石器、鉄製品、土製品がある。土器のうち、ある程度数量が把握できるのは縄文後期土器、土師器、須恵器、中世の天目茶碗であって、弥生後期土器は膨大を極め、その数量は未だ解決されていない状態である。以下に各種遺物の観察結果を記すが、記述方法は遺物を個別的に取り扱い、その属性を統一した表現で処理するために表を多用した。

数片の出土の場合は直接文章にて表現した。遺物の絶対数が多いために、遺物の個別記載のみで予定の紙数を超過するので一部割愛した。したがって、その内容はやや单调気味となっているが、御容敬願いたい。

第1節 土 器

(1) 縄文式土器

鳥井田遺跡内からはここに掲載した2片の縄文式土器片がほぼ単純な型で出土したので、文様の分析、出土地点の偏向性等々の観察ができず、単に土器片が出土したという結果だけに終わってしまった。

第25図(1~2)はグリット内より出土した縄文土器片である。(1)は縄文地(拓影では不明瞭)にヘラによって三角形状や円形状に沈線を配し、全体的に磨消文様風に意匠してある。茶褐色を呈し、焼成は良好、少量の長石を含んでいる。縄文後期掘の内式に含まれよう。

(2)はわずかに外反する口縁部破片である。文様構成を考えてみると極めて簡単である。無文地に口縁上部に横位に太い沈線を二条走らせている。胎土は長石粒を含み、縄文後期から盛行する精製土器の一派と思われる。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好となっている。加曾利B式の一派と考えられる。

(2) 弥生式土器

今回の発掘中最も多量に出土した土器である。前述したように紙数の関係で表を用いて説明することにする。説明項目は実測図番号・出土地点・器形・法量・口縁部・胴部・底部・色調・胎土・焼成・出土遺構・備考等である。最初に住居址番号の早い順に実測図を掲載し、それに準じて表によつて説明を加えていく。後の方には拓影を前述したように住居址番号の早い順に掲載する。ただし、紙数の関係上拓影の説明は今回割愛させていただきますので御承知下さるようお願い致します。



第25図 縄文式土器拓影

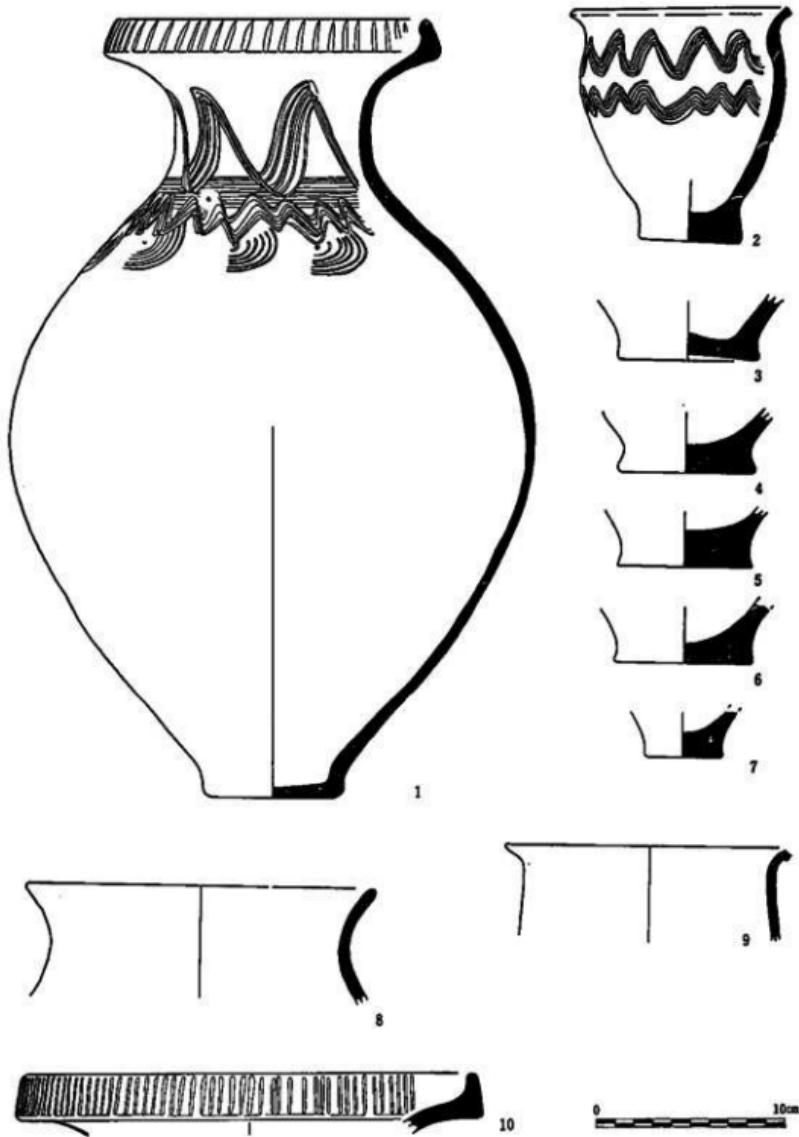
(飯塚政美)

第1表 主要弥生式土器一覧（法量は現況を記す）

実測図番号		第26図(1)	第26図(2)	第26図(3)	第26図(4)	第26図(5)
出土地点	地點					
	トレンチ					
	区					
	器 形	壺	甕	甕	甕	甕
法量	口 線 径 (cm)	16.8	11.3			
	器 高 (cm)	41.0	12.1	3.1	3.2	2.9
	最 大 周 長 (cm)	28.0	10.7			
	壁 厚 (cm)	0.7	0.7	0.9	0.9	0.8
	底 径 (cm)	7.0	5.5	7.6	7.4	7.2
口 部	平縁でくの字状に曲った口縁で上部に縱位の沈縫が施してある。波状文・横位の沈縫、波状文、ループ文の四つの施文帯に分けられる	平縁でわずかに外反し、6条による波状沈縫文が横位に走る。施文方向は向かって右から左である 外面横位ナデ輪縫底	欠損	欠損	欠損	
胴 部	一部欠損 外面縦位ミガキ 内面荒い斜位ナデ	外面縦位ナデ 内面横位ナデ 輪縫底	無 文 外面縦位・横位ナデ 内面ザラザラ 大部分欠損	無 文 外面上部縦位ナデ 下部横位ナデ 大部分欠損	無 文 外面上部縦位ナデ 下部横位ナデ 大部分欠損	
底 部	平 底	平 底	平 底	平 底	平 底	平 底
色 調	赤褐色	灰茶褐色	黒褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色
胎 土	雲母・石英・長石	雲母	雲母・石英・長石	雲母・石英	雲母・石英・輝石	
燒 成	普通	普通	良好	不良	不良	
出 土 遺 物	1住(No.5)	1住フク土	1住フク土下層	1住床面	1住床面	
備 考	図上復元	完型品				

第三章 遺 墓 物

実測図番号		第26図(6)	第26図(7)	第26図(8)	第26図(9)	第26図(10)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	甕	甕	甕	甕	甕	甕
法 量	口 径 徑 (cm)			18.6	15.6	24.2
	器 高 (cm)	3.0	2.4	5.9	4.9	3.3
	最大肩径 (cm)					
	壁 厚 (cm)	0.8	0.6	0.6	0.9	1.0
	底 径 (cm)	7.4	4.2			
口 緑 部	欠 損	欠 損	外腹は横位ナデ 内面横位ナデ、後 ミガキ 無 文	無 文 外・内面ともに横 位ナデ	平縁でくの字状に 開折する沈線が縱 走している。外面 ヨコナデ、内面ミ ガキ 外面施成時に黒変	
瓶 部	外面上部継位ナ デ、下部横位ナデ 内面斜位ナデ 大部分欠損	外面横位ナデ 大部分欠損	外面継位ナデ、内 面横位ナデ、後ミ ガキ 大部分欠損	外・内面ともに横 位ナデ 大部分欠損		欠 損
底 部	平 底	平 底	欠 損	欠 損	欠 損	
色 調	明茶褐色	黄褐色	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	
胎 土	雲母・石英	雲母・輝石	雲母・輝石	雲母・石英・長石	石英・長石・雲母	
焼 成	普 通	不 良	普 通	不 良	普 通	
出 土 遺 構	1住フク土下層	1住フク土上層	1住フク土	1住フク土上層	1住フク土下層	
備 考						



第26図 弥生式土器実測図 1住 (1~10)

第三章 造 物

実測図番号	第27図(11)	第27図(12)	第27図(13)	第27図(14)	第27図(15)
出土地点	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	要	要	要	要	要
法 量	口縁径 (cm)	14.3			18.7
	高 (cm)	4.7	5.3	15.0	22.3
	最大肩径 (cm)			31.1	23.4
	壁 厚 (cm)	0.5	0.6	0.8	1.0
	底 径 (cm)		7.2		1.5
口 縁 部	平底でわざかに外反。無文 外面ヨコナデ 内面スス付着	欠損	8本の波状沈線文 が横位に施されている。 波長は長い。外面、 内面ともに熟変化を受けている 上部一部分欠損	無 文 外面は荒く、横位ナデ 内外面ともに輪積痕	ヘラによる沈線が 無数継位に入っている 平底でくの字に屈折。外面ヨコナデ 内面剥落
肩 部	外面ヨコナデ 大部分欠損	無 文 外面風化 内面剥落大部分欠損	無 文 内面の風化著しい。 一部欠損	無 文 外面横位、斜位ナデ 内面斜位ナデ 輪積痕	欠 損
底 部	欠 損	平 底	欠 損	欠 損	欠 損
色 調	暗黄褐色	赤褐色	明茶褐色	茶褐色	赤褐色
胎 土	石英・雲母	雲母・石英・長石	石英・雲母・輝石	雲母・石英	雲母・長石・石英
燒 成	不 良	普 通	不 良	普 通	普 通
出 土 造 構	1住フク土	1住フク土	1住田炉	1住新炉	2住フク土
鑑 考			埋甕炉に使用	埋甕炉に使用	

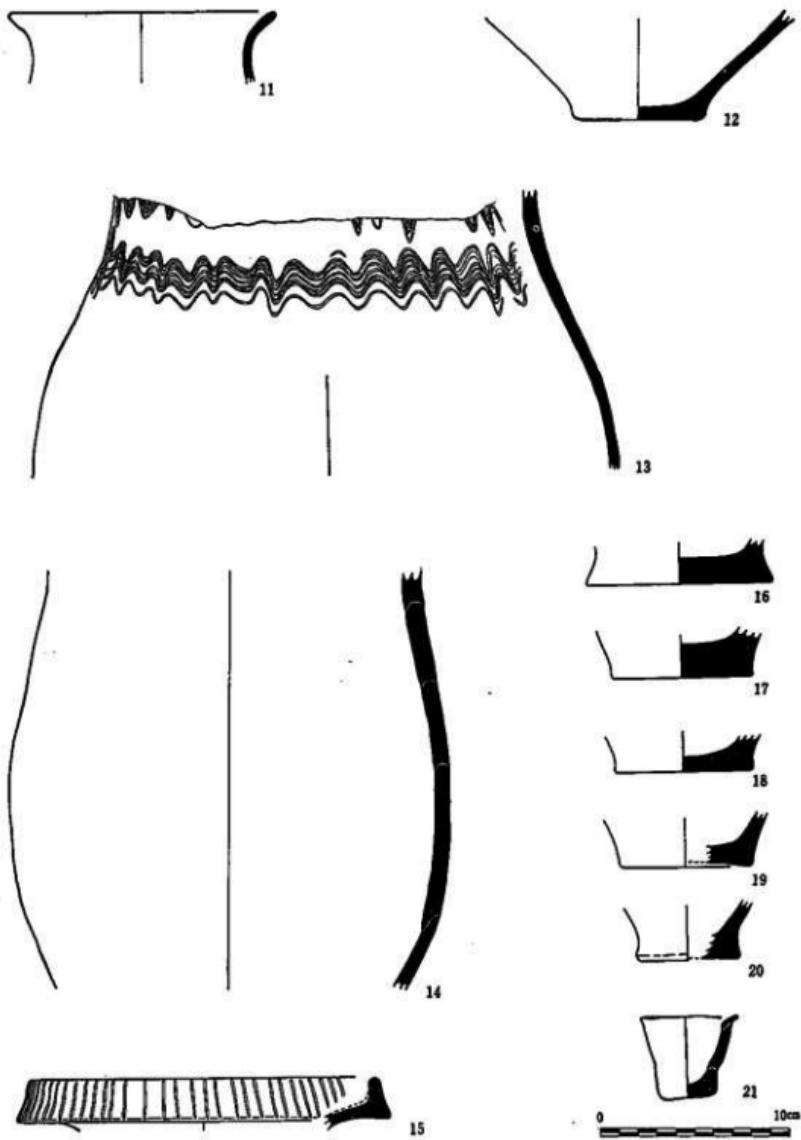
第1節 土 器

実測図番号		第27図(16)	第27図(17)	第27図(18)	第27図(19)	第27図(20)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	甕	甕	甕	甕	甕	甕
法	口 線 径 (cm)					
量	器 高 (cm)	2.2	2.3	2.1	2.5	3.1
	最大幅径 (cm)					
	壁 厚 (cm)	0.8	13.0	11.0	0.6	0.6
	底 径 (cm)	10.0	7.6	7.3	7.1	5.3
口 線 部	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損
胴 部	無 文 外面模位ナデ 大部分欠損	無 文 外面模位ナデ 大部分欠損	無 文 大部分欠損	無 文 大部分欠損	無 文	
底 部	平 底	平 底	平 底	平 底	平 底	平 底
色 調	暗褐色	赤褐色	赤褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
胎 土	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母	石英・雲母
焼 成	不良	不良	不良	不良	不良	不良
出 土 遺 構	2住床面	2住床面	2住フク土下層	2住フク土下層	2住フク土	
備 考						

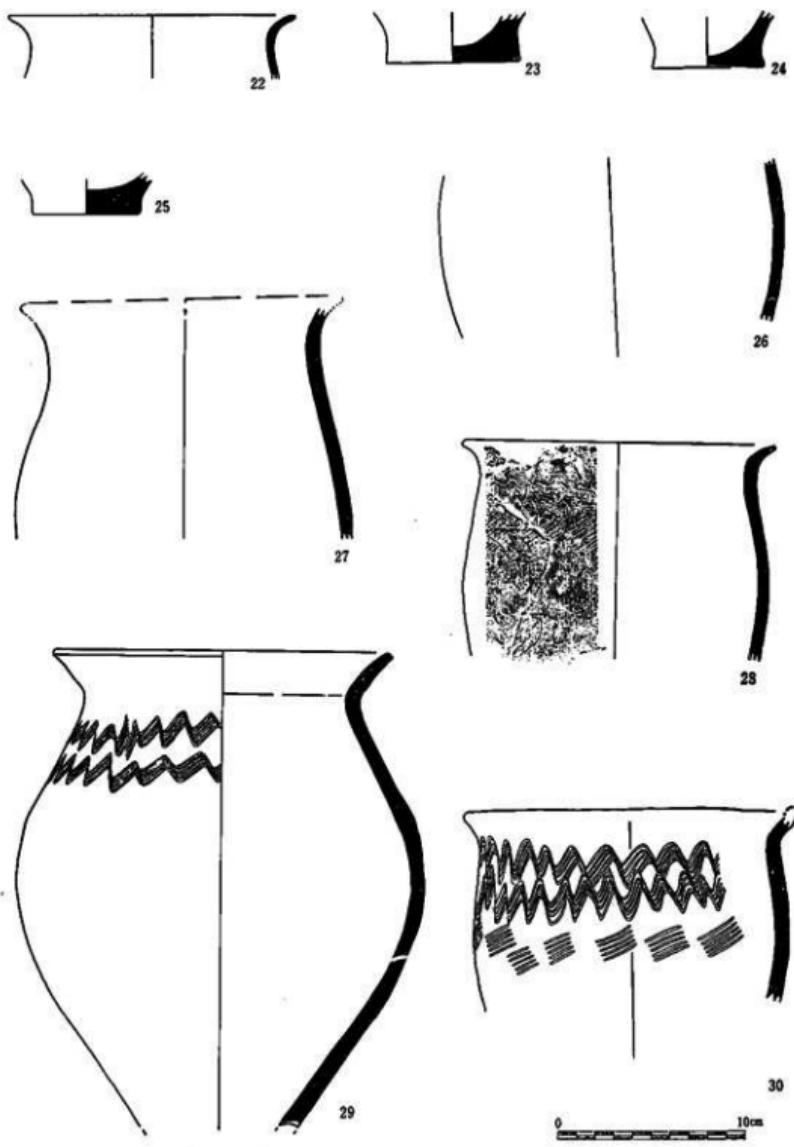
第三章 遺 墓 物

実測図番号		第27図(21)	第28図(22)	第28図(23)	第28図(24)	第28図(25)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
法量	器 形	要	要	要	要	要
	口縁径 (cm)	5.2	15.3			
	器 高 (cm)	4.2	3.3	2.6	2.7	1.8
	最大肩径 (cm)					
	壁 厚 (cm)	0.5	0.4	10.1	0.6	0.7
口 縁 部	底 壁 (cm)	2.8		7.1	6.0	5.8
	無文 外面スス付着 黒色顔料塗布 輪痕痕	無文 外・内面ともに 横位ナデ				
肩 部	無文外面スス付着 黒色顔料塗布 輪痕痕	無文 外面斜位ナデ 大部分欠損	無文 外面横位ナデ 大部分欠損	無文 大部分欠損	無文 大部分欠損	
底 部	平 底	欠 損	平 底	平 底	平 底	
色 調	明褐色	暗褐色	暗黄褐色	暗褐色	暗黄褐色	
胎 土	雲母	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・輝石	雲母・石英・長石	
燒 成	普 通	不 良	不 良	普 通	普 通	
出 土 遺 構	2住床面	3住フク土	3住フク土	3住フク土	3住床面	
備 考	手挽土器完型品					

第1節 土 器



第27図 弥生式土器実測図 1住 (11~14) 2住 (15~21)



第28図 弥生式土器実測図 3住(22~27) 5住(28~30)

第1節 土 器

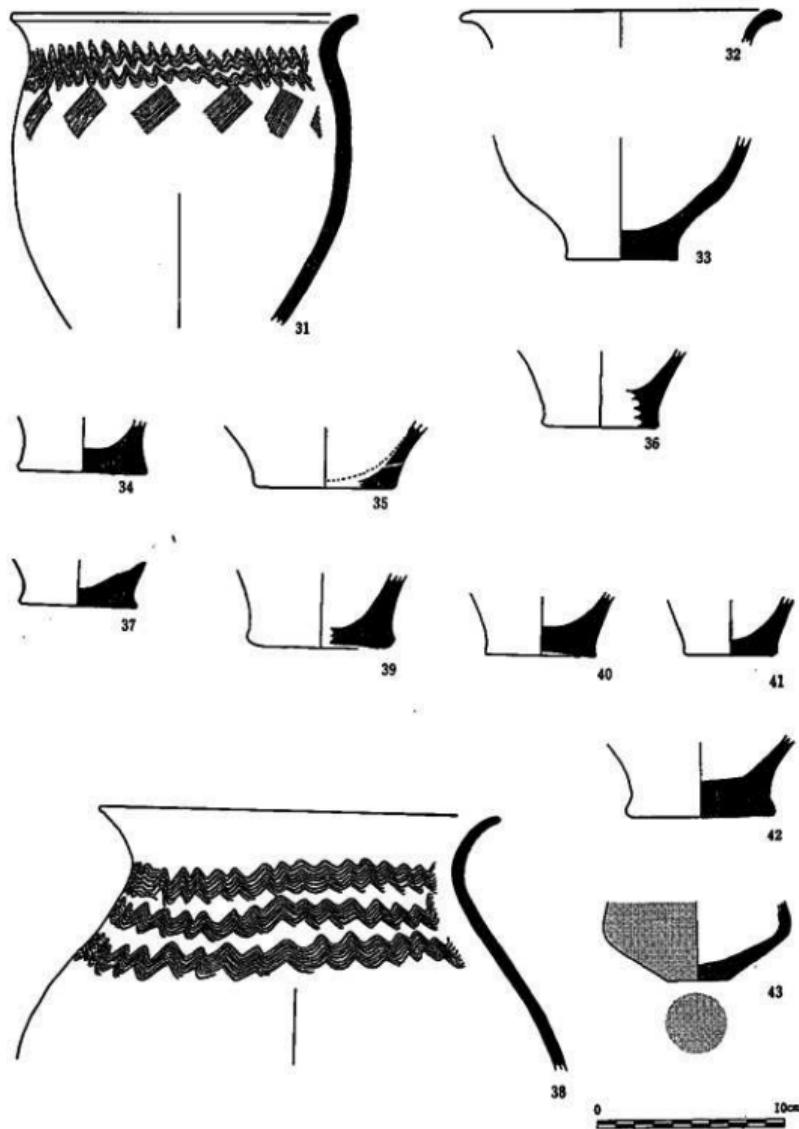
実測図番号		第28図(26)	第28図(27)	第28図(28)	第28図(29)	第28図(30)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	要	要	要	要	要	要
	口 径 径 (cm)		17.2 (推定)	16.8	18.2	17.7 (推定)
	器 高 (cm)	9.1	11.6	11.4	25.6	13.4
	最大肩径 (cm)	18.5	18.1	16.3	22.0	16.8
	壁 厚 (cm)	0.6	0.8	0.7	0.8	0.8
	底 径 (cm)					
口 線 部	欠損	口唇部欠損 無文 外面・内面横位ナ デ 平縁 (推定)	平縁わざかに外反 櫛描波状文 口唇の外面ヨコナ デ 外面斜位ナデ 内面横位ミガキ 外面スス付沿	平縁、かなりのカ ーブで外反する。 無文 外面横位ナデ、内 面横位ミガキ 外面スス付沿	平縁、推定外反す る。向かって右か ら左へ数条の櫛描 波状文が横位に走 る。口線上部の内・ 外面とも横位ナデ	
肩 部		無文 外・内面にスス付 着 外面斜位ナデ 内面継位ナデ 輪襯痕	無文 外面横位ミガキ	数条の斜位沈線 内・外面継位ミガ キ 施文方向は向って 右から左	数条の櫛描波状文 外面ミガキ 内面横位ミガキ 誤化物付着	4条の櫛描沈線文 を斜位に配す。 一部欠損
底 部	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損
色 調	黒褐色	明茶褐色	黒茶褐色	黒褐色	暗黄褐色	
胎 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・輝石	雲母・石英・長石	
燒 成	普通	良好	良好	普通	不良	
出 土 遺 構	3住泊炉	3住新炉	5住床面	5住床面	5住床面	
備 考	埋甕炉	埋甕炉				

第三章 遺 墓 物

実測図番号		第29図(31)	第29図(32)	第29図(33)	第29図(34)	第29図(35)	
出土場所	地 点						
	トレンチ						
	区						
器 形	甕	甕	甕	甕	甕	甕	
法 量	口縁径 (cm) 器 高 (cm) 最大肩径 (cm) 壁 厚 (cm) 底 径 (cm)	18.5 16.6 18.0 0.9 6.0	17.1 2.0 6.4 0.5 7.0		2.8 3.2 0.6 0.6		
口 縫 部	平縁で急激に外反する。数条の輪描波状文が縦位に走る。 外面横位ナデ、内面横位ミガキ	無 文 平縁で口唇がたれ下がり氣味 外・内面横位ナデ		欠 損	欠 損	欠 損	
肩 部	数条の沈線が斜位に走る。外面縦位ナデ、内面横位ミガキ		大部分欠損 無 文 外面縦位ナデ、内面横位ミガキ	大部分欠損 無 文 外面縦位ナデ、内面あらい・調整	大部分欠損 無 文 外面、内面剥落		
底 部	欠 損	欠 損	平 底	平 底	平 底		
色 調	赤褐色	暗赤褐色	暗黃褐色	暗黃褐色	茶褐色		
胎 土	雲母・石英・長石	雲母・輝石	雲母・石英・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石		
焼 成	良 好	普 通	普 通	普 通	不 良		
出 土 造 構	5住坪	5住フク土下層	5住フク土	5住フク土下層	5住フク土上層		
備 考	埋甕炉に使用						

第1節 土 器

実測図番号	第29図(36)	第29図(37)	第29図(38)	第29図(39)	第29図(40)
出土地点	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	壺	壺	壺	壺	壺
法 直	口縁 径 (cm)		21.5		
	器 高 (cm)	4.1	2.5	13.6	4.0
	最大肩径 (cm)			29.5	
	壁 厚 (cm)	0.5	0.9	0.6	0.6
	底 径 (cm)	6.1	6.4		8.0
口 縁 部	欠損	欠損	平縁で大きく外反し、口縁上部は無文、下部は数条にわたり横位の崩落波状文が入っている。文様帯は三つある。	欠損	欠損
肩 部	無文 大部分欠損	無文 大部分欠損 外面横位ナデ	無文 下部欠損 外・内面ともに横ナデ	無文 大部分欠損 内面は荒く、炭化物付着	無文 外面横位ナデ
底 部	平底	平底	欠損	平底	平底
色 調	赤茶褐色	暗黄褐色	明紫褐色	暗茶褐色	暗茶褐色
胎 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	石英・長石・雲母	石英・長石・雲母	石英・長石・雲母
焼 成	普通	普通	不良	普通	普通
出 土 遺 構	5住フク土	5住フク土	7住新炉	7住フク土上層	7住床面(№5)
備 考			烟突炉に使用		



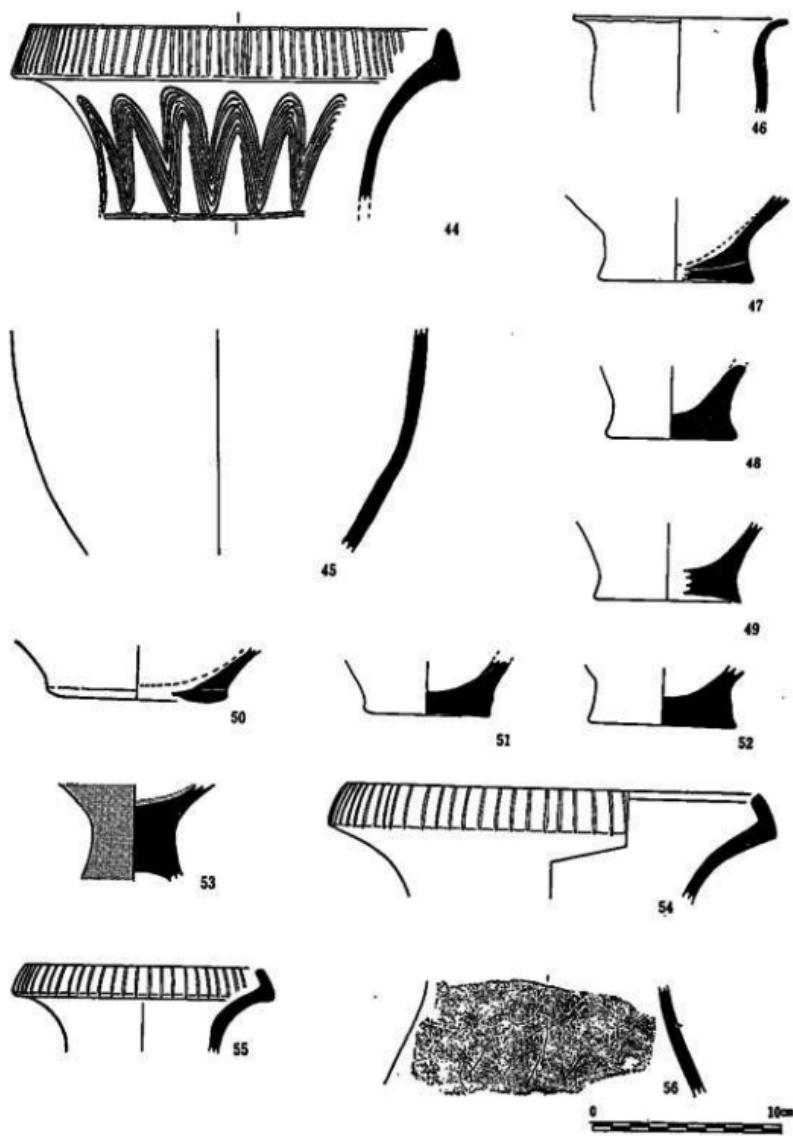
第29図 弥生式土器実測図 5住(31~37) 7住(38~43)

第1節 土器

実測図番号		第29図(41)	第29図(42)	第29図(43)	第30図(44)	第30図(45)	
出土地點	地点						
	トレンチ						
	区						
器形	甕	甕	甕	壺	甕	甕	
法	口縁径(cm)						
	高(cm)	2.9	3.9	4.3	22.4	12.0	
	最大胸径(cm)			10.0			22.0
量	壁厚(cm)	0.6	0.6	0.5	10.0	0.7	
	底径(cm)	5.0	8.0	3.3			
口縁部		欠損	欠損	欠損	平縁、く字状に屈折し、下部は肥厚。上部は無数の沈線を斜目に配す。中部は数条の束で織程波状文が横走す。		欠損
肩部		無文 外面スス付着	無文 外・内面ともにあらい、外面縦線ミガキ	無文 外面赤色塗彩 外面ミガキ 内面横位ナデ	大部分欠損	無文 外面、内面あらい 外面は斜位。横位ナデ 内面は縦位。斜位ナデ	
底部		平底	平底	平底 赤色塗彩	欠損	欠損	
色調		暗茶褐色	赤褐色	明茶褐色	赤褐色	茶褐色	
胎土		石英・輝石・長石	雲母	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	石英・雲母・長石	
焼成		不良	不良	不良	普通	普通	
出土遺構		7住フク土下層	7住フク土下層	7住フク土	8住フク土上層	8住炉	
備考						埋甕炉に使用	

第三章 遺物

実測図番号		第30回(46)	第30回(47)	第30回(48)	第30回(49)	第30回(50)
出土場所	地点					
	トレンチ					
	区					
器形	縦	幅	高	底	壁	底
法	口縁径(cm)	11.3				
	高(cm)	5.0	4.4	2.9	3.8	4.1
	最大側径(cm)	9.3				
蓋	壁厚(cm)	0.5	0.7	0.5	0.8	0.6
	底径(cm)		8.3	9.6	7.0	7.8
口縁部	無文 平縁で大きく外反する。外面縫位ナデ、内面横位ナデ 外面スヌ付有		欠損	欠損	欠損	欠損
肩部	無文 外面縫位ナデ、内面横位ナデ 一部欠損	無文 大部分欠損	無文 部分的に黒変 大部分欠損	無文 外面横位ナデ 大部分欠損	無文 外面横位ナデ 大部分欠損	
底部	欠損	平底	平底	平底	平底	
色調	黒褐色	茶褐色	赤褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	
胎土	雲母	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	
焼成	普通	不良	不良	不良	普通	
出土遺構	8住フク土	8住ベルト	8住フク土	8住フク土	8住フク土上層	
備考						



第30図 弥生式土器実測図 8住 (44~52) 9住 (53~56)

第三章 遺 売 物

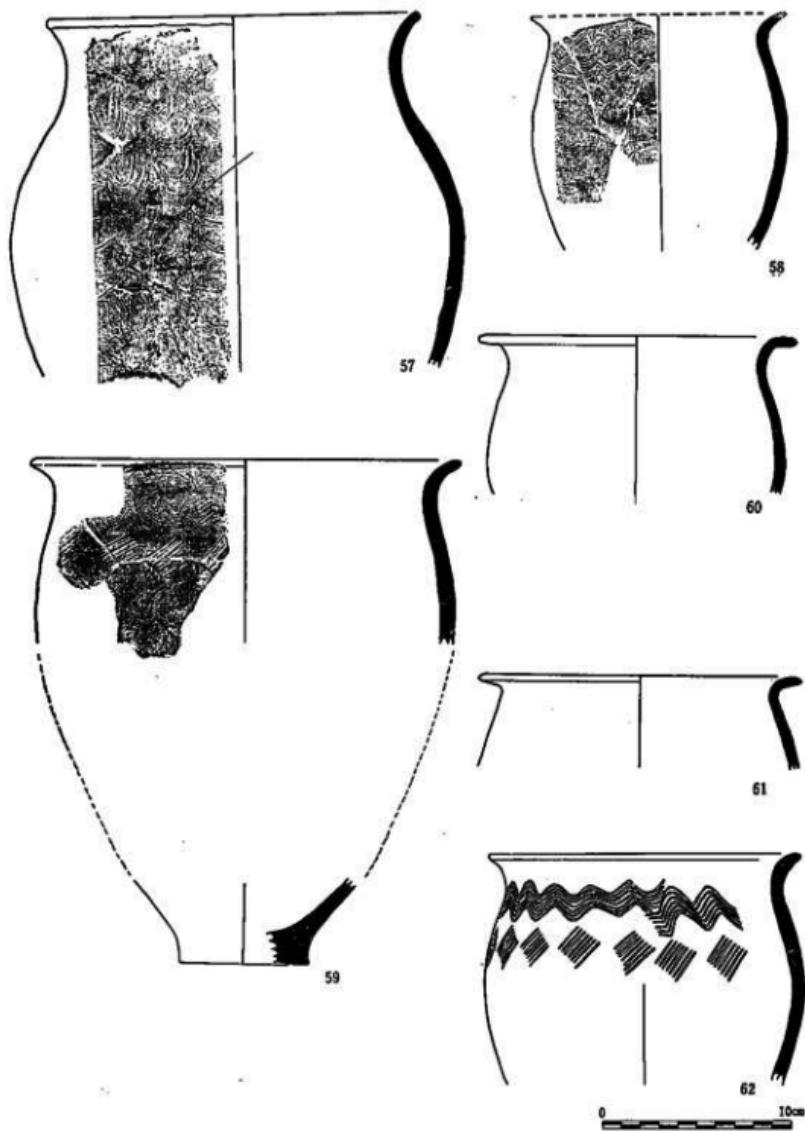
実測図番号		第30回(51)	第30回(52)	第30回(53)	第30回(54)	第30回(55)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	甕	甌	高 壁	壺	盃	盃
法	口 線 径 (cm)				22.1	12.7
量	器 高 (cm)	2.7	3.0	5.1	5.9	4.6
	最大胴径 (cm)					
	壁 厚 (cm)	0.9	0.8		0.6	0.7
	底 径 (cm)	6.8	7.9			
口 線 部	欠 損	欠 損	欠 損	平縁で大きくな字状に外反 上部に斜位の沈線 外面横ナデ 内面横位ミガキ	平縁で大きくな字状に外反 上部に斜位の沈線 外面横ナデ 内面横位ミガキ	
肩 部	無 文 外面斜位横位ナデ 大部分欠損	無 文 外面ミガキ 横位ナデ 黒変	胸部外面横位ミガ キ 内面剥落、外・内 面ともに赤色染彩	欠 損	欠 損	
底 部	平 底	平 底	欠 損	欠 損	欠 損	
色 質	暗黄褐色	暗茶褐色	茶褐色	褐 色	茶褐色	
胎 土	石英・雲母・長石	石英・長石・雲母	石英・長石・雲母	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	
燒 成	不 良	普 通	普 通	普 通	不 良	
出 土 造 作	8住フク土	8住フク土	9住フク土上層	9住フク土	9住フク土	
備 考						

第1節 土 器

実測図番号		第30図(56)	第31図(57)	第31図(58)	第31図(59)	第31図(60)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形		並	要	要	要	要
法 量	口 徑 (cm)		20.0	13.5 (推定)	23.0	16.8
	器 高 (cm)	6.4	18.8	12.5	26.8 (推定)	8.5
	最大底径 (cm)		23.8	13.6	22.2	
	壁 厚 (cm)	0.7	0.8	0.5	0.9	0.6
	底 径 (cm)				6.9	
口 横 部		欠損	上部は無文、中部はループ的な文様、外面は横位ナデ 内面はザラザラで 横位ナデ	5本の横描波状文 が二段にわたって 横走している。 外面縦位のあらい ミガキ 内面横ナデ	横描波状文が横に 配されている。 外面横位ナデ 下部付黒変 平線	無文 外面スヌ付管 外面縦位ミガキ 内面横位ナデ 平線で大きく外反
脚 部			波長の混れた横描 沈線文が横位に走っている。	無文 外面横位ナデ、内面ザラザラ	無文 外面縦位のあらい ミガキ 内面横位ナデ	大部分欠損 無文 一部欠損
底 部		欠損	欠損	欠損	平底	欠損
色 調		黄褐色	茶褐色	暗黄褐色	暗赤褐色	墨茶褐色
胎 土		石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母	雲母・石英・長石
燒 成		普通	不良	普通	良好	良好
出 土 遺 槽		9 住	9住フク土上層	9住フク土	9住フク土	9住フク土
備 考						

第三章 遺物

実測図番号		第31図(61)	第31図(62)	第32図(63)	第32図(64)	第32図(65)
出土地点	地點					
	トレンチ					
	区					
器形	壺	壺	壺	壺	壺	壺
	口縁径 (cm)	17.1	16.6		22.1	
	器高 (cm)	5.0	12.3	13.2	29.9	8.7
	最大横径 (cm)		17.0	20.1		
	壁厚 (cm)	0.5	0.7	0.8	0.8	0.8
	底径 (cm)					
口縁部	平縁で大きく外反 外面横位ナデ、縱位ナデ、内面横位ナデ 横位ミガキ 無文	平縁でわずかに外反 数条にわたる櫛横 波状文が横走し、途中でくいちがっている。 外面スス付着 縱位ミガキ 内面横位ミガキ		欠損	無文 外面スス付着、外 面は横位ミガキ 縱位ミガキ 内面横位ナデ	
						欠損
柄部	大部分欠損	下部欠損	軸本にわたる櫛横 波状文が横走している。		無文 外面縱位ナデ 内面横位ナデ	無文 外面縱位ナデ 内面ザラザラ 一部剥落 個変する
底部	欠損	欠損	欠損	欠損	平底	
色調	墨茶褐色	暗茶褐色	赤褐色	墨茶褐色	暗黄褐色	
粘土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	石英・長石	雲母・石英・長石	
焼成	良好	良好	良好	不良	不良	
出土遺構	9住フク土	9住フク土上層	9住フク土上層	9住フク土	9住フク土	
備考						



第31図 弥生式土器実測図 9住 (57~62)

第三章 造 物

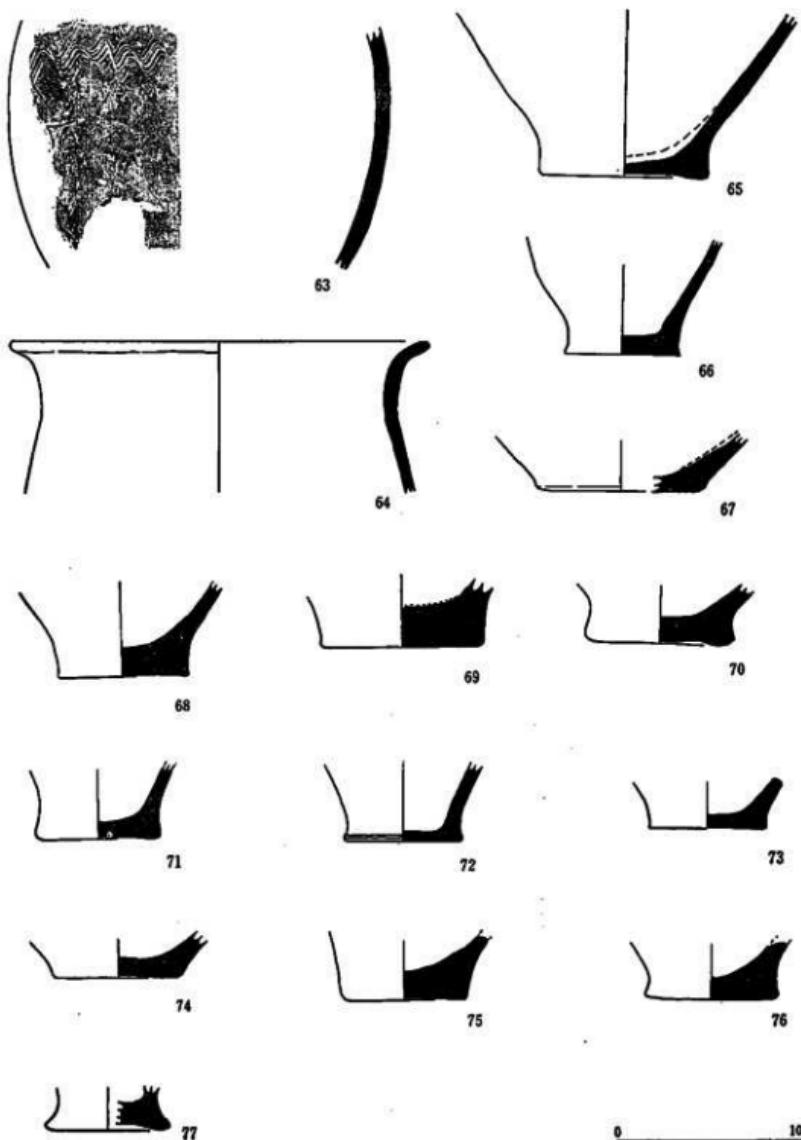
実測図番号		第32図(66)	第32図(67)	第32図(68)	第32図(69)	第32図(70)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	縦	横	高	深	費	費
	口 縦 径 (cm)					
	器 高 (cm)	6.1	2.8	4.9	3.2	3.1
	最大肩径 (cm)					
	盤 厚 (cm)	0.4	0.5	0.7	13.0	0.7
	底 径 (cm)	6.1	8.9	7.0	8.7	8.0
口 縦 部						
	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損
脚 部	大部分欠損 外面スス付着 外面横位横位ナデ 内面斜位ナデ 無文	大部分欠損 外面斜位ミガキ 内面剥落 無文	大部分欠損 外面横位ナデ 部分的に黒変 無文	大部分欠損 内面剥落 無文	大部分欠損 外面横位ナデ 内面に炭化物付着 無文	
底 部	平底	平底	平底	平底	平底	平底
色 調	暗茶褐色	赤褐色	赤褐色	暗黄褐色	暗茶褐色	
岩 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	
焼 成	普通	普通	良好	普通	不良	
出 土 遺 備	9住フク土	9住フク土	9住フク土	9住フク土	9住フク土	
備 考						

第1節 土 器

実測箇番号		第32回(71)	第32回(72)	第32回(73)	第32回(74)	第32回(75)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形		要	要	要	要	要
法 量	口縁 強 (cm)					
	器 高 (cm)	3.7	4.2	2.5	2.1	2.8
	最大底径 (cm)					
	壁 厚 (cm)	0.6	0.7	0.6	0.9	0.9
	底 強 (cm)	6.7	6.3	6.3	6.6	6.7
口 縁 部		欠損	欠損	欠損	欠損	欠損
肩 部		無文 外面継位ナデ、横 位ナデ 大部分欠損	無文 外面軽いミガキ 内面横位ナデ 大部分欠損	無文 外面継位ミガキ、 内面横位ミガキ 大部分欠損	無文 外面横位ナデ 内面剥落 大部分欠損	無文 外面横位ミガキ 内面あれ著しい、 大部分欠損
底 部		平 底	平 底	平 底	平 底	平 底
色 調		黄褐色	茶褐色	茶褐色	赤褐色	明黄褐色
胎 土		鄧石・石英・雲母	石英・雲母・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
燒 成		不良	普通	良好	不良	不良
出 土 造 様		9住フク土	9住フク土	9住フク土	9住フク土	9住フク土
信 者						

第三章 遺物

実測図番号		第32図(76)	第32図(77)	第33図(78)	第33図(79)	第33図(80)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
法 盆	器 形	甕	甕	甕	甕	甕
	口 径 (cm)			24.1	16.0	
	器 高 (cm)	3.0	2.3	24.2	15.9	11.2
	最大肩径 (cm)				16.3	16.6
	壁 厚 (cm)	0.8	0.7	11.4	0.4	0.6
口 線 部	径 (cm)	7.1	6.7			
		欠損	欠損	平縁でくの字に外反し、下部は肥厚、上部は沈線を斜位に配す。10本一束の波状沈線を施す。外面横位ナデ、内面斜位ナデ	平縁でわずかに外反する。上部は横推波状文を横位に走らす。外面はスヌが多量に付着 内面は横位ナデ	口唇部欠損 外面は横位ナデ、軽い縱位ミガキ 内面軽い横位ナデ無文
肩 部	無 文 外面縦位ナデ、横位ナデ 大部分欠損	無 文 大部分欠損	無 縫 細かい沈線 が横走 下部欠損	8本の沈線を右上から左下に施す。 下部欠損	8本の沈線を右上から左下に施す。 下部欠損	外面は軽い縦位ミガキ、内面は軽い横位ナデ
	底 部	平 底	平 底	欠 損	欠 損	欠 損
色 調	暗黄褐色	黄褐色	赤褐色	暗茶褐色	暗赤褐色	
胎 土	雲母・長石・石英	雲母・石英	雲母・長石・石英	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	
燒 成	普 通	普 通	普 通	不 良	良 好	
出 土 遺 構	9住フク土	9住フク土	10住新伊	10住床面	10住床面	
備 考			埋甕炉に使用			

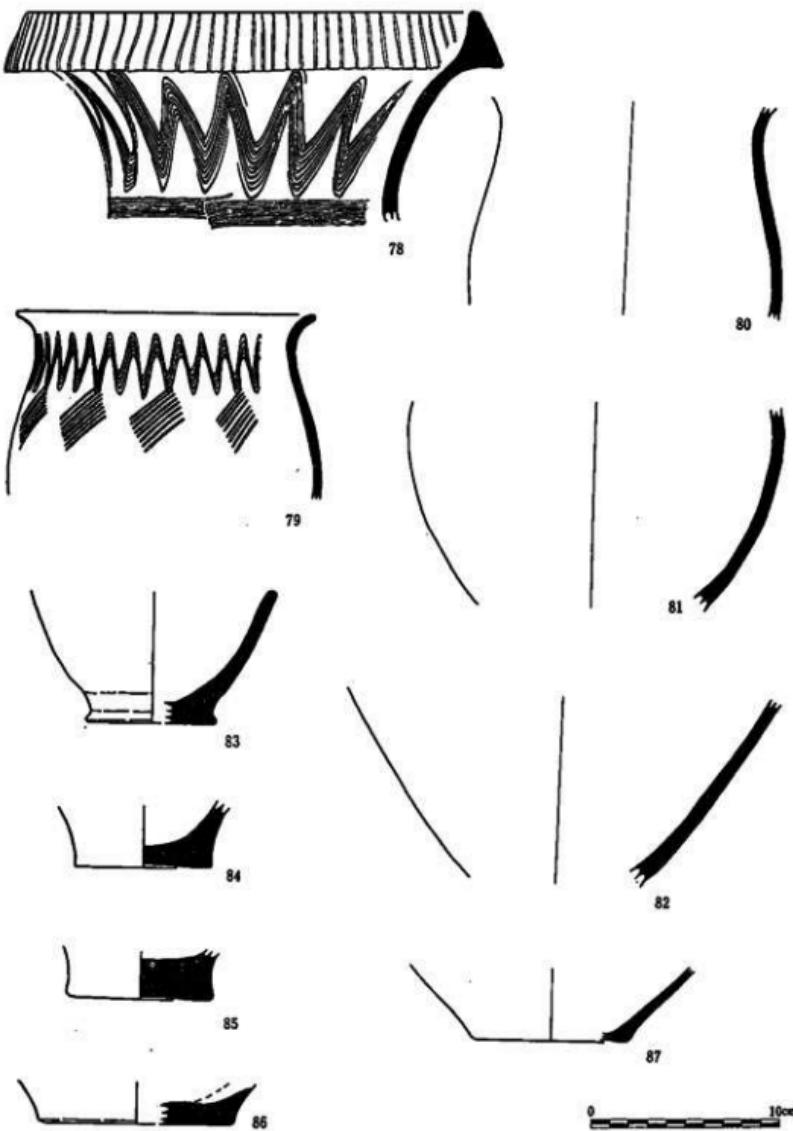


第32図 弥生式土器実測図 9住 (63~77)



第三章 追 勢 物

実測図番号		第33回(81)	第33回(82)	第33回(83)	第33回(84)	第33回(85)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	甕	甌	甌	甌	甌	甌
	口 径 徑 (cm)					
	器 高 (cm)	10.9	10.0	7.0	3.2	2.5
	最大肩径 (cm)	19.7	23.1			
	壁 厚 (cm)	0.8	0.9	0.7	0.8	
	底 径 (cm)			6.9	7.3	7.9
口 線 部						
	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損
肩 部	外面はスス付着 外面上部は斜位ナ デ 外面下部は縦位ミ ガキ 内面上部は横位ナ デ 内面下部は縦位ナ デ	無文 内外面ともあらい 縦位ミガキ 外面上部にスス付 着	無文 外面縦位ナデ、内 面縦位ナデ 一部欠損	無文 大部分欠損	無文 外面横位ナデ	
底 部	欠損	欠損	平 底	平 底	平 底	
	暗黄褐色	暗黄褐色	黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	
	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・輝石	輝石・石英・雲母	輝石・石英・雲母	
	普 通	普 通	普 通	不 良	不 良	
	10往床面	10往床面	10往床面	10往床面	10往床面	
備 考						



第33図 弥生式土器実測図 10住 (78~87)

第三章 造 物

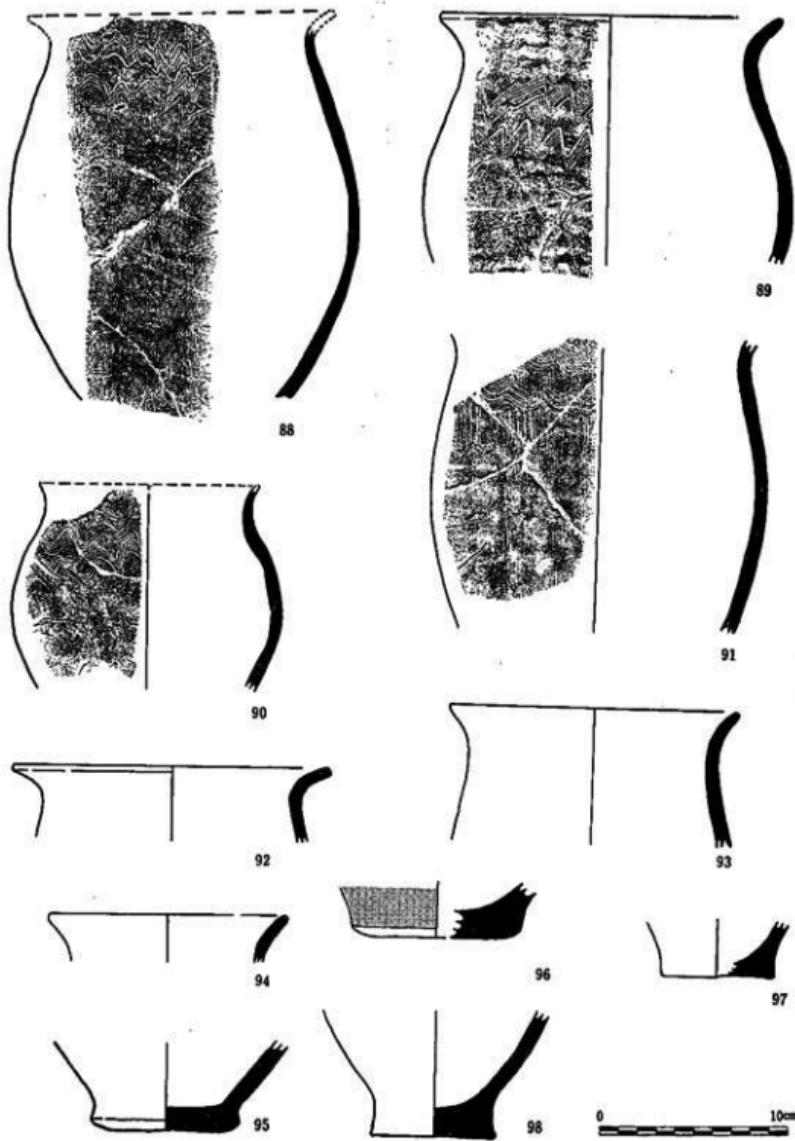
実測図番号		第33図(86)	第33図(87)	第34図(88)	第34図(89)	第34図(90)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	甕	甕	甕	甕	甕	甕
法 量	口 径 (cm)				18.0	
	基 高 (cm)	2.1	3.9	16.3 (推定)	13.1	11.0
	最 大 周 径 (cm)			18.6	19.4	14.2
	壁 厚 (cm)			0.6	0.7	0.7
	底 径 (cm)	10.5	8.5			
口 緯 部	欠 損	欠 損	5本の横擗波状文 が横走している。 外面スス付着 外面縦位ナデ 内面横位ナデ	平縁口縁で、わざ かに外反。5本の 横擗波状文が二段 にわたって横走。 波長は右へ傾むく 外面は横位ナデ。 内面は横位ナデ	口唇部欠損。横擗 波状文が二段にわ たって横走し、段 の間はせまい。 外面スス付着 横位ナデ 内面斜位ナデ	
肩 部	外面縦位ミガキ 大部分欠損	外面スス付着。縦 位ミガキ 大部分欠損	無 文 外面はスス付着。 横位ナデ 内面は横位ナデ	無 文 外面は縦位ナデ 内面は黒変		
底 部	平 底	平 底	欠 損	欠 損	欠 損	
色 調	暗黄褐色	暗赤褐色	- 暗茶褐色	黑褐色	暗黄褐色	
胎 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・輝石・石英	
燒 成	普 通	普 通	不 良	不 良	普 通	
出 土 造 構	10住フク土	10住フク土	12住床面	12住床面	12住床面	
備 考						

第1節 土器

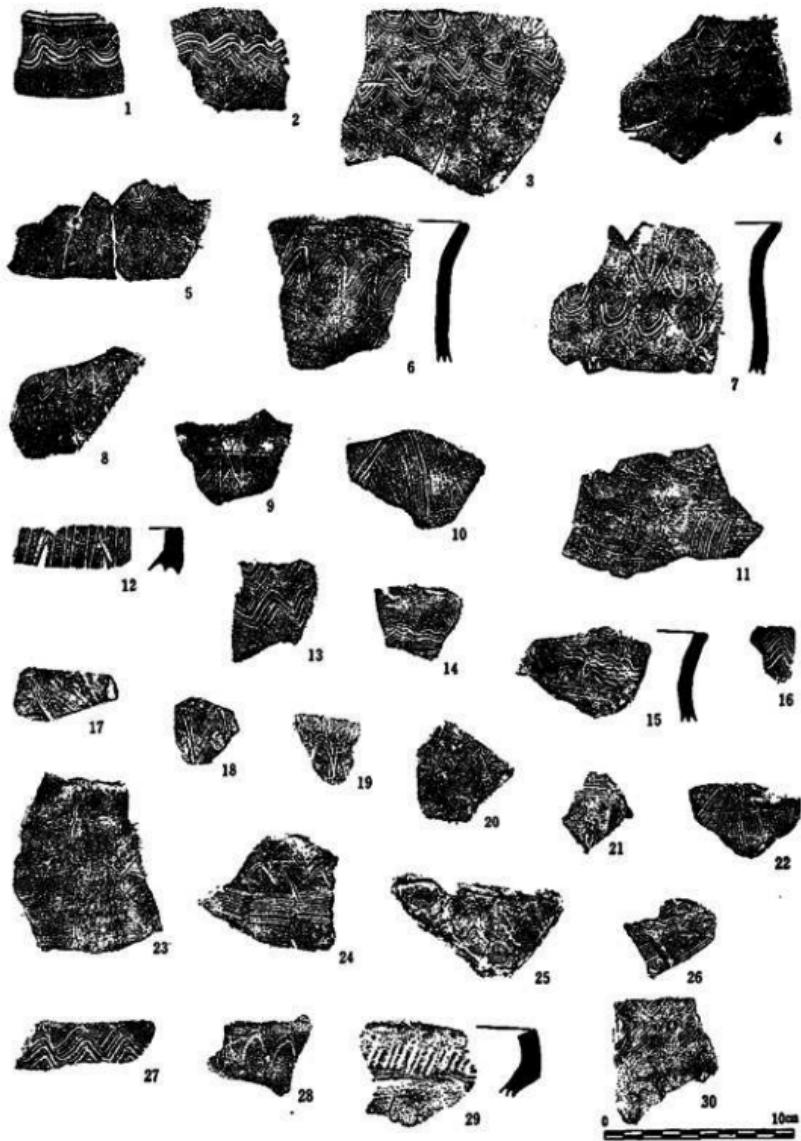
実測図番号		第34図(91)	第34図(92)	第34図(93)	第34図(94)	第34図(95)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形		裏	裏	裏	裏	裏
法 盆	口縁径 (cm)		16.9	15.4	12.8	
	器 高 (cm)	16.0	3.9	7.2	2.7	4.6
	最大肩径 (cm)	17.8				
	壁 厚 (cm)	0.7	0.6	0.8	0.5	0.8
	底 強 (cm)					7.8
口 縁 部		波長の沈線が横位に走り、その振幅はゆるやか、下部には継位單線が施されている。外内面とも横位ナデ	平縁で外反、無文 外面軽い継位ミガキ 内面軽い横位ミガキ	平縁で、わざかに外反、無文 外面は横位ナデ 内面不定方向ナデ	平縁、わざかに外反、無文 外面横位ミガキ 内面横位ナデ	
						欠損
肩 部		継位單線が入る。 外面スス付着 外面継位ナデ 内面斜位ナデ	無 文 大部分欠損	無 文 外面継位ナデ 内面不定方向ナデ	無 文 大部分欠損	無 文 外面横位ナデ 大部分欠損
底 部		欠 損	欠 損	欠 損	欠 損	平 底
色 調		暗茶褐色	黒茶褐色	暗茶褐色	黒茶褐色	暗茶褐色
胎 土		雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英	雲母・石英
燒 成		普 通	不 良	普 通	良 好	不 良
出 土 遺 様		12住床面	12住床面	12住フタ土	12住床面	12住床面
備 考						

第三章 遺物

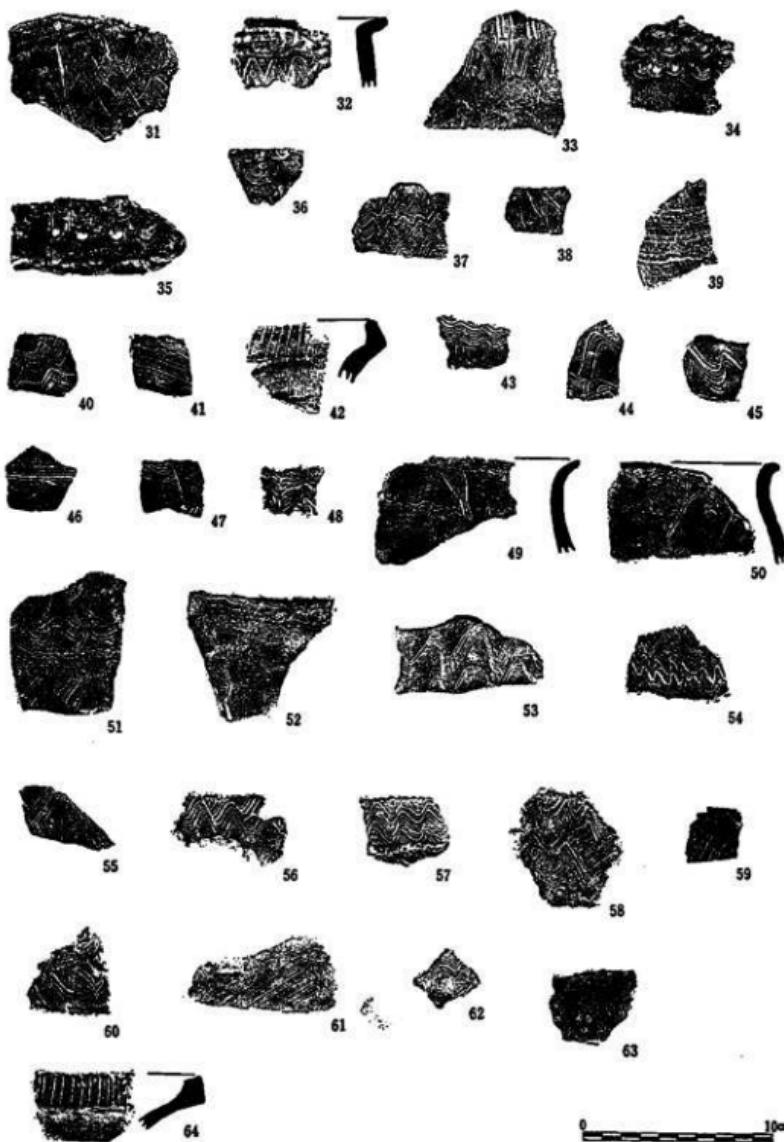
実測図番号		第34図(96)	第34図(97)	第34図(98)
出土地点	地 点			
	トレンチ			
	区			
法 盆	器 形	要	要	要
	口 段 径 (cm)			
	器 高 (cm)	3.0	3.2	6.6
	最大肩径 (cm)			
	壁 厚 (cm)	10.0	0.6	0.7
口縁部	底 段 径 (cm)	9.0	6.0	6.7
肩 部	外面に赤いもの付着 大部分欠損	内面紙位ミガキ 大部分欠損	大部分欠損	
底 部	平 底	平 底	平 底	
色 調	赤褐色	茶褐色	茶褐色	
胎 土	石英・長石・雲母	石英・長石	石英・長石	
焼 成	不 良	普 通	不 良	
出 土 遺 構	12往來面	12往來面	12往來面	
備 考				



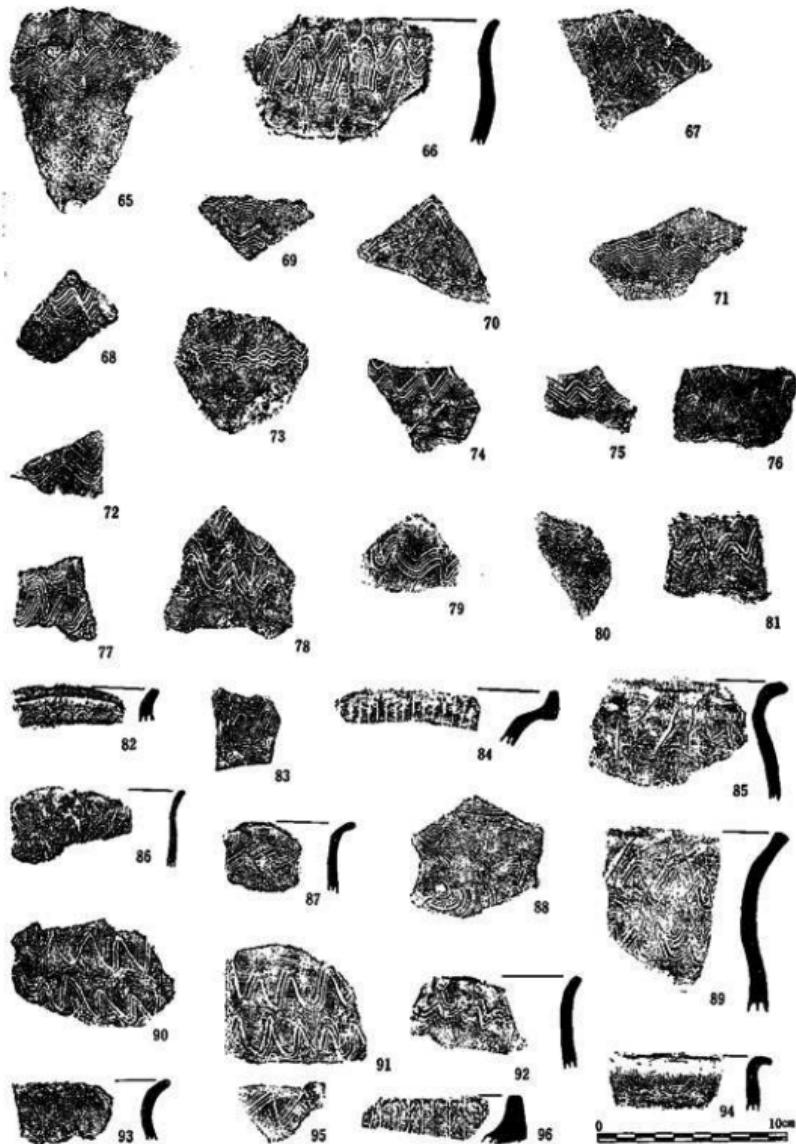
第34図 弥生式土器実測図 12件 (88~98)



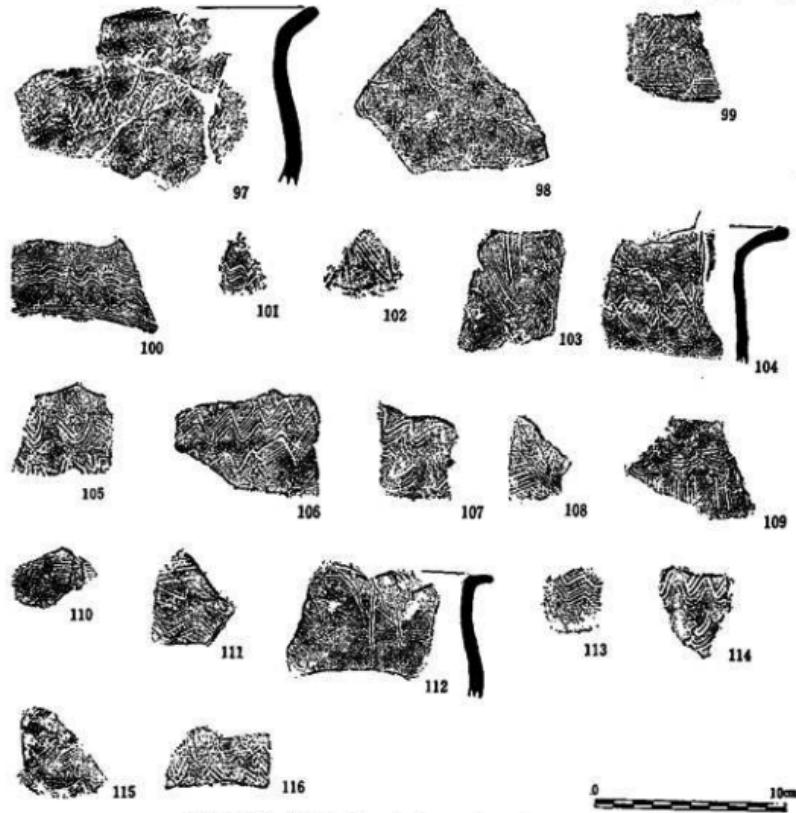
第35図 弐生式土器拓影 1住（1~11） 2住（12~23） 3住（24~30）



第38図 弱生式土器拓影 5住 (31~48) 7住 (49~64)



第37図 弥生式土器拓影 8住(65~84) 9住(85~96)



第38図 弥生式土器拓影 10住 (97~103) 12住 (104~116)

(3) 土師器・須恵器

本遺跡の土師器・須恵器は主として第4号住居址、第11号住居址、第13号住居址から検出された。その他グリットから検出されたものも掲載しておくことにする。

土師器の器種は変形土器・長胴変形土器・壺形土器・高壺形土器である。須恵器の器種は変形・壺形・蓋形・壺形・瓶形・塗形である。

(飯塚政美)

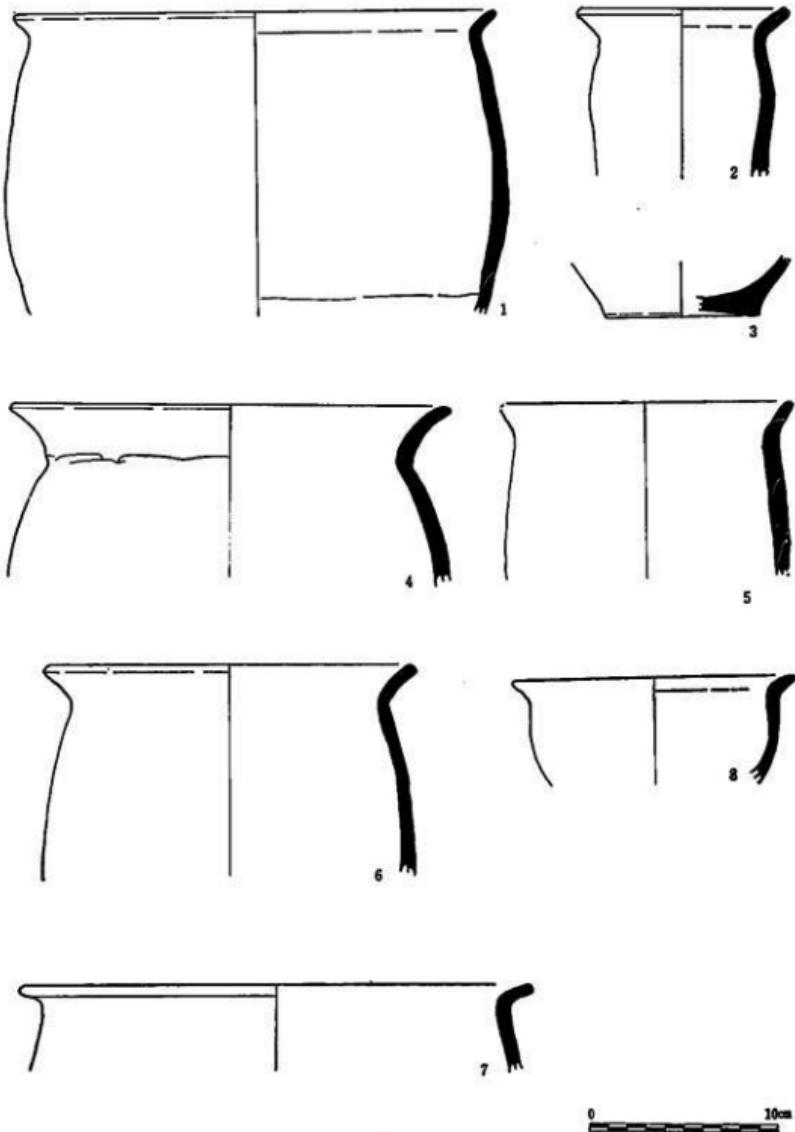
第三章 遺 墓 物

第2表 主要土師器・須恵器一覧 (法量は現況を記す)

実測器番号		第39回(1)	第39回(2)	第39回(3)	第39回(4)
出土地点 トレンチ 区					
器 形		甕	甕	甕	甕
法 量	口 線 径 (cm)	25.6	11.1		23.4
	器 高 (cm)	15.9	8.8	2.8	9.1
	最大胴径 (cm)	26.6	9.8		23.7
	壁 厚 (cm)	0.8	0.8	0.6	0.8
	底 径 (cm)			8.3	
口 部	口縁部はくの字状に外反 器 形		口縁部はくの字状に外反	欠損	口縁部が大きく外反する
	縁 整形 部	表	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ スス付着
		裏	ヨコナデ	ヨコナデ	横位ナデ
肩 部	最大径を肩上部にもつ 器 形		肩上部がわずかにふくらむ	大部分欠損	最大径を肩上部にもつ
	縁 整形 部	表	斜位ミガキ	ヨコナデ タテナデ	ヘラケズリ後、斜位ミガキ
		裏	縦位ナデ	横位ナデ	横位ナデ
				剥落	
底 色	欠損	欠損	平底	欠損	
	暗赤褐色	明茶褐色	黒茶褐色	赤褐色	
胎 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	
燒 成	普通	普通	普通	良好	
出 土 遺 構	4住フク土	4住床面	4住フク土	4住フク土	
備 考	土師器	土師器	土師器	土師器	

第1節 土 器

実測図番号		第39図(5)	第39図(6)	第39図(7)	第39図(8)
出土地点	地 点				
	トレンチ				
	区				
法 盆	器 形	壺	壺	壺	壺
	口縁径 (cm)	15.5	19.7	27.4	15.1
	脚 高 (cm)	9.3	11.2	4.6	5.6
	最大胴径 (cm)	15.2	19.9		
	壁 厚 (cm)	0.9	0.7	0.7	0.7
	底 径 (cm)				
口 器 形	平縁でわずかに外反		平縁で急激に外反 口唇部は平坦	平縁で大きくくの字に 外反	平縁でやや斜目状に 外反
	縁 表	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
		横位ナデ 輪郭底	ヨコナデ	横位ナデ	ヨコナデ
脇 器 形	脇中央部がわずかにふくらむ		脇上部が若干ふくらむ	大部分欠損	脇中央部が球形状にふくらむ
	脇 表	短い斜位ナデ	斜位ナデ	斜位ミガキ	横位ナデ
		横位ナデ 輪郭底		横位ナデ	横位ナデ 黒変
	底 部		欠 損	欠 損	欠 損
	色 調	墨褐色	明赤褐色	明茶褐色	暗赤褐色
	胎 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼 成	普 通	普 通	良 好	普 通	
	出 土 遺 構	4住フク土	4住床面	4住フク土	4住フク土
備 考		土師器	土師器	土師器	土師器



第38図 土師器実測図 4住 (1~8)

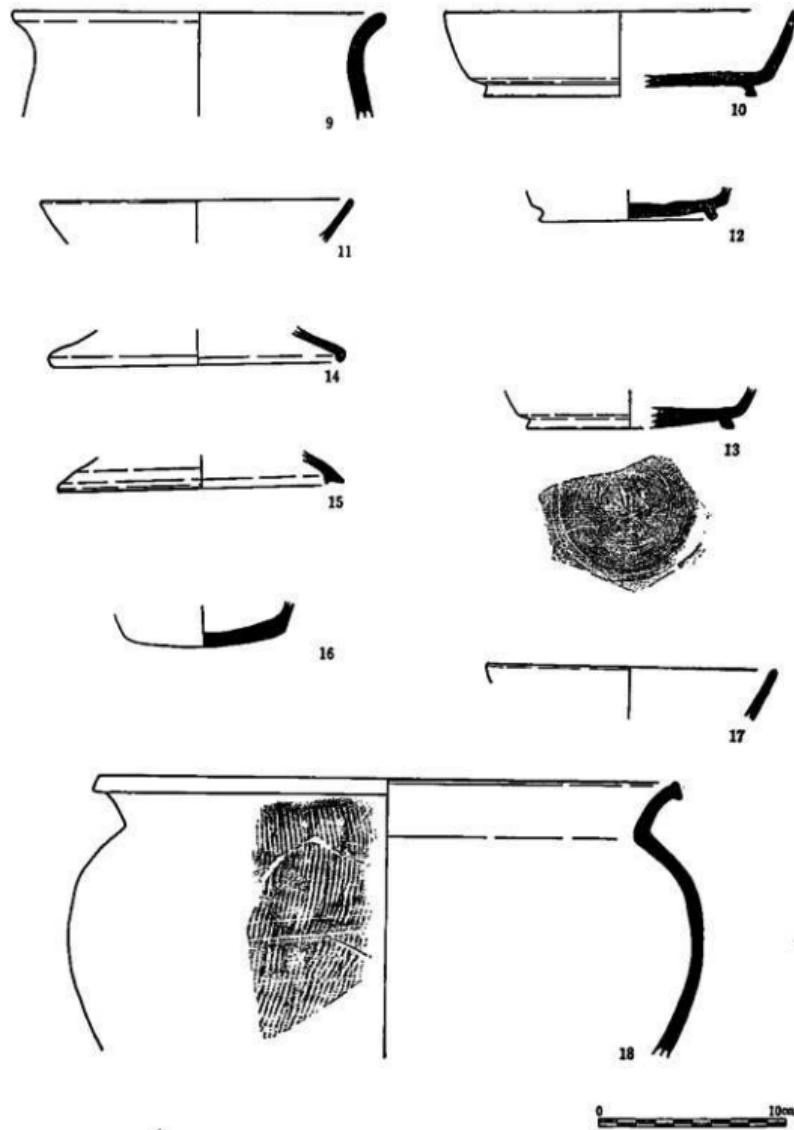
実測器番号		第40図(9)	第40図00	第40図01	第40図02
出土地 点 区	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形		壺	壺	壺	壺
法 量	口 鋸 径 (cm)	19.9	18.7	16.8	
	器 高 (cm)	5.5	4.5	2.2	
	最大横径 (cm)				
	壁 厚 (cm)	0.7	0.6	0.4	0.5
	底 径 (cm)				8.5
口 縁 部	器 形	平縁でやや外反。口唇は丸味を呈す	平縁でわずかに外反、口唇は丸味を呈す	平縁でわずかに外反、口唇は丸味を呈す	欠損
	表	ヨコナデ	ヨクロ仕上	ヨクロ仕上	
	蓋形	ヨコナデ			
	裏	ヨコナデ			
肩 部	器 形	肩上部で最大径を呈す			欠損
	表	ヨコナデ後、継位ナデ	肩最下部ヨクロ仕上		
	蓋形	部分的に黒変			
	裏				
底 部		欠 損	付け高台	欠 損	付け高台
色 調		黄褐色	青灰黑色	青灰黑色	青灰黑色
胎 土		雲母・石英・長石	緻密	緻密	緻密
焼 成		普通	良 好	良 好	良 好
出 土 遺 物		4住フク土	4住フク土	4住フク土	4住フク土
備 考		土器	須恵器	須恵器	須恵器

第三章 造 物

実測図番号		第40図03	第40図06	第40図09	第40図08
出土地点 トレンチ 区	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	壺	蓋	蓋	壺	
法 量	口縫径 (cm)		15.8	15.4	
	器高 (cm)	2.0	1.4	1.9	2.1
	最大胴径 (cm)				
	壁 厚 (cm)	0.4	0.4	0.5	0.6
	底 径 (cm)	11.0			
口 器 形	欠損	平縫	平縫	欠損	
縫 形 部	表	ロクロ仕上	ロクロ仕上		
	裏	ロクロ仕上	ロクロ仕上		
器 形	大部分欠損 最下部ロクロ仕上			大部分欠損	
縫 形 部	表	自然縫有り ツマミ欠損	自然縫有り ツマミ欠損	下部著しく風化	
	裏			下部著しく風化	
底 部	付け高台			丸底 ヘラおこし	
色 調	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	
胎 土	緻密	緻密	緻密	不良	
焼 成	良好	良好	良好	普通	
出 土 痕 様	4往フク土	4往フク土	4往フク土	4往フク土	
備 考	底部にカマ印 須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	

第1節 土 器

実測図番号		第40図00	第40図00	第41図00	第41図00	
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
法量	器 形	杯	壺	長颈壺	甕	
	口 程 径 (cm)	15.6	30.9	19.4	15.4	
	器 高 (cm)	2.8	14.8	42.9	5.3	
	最大側径 (cm)		34.1	20.4		
	壁 厚 (cm)	0.4	0.8	0.8	0.6	
	底 径 (cm)			8.2		
縁部	口 器 形	平縁、わずかに外反	平縁で大きいくの字状に外反 口唇は外へ流れ下がっている。	平縁で大きく外反。口唇は丸くなっている。	平縁で急に外反し、口唇はとがり気味	
	整形	表	ロクロ仕上	タタキ目仕上	ヨコナデ	
		裏		ロクロ仕上	ヨコナデ 輪積痕	
	胴 器 形		胴中央部に最大径を持ち、丸味を呈す。	口唇から底部まで続く長颈壺の一種エボシ型變	胴下部欠損	
	整形	表		タタキ目仕上	上部横位ナデ(ハケ目) 下部横位ミガキ	
		裏			上部一定方向ナデ 中部一横位ナデ 下部一横位ナデ(ハケ目)	
底 部		欠 槌	欠 槌	平 底	欠 槌	
色 調		青灰黒色	青灰黒色	茶褐色	黄褐色	
胎 土		緻 密	緻 密	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	
焼 成		良 好	不 良	普 通	不 良	
出 土 遺 構		4住フク土	4住フク土	11住(No.21, 23, 25)	11住(No.67)	
備 考		須恵器	須恵器	土師器	土師器	



第40図 土師器・須恵器実測図 4住 (9~18)

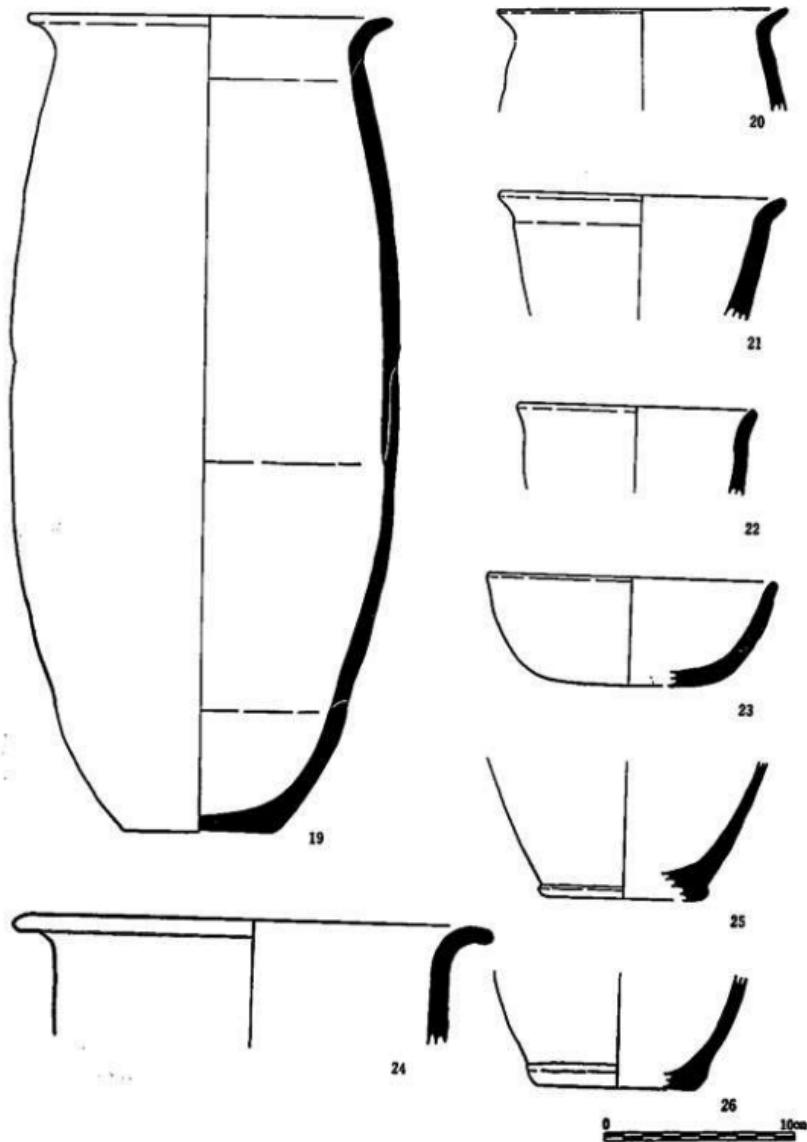
第1節 土器

実測図番号		第41図20	第41図22	第41図23	第41図26
出土地点	地 点				
	トレンチ				
	区				
法 量	器 形	甕	甕	壺	甕
	口 径 (cm)	15.2	12.7	15.3	25.5
	器 高 (cm)	6.5	4.7	5.7	6.3
	最大腹径 (cm)				
	壁 厚 (cm)	0.9	0.7	0.8	0.9
	底 径 (cm)				
	口 器 形	平縁で、わずかに外反。口唇は丸味を呈す。	平縁で、わずかに外反。口唇は外そぎ気味	平縁で、わずかに内反。口唇は丸味を呈す。	平縁で、口唇は大きくたれさがり外反
	縁 形	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
部	表	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
	裏	ヨコナデ	ヨコナデ	横位ミガキ	ヨコナデ
	器 形	肩部から底部へやや立ちまっていく。	肩部はわずかにふくらむ。大部分欠損	大きく内反し碗状の形態を強くする。	大部分欠損
	縁 形	横位ナデ	横位ナデ		横位ミガキ
部	表	横位ナデ	横位ナデ	横位ミガキ	横位ナデ
	裏	横位ナデ	横位ナデ	横位ミガキ	横位ナデ
底 部		欠 損	欠 損	平 底	欠 損
色 調		茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色
胎 土		雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
燒 成		普通	不 良	不 良	普 通
出 土 番 号		11住カマド左	11住(№82)	11住(№64)	11住(№36)カマド右
備 考		土師器	土師器	土師器	土師器

第三章 遺 物

実測図番号		第 41 図 29	第 41 図 30	第 42 図 1	第 42 図 2
出土地点	地 点				
	トレンチ				
	区				
法 量	器 形	型	變	變	變
	口 径 � 徑 (cm)			27.6	
	器 高 (cm)	7.4	6.0	2.5	3.0
	最大周径 (cm)				
	壁 厚 (cm)	0.5	0.6	0.7	0.5
部	底 径 (cm)	9.0	8.5		8.9
	口 壁 形	欠 損	欠 損	平縁で、大きく斜目に外反	欠 損
	表			ヨコナデ	
	裏			ヨコナデ	
脇 部	器 形	大部分欠損	大部分欠損	欠 損	大部分欠損
	表	縦位ナデ	縦位ナデ		縦位ミガキ
	裏	斜位ナデ	横位ナデ		
底 部		平 底	平 底	欠 損	平 底
色 調		黒茶褐色	黒 色	暗黄褐色	暗赤褐色
胎 土		雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
燒 成		普 通	普 通	普 通	良 好
出 土 遺 構		11住 (No.28)	11住カマド右	11住カマド	11住カマド左
備 考		土師器	土師器	土師器	土師器

第1節 土 器



第41図 土器実測図 11件 (19~26)

第三章 遺物

実測器番号		第42回4	第42回00	第42回00	第42回特
出土地点 トレンチ 区	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	甕	甕	甕	高杯	
法 盆	口 距 径 (cm)				
	器 高 (cm)	4.7	4.4	4.6	6.1
	最大胴径 (cm)				
	壁 厚 (cm)	0.9	0.7	0.6	1.5
口 桶	底 径 (cm)	8.8	7.3	7.8	
	器 形	欠損	欠損	欠損	欠損
	表				
部 部	楚形				
	裏				
肩 部	器 形	大部分欠損	大部分欠損	大部分欠損	欠損
	表	あらい模様ナデ	あらい模様ナデ	横位ナデ	
	楚形	横位ナデ		横位ナデ	
底 部	裏				
	平 底	平 底	平 底	欠 損	
色 調	暗黄褐色	黒褐色	明黄褐色	明黄褐色	
胎 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	
燒 成	普 通	普 通	普 通	不 良	
出 土 道 構	11往(N=20)	11往床面	11往床面	11往フク土	
備 考	土師器	土師器	土師器	土師器	

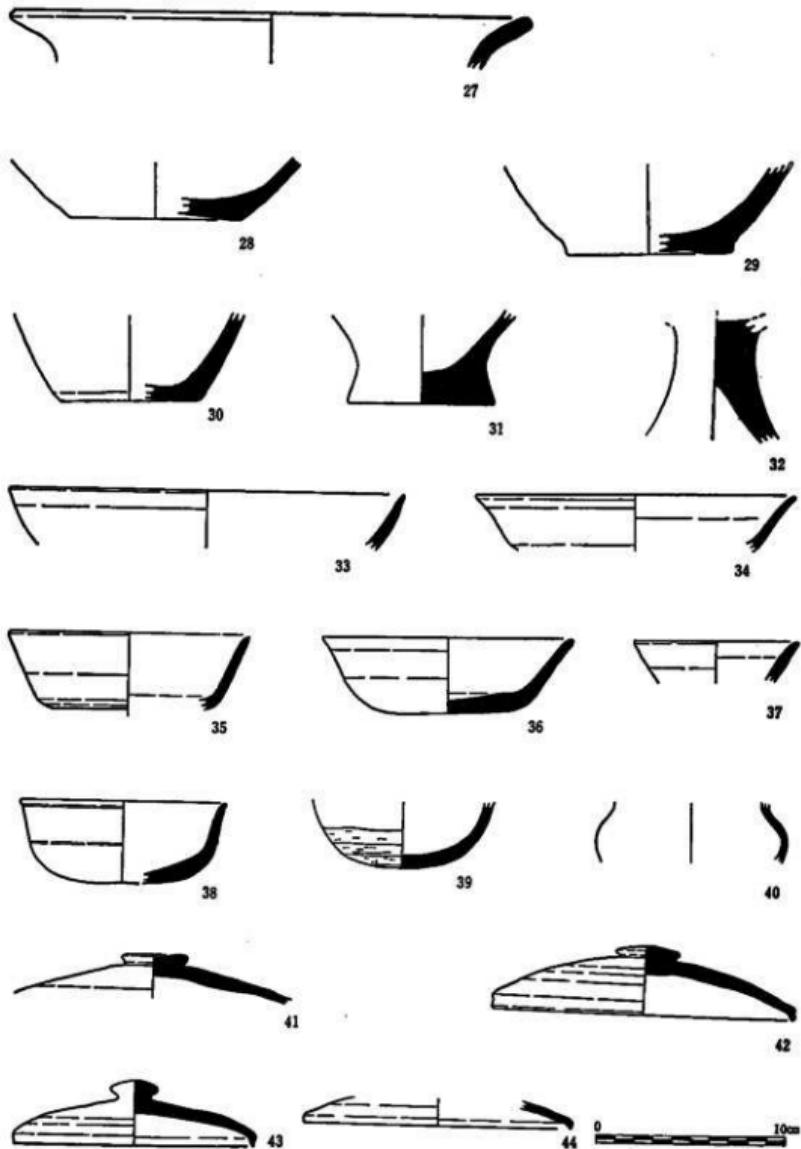
第1節 土 器

実測図番号		第42図03	第42図04	第42図05	第42図06
出土地点	地 点				
	トレンチ				
	区				
最 法	器 形	坏	坏	坏	坏
	口 横 径 (cm)	21.0	17.0	12.8	13.4
	器 高 (cm)	3.0	2.8	4.2	3.9
	最大頸径 (cm)				
	壁 厚 (cm)	0.5	0.5	0.4	0.5
	底 径 (cm)				
口 器 形	平縁で外反し、口唇に向って薄くなる。		平縁で外反し、口唇に向って薄くなる。	平縁、口唇は丸くなる。	平縁、途中に段がわざかにつく。
	表	ロクロ仕上	ロクロ仕上	ロクロ仕上	ロクロ仕上
			ロクロ仕上		
	裏				
脇 器 形	脇下部欠損肥厚する。		脇下部欠損肥厚する。		
	表		ロクロ仕上	ロクロ仕上	ロクロ仕上
	裏			ロクロ仕上	ロクロ仕上
底 部	欠 損	欠 損		付け高台	平 底
色 調	青灰黒色	青灰黒色		青灰黒色	青灰黒色
胎 土	緻 密	緻 密		緻 密	緻 密
燒 成	良 好	良 好		良 好	良 好
出 土 造 構	11往フク土	11往フク土		11往フク土	11往(№75)
備 考	須恵器	須恵器		須恵器	須恵器

第三章 造 物

実測番号		第42回(前)	第42回(中)	第42回(後)	第42回(後)
出土地點 トレンチ 区	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	坏	坏	瓶	壺	
法	口 線 径 (cm)	8.6	11.0		
量	器 高 (cm)	2.2	4.4	3.6	3.3
	最大側径 (cm)				10.1
	蓋 厚 (cm)	0.5	0.6	0.6	0.4
	底 径 (cm)				
口	器 形	平縁でわざかに外反	平縁でわざかに外反	欠 損	欠 損
縁 部	表	ロクロ仕上	ロクロ痕顯著		
	裏	自然釉有り ロクロ仕上			
脚	器 形	下部欠損	下部欠損	下部欠損	脚中央が球形状によく らむ。
縁 部	表	ロクロ仕上	ロクロ仕上	ヘラケズリ	
	裏	自然釉有り ロクロ仕上		ヘラケズリ	
底 部	欠 損	欠 損	丸 底	欠 損	
色 調	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	
胎 土	緻 密	緻 密	緻 密	緻 密	
燒 成	良 好	不 良	良 好	良 好	
出 土 造 構	11住フク土	11住カマド	11住(No.76)	11住フク土	
備 考	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	

実測番号		第42回時	第42回時	第42回時	第42回時
出土場所	地 点				
	トレンチ				
	区				
法 直	器 形	蓋	蓋	蓋	蓋
	口 極 高 (cm)		16.1	12.8	14.2
	器 高 (cm)	2.3	3.7	3.4	1.8
	最大周径 (cm)				
	壁 厚 (cm)	0.5	0.5	0.6	0.4
口 部	器 形	欠損	平縁	平縁	平縁
	縁 整形 部	表	ロクロ仕上	ロクロ仕上	ロクロ仕上
		裏		ロクロ仕上	ロクロ仕上
肩 部	器 形	ツマミの中央部は凹み 幅平気味	ツマミの中央部は突起 気味	ツマミの腹は弧状を呈す。	ツマミ欠損
	縁 整形 部	表	ヘラケズリ ロクロ仕上	ヘラケズリ ロクロ仕上	ロクロ仕上
		裏	*		
	色 調	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色
胎 土	緻 密	緻 密	緻 密	緻 密	緻 密
燒 成	良 好	良 好	良 好	良 好	良 好
出 土 遺 構	11往カマド	11往床面	11往フク土	11往床面	11往床面
備 考	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器

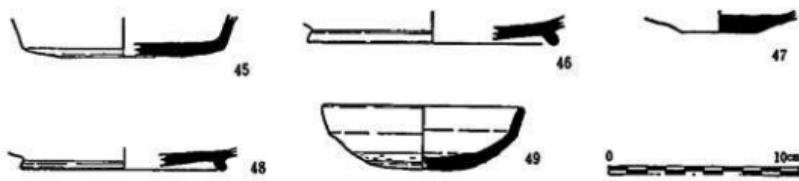


第42圖 土師器・須惠器実測図 11件 (27~44)

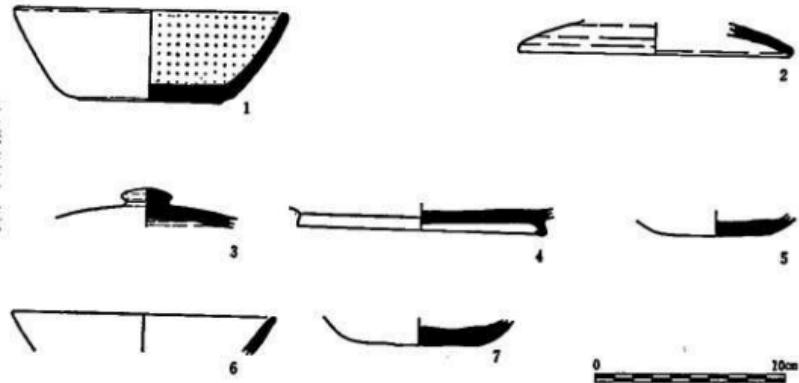
第1節 土 器

実測器番号		第43回前	第43回中	第43回後	第43回終
出土地点	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	坏	坏	壊	坏	
口縁径 (cm)					
法	器 高 (cm)	2.0	1.1	1.0	1.6
量	最大胸径 (cm)				
底	底 厚 (cm)	0.5	0.6	0.5	0.6
	底 径 (cm)	6.5	10.7	3.7	13.2
口	器 形	欠損	欠損	欠損	欠損
縁	表				
	整形				
部	裏				
肩	器 形	大部分欠損	大部分欠損	欠損	大部分欠損
部	表	ロクロ整形	ロクロ整形		ロクロ整形
	裏				
底 部	平 底	付高台 ケズリ	平 底	付高台 ケズリ	
色 調	青灰黑色	青灰黑色	青灰黑色	青灰黑色	
胎 土	緻 密	緻 密	緻 密	緻 密	
烧 成	良 好	良 好	良 好	良 好	
出 土 週 期	11住フク土	11住フク土	11住フク土	11住カマド	
備 考	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	

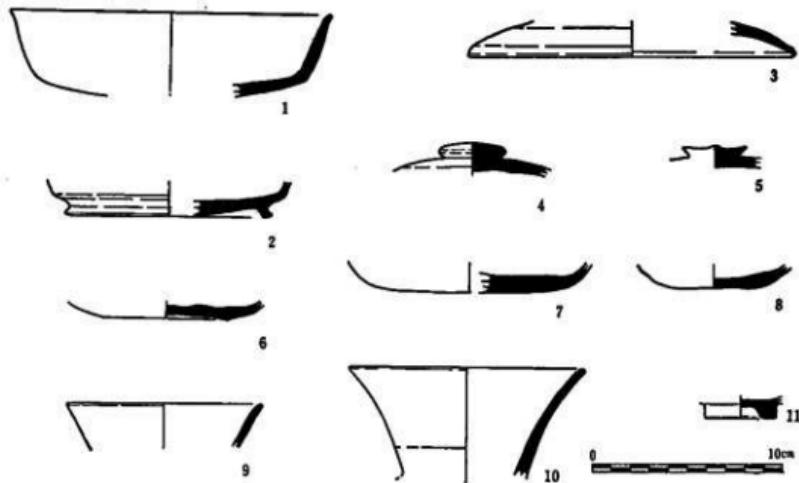
第三章 造 物



第43図 須恵器実測図 11住（45～48） 13住（49）



第44図 土師器・須恵器実測図 6住（1～7）



第45図 須恵器・中世陶器実測図 ダリット（1～11）

第1節 土 器

実測図番号		第 43 図 (4)	第 44 図 (1)	第 44 図 (2)	第 44 図 (3)
出 土 地 点	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	杯	杯	蓋	蓋	
法	口 檻 體 (cm)	10.7	14.6	14.5	
量	器 高 (cm)	3.3	4.7	1.6	2.1
	最大直径 (cm)				
	體 厚 (cm)	0.4	0.6	0.5	0.6
	底 径 (cm)	5.7	7.6		
口	器 形	平縁でわずかに外反、 口唇部はやや丸い。	平縁でわずかに外反、 口唇部はやや丸い。	平 縁	欠 損
縁 部	表	下部に段を有す。ロクロ 整形	ミガキ	ロクロ仕上	
	裏	ロクロ整形	ヘラミガキ 内墨	ロクロ仕上	
脚	器 形			ツマミ欠損	ツマミは中央がやや高 くなっている。
縁 部	表	ケズリ ロクロ整形	ミガキ	ロクロ仕上	ロクロ仕上
	裏	ロクロ整形	ヘラミガキ 内墨		
底 部	やや丸座を呈す	平 底			
色 製	青灰黒色	茶褐色	青灰黒色	青灰黒色	
胎 土	鐵 密	雲母・石英・長石	鐵 密	鐵 密	
燒 成	良 好	良 好	良 好	良 好	
出 土 造 構	13住床面	6住フク土	6住フク土	6住フク土	
備 考	須恵器	土師器	須恵器	須恵器	

第三章 遺物

実測図番号		第 44 図 (4)	第 44 図 (5)	第 44 図 (6)	第 44 図 (7)
出土場所	地 点				
	トレンチ				
	区				
法 量	器 形	壺	壺	壺	壺
	口縁径 (cm)				
	器 高 (cm)	1.3	1.3		
	最大胴径 (cm)				
	壁 厚 (cm)				
	底 径 (cm)	13.2	5.8		
口 部	器 形	欠 損	欠 損	平縁で、やや外反	欠 損
	縁 部	表			
	整 形				
	裏				
胴 部	器 形	欠 損	欠 損	欠 損	欠 損
	縁 部	表			
	整 形				
	裏				
	底 部	平 底	平 底	欠 損	平 底
	色 調	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色
胎 土	致 密	致 密	致 密	致 密	致 密
	燒 成	良 好	良 好	良 好	良 好
出 土 遺 備	6住フク土	6住フク土	6住フク土	6住フク土	6住フク土
備 考	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器

第1節 土 器

実測図番号		第45図(1)	第45図(2)	第45図(3)	第45図(4)
出土地点 トレンチ 区	地 点				
	口縁径 (cm)	17.1		17.4	
	脚 高 (cm)	5.0	1.8	1.4	1.8
法 盆	最大胸径 (cm)				
	盛 厚 (cm)	0.5	0.5	0.6	0.7
	底 径 (cm)		11.0		
口 部	器 形	平縁で、わずかに外反	欠 損	平 縁	欠 損
	縁 表			ロクロ仕上	
	盛形 裏			ロクロ仕上	
胴 部	器 形	上部で崩折	欠 損	ツマミ欠損	ツマミは平坦
	縁 表	ヘラケズリ		ロクロ仕上	ロクロ仕上
	盛形 裏	ヘラケズリ			
底 部		欠 損	付け高台		
色 調		青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色
胎 土		緻 密	緻 密	緻 密	緻 密
焼 成		良 好	良 好	良 好	良 好
出 土 造 構		グリット	グリット	グリット	グリット
備 考		須恵器	須恵器	須恵器	須恵器

第三章 遺 墓 物

実測図番号		第45図(5)	第45図(6)	第45図(7)	第45図(8)
出土地点 トレンチ 区	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形 法 量	器 形	蓋	坏	坏	坏
	口縁径 (cm)				
	要高 (cm)	1.2	0.9	1.6	1.2
	最大幅径 (cm)				
	壁厚 (cm)	0.6	0.5	0.7	0.7
口 縁 部	底径 (cm)		5.8	8.5	4.2
	器 形	欠損	欠損	欠損	欠損
	表				
	整形				
	裏				
肩 部	器 形	ツマミは中央が高く、両側は凹む。	欠損	欠損	欠損
	表				
	整形				
	裏				
底 部		平 底	平 底	平 底	平 底
色 調	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色	青灰黒色
胎 土	緻密	緻密	緻密	緻密	緻密
燒 成	良 好	良 好	良 好	良 好	良 好
出 土 遺 槊	グリット	グリット	グリット	グリット	グリット
備 考	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器

第1節 土器

実測図番号		第45図(9)	第45図(10)	第45図(11)
出土地点	地 点			
	トレンチ			
	区			
器 形		杯	瓶	茶碗
法 量	口 径 径 (cm)	10.4	12.6	
	器 高 (cm)	2.4	6.0	1.1
	最大胴径 (cm)			
	壁 厚 (cm)	0.4	0.4	0.5
	底 径 (cm)			3.8
口 部	器 形	平縁で、わざかに外反する。	平縁で、大きく外反する。	欠損
	縁 表		自然釉有り	
	整形			
	裏		自然釉有り ロクロ仕上	
肩 部	器 形	欠損		欠損
	表			
	整形			
	裏			
底 部	欠 損			欠損
	表			
	整形			
	裏			
色	青灰黒色	青灰黒色	黒茶色	
胎 土	緻 密	緻 密	緻 密	
燒 成	良 好	良 好	良 好	
出 土 造 構	グリット	グリット	グリット	
備 考	須恵器	須恵器	天目茶碗	

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図・番号・名称・器形・石質・出土遺物である。

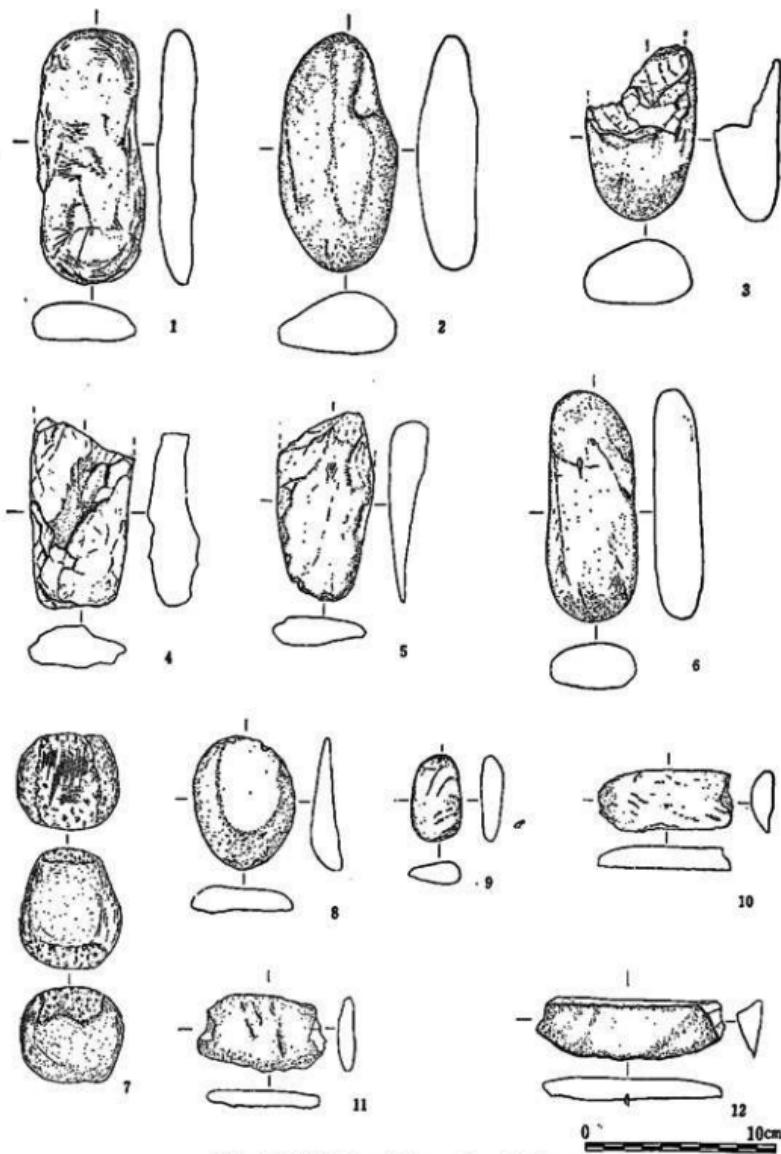
(飯塚政美)

第3表 主要石器一覧

図	番号	名 称	器 形	石 質	出 土 遺 物
第46図	1	蔽 石		綠	泥 岩
"	2	"		硬	砂 岩
"	3	磨 製 石 斧	短 櫛	乳	棒 状 岩
"	4	打 製 石 斧	短 櫛	綠	泥 岩
"	5	"	短 櫛	綠	"
"	6	磨 石		硬	泥 岩
"	7	"		硬	"
"	8	"		綠	泥 岩
"	9	"		綠	"
"	10	石 包 T		綠	"
"	11	"		砂 硬	泥 岩
"	12	"		綠	"
第47図	13	"		硬	"
"	14	磨 石	短 櫛	綠	泥 岩
"	15	石 製 円 板	短 櫛	砂 硬	泥 岩
"	16	打 製 石 斧	短 櫛	硬	泥 岩
"	17	小型磨 製 石 斧	短 櫛	綠	泥 岩
"	18	"	短 櫛	硬	"
"	19	磨 製 石 斧	短 櫛	硬	泥 岩
"	20	蔽 石		硬	"
"	21	磨 製 石 錐		粘	板 岩
"	22	研		油	頁 岩
"	23	小型円形状石器		綠	泥 岩
"	24	横 刀 型 石 器		砂	泥 岩
"	25	"		粘	板 岩
"	26	磨 製 石		硬	砂 岩
第48図	27	蔽 石	櫛	綠	泥 岩
"	28	打 製 石 斧	櫛	硬	泥 岩
"	29	"	短 櫛	綠	泥 岩
"	30	磨 製 石 斧	短 櫛	硬	泥 岩
"	31	蔽 石		綠	泥 岩
"	32	研		綠	泥 岩
"	33	横 刀 型 石 器		綠	泥 岩

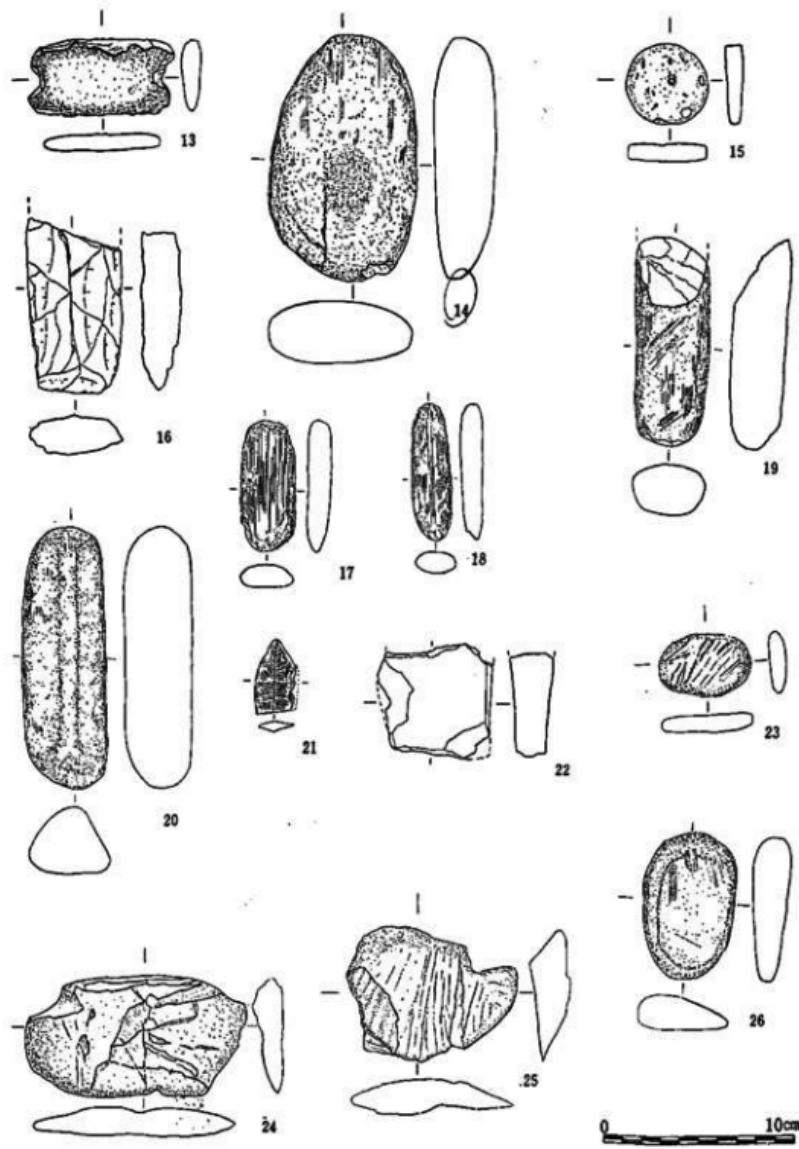
第2節 石 器

団	番号	名 称	器 形	石 質	出 土 造 構
第48団	34	打 製 石 斧	盤 角	硬	砂 岩
"	35	磨 製 石 斧	形	綠	泥 岩
"	36	打 製 石 斧	形	硬	砂 岩
"	37	磨 砧	板	粘	砂 岩
"	38	磨 砧	板	硬	砂 岩
第49団	39	磨 砧	盤	綠	泥 岩
"	40	打 製 石 斧	盤	硬	砂 岩
"	41	磨 砧	盤	綠	泥 岩
"	42	研 磨	盤	綠	泥 岩
"	43	石 包	丁	硬	砂 岩
"	44	横 刀 型 石 器	盤	硬	砂 岩
"	45	"	盤	綠	泥 岩
"	46	"	盤	綠	泥 岩
"	47	石 包	丁	盤	泥 岩
"	48	打 製 石 斧	盤	硬	砂 岩
"	49	磨 砧	盤	砂 板	泥 岩
第50団	50	小 形 凸 形 状 石 器	盤	砂 板	第 12 号 住 居 址
"	51	磨 砧	石	砂 板	"
"	52	"	盤	硬	"
"	53	打 製 石 斧	盤	砂 板	第 13 号 住 居 址
"	54	"	盤	砂 板	ダ リ ッ ト
"	55	磨 砧	石	"	"
"	56	横 刀 型 石 器	盤	"	"
"	57	石 包	丁	"	"
"	58	磨 砧	砂 石	"	"
"	59	磨 砧	砂 石	"	"
"	60	石	盤	"	"

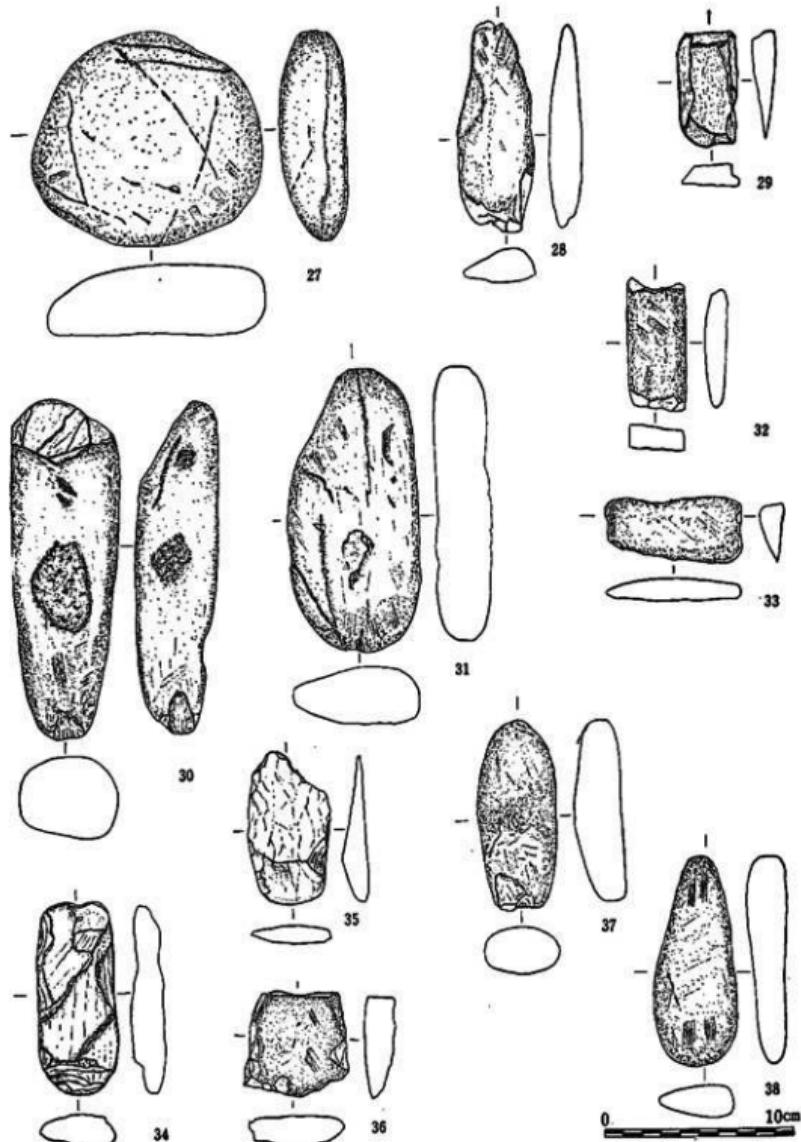


第46図 石器実測図 1住（1~10） 2住（11~12）

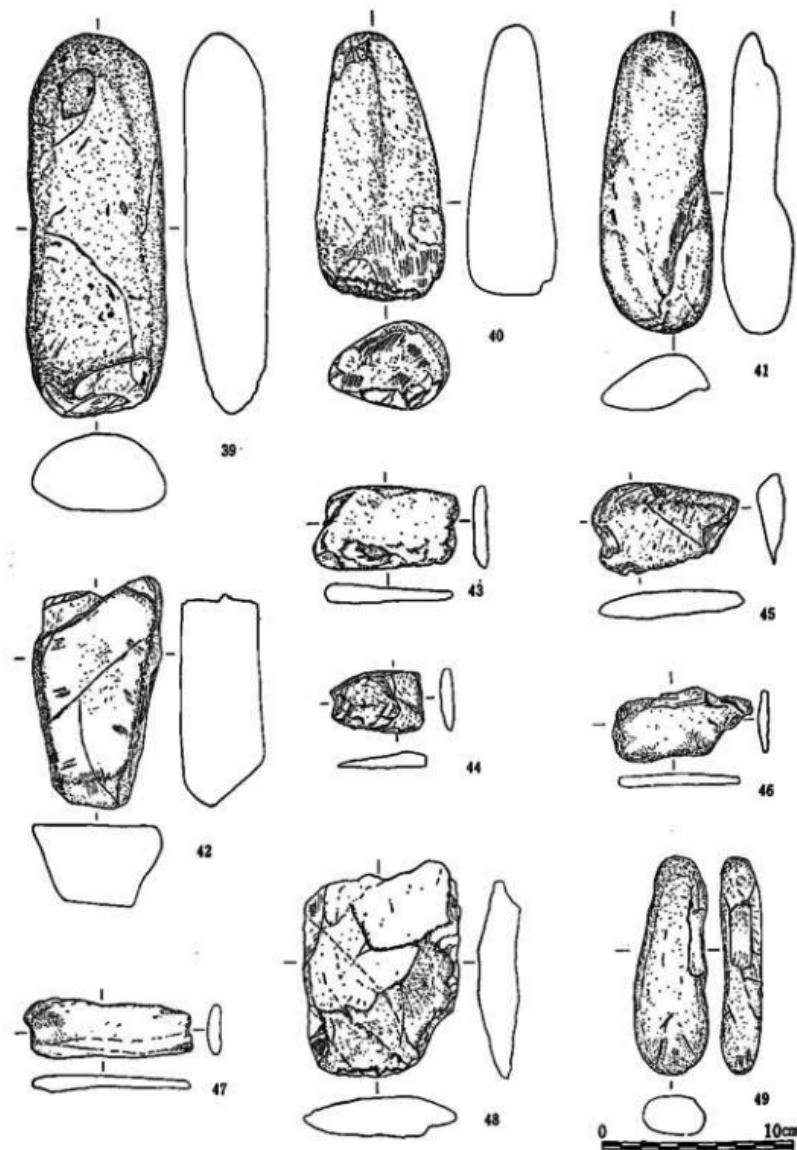
第2節 石 器



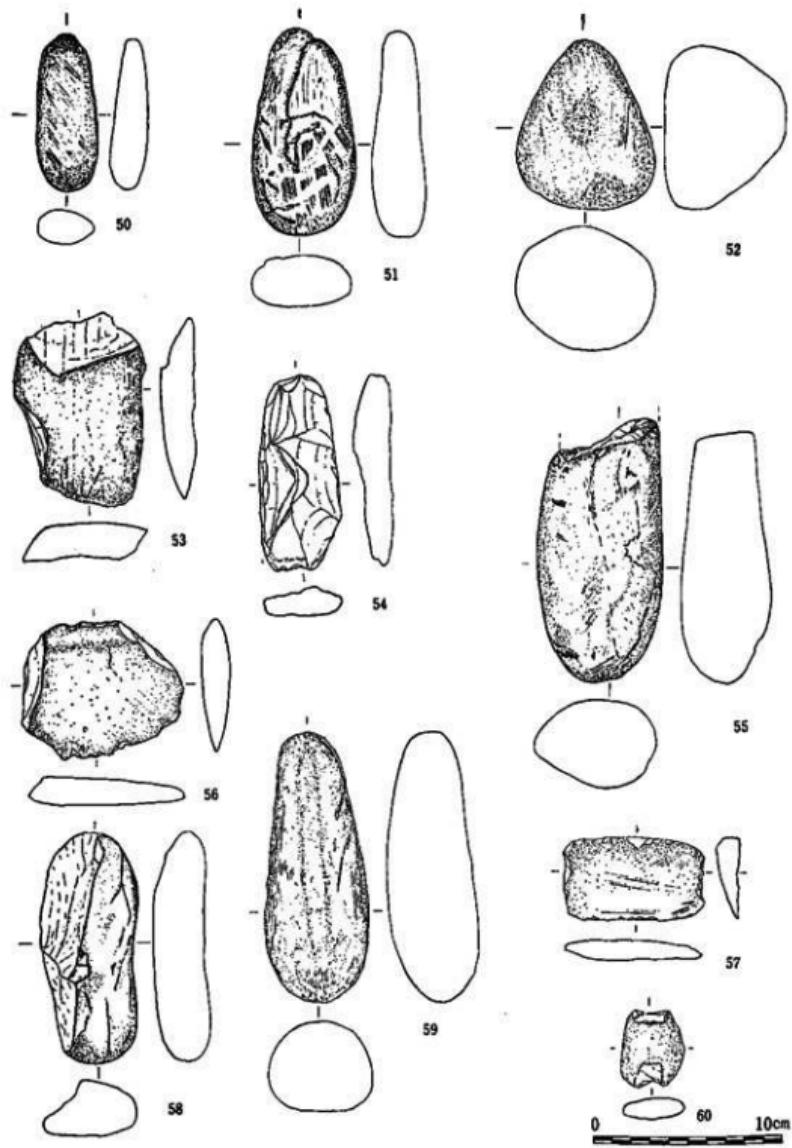
第47圖 石器測量圖 2住 (13~15) 5住 (16~21) 6住 (22~23) 7住 (24~26)



第46図 石器実測図 7住(27) 8住(28~33) 9住(34~38)



第48図 石器実測図 9住(39~46) 10住(47~49)

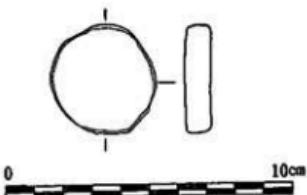


第50図 石器実測図 12件 (50~52) 13件 (53) グリット (54~60)

第3節 土 製 品

右図に掲載したのは土製円板であり、1点出土したのみである。土器破片の周囲を打ち欠いて円形状に整え、周縁を丁寧に磨き、形を整えてある。直径3.7cm、厚さ0.9cmの大きさを有し、表面文様は無文である。

第5号住居址の覆土上層面より出土している。



第51図 土製品実測図

本遺跡出土の鉄製品としては、鉄片1、鉄鎌1、刀子

2、鉄鋤1の合計5点であり、量的に考えてみればその数は少ない方に含まれる。

鉄片（第52図(1)）

第2号住居址の床面より出土している。どの部分にも加工した痕跡は認められない。腐蝕の度合は少なく、良質の鉄である。出土住居址が弥生後期の住居址である点からして注目すべき遺物であろう。

鉄鎌（第52図(2)）

第3号住居址の覆土下層面より出土している。鉄製鎌は、長方形の鉄板の尖端部をわずかに折りかえたものであり、現長約10.8cm、幅約1.9cmを計測し、全体的にかなり腐蝕度は進んでいるが、保存状態は良好であり、原形を保っている。出土地点は第3号住居址と、第4号住居址の切り合い付近であり、第3号住居址出土と前述したが、第3号住居址は弥生後期、第4号住居址は奈良時代である。この点からしてみて、本遺物の出土遺構は問題になるところである。

刀子（第52図(3)～(4)）

両者とも第4号住居址より出土している。この2点の刀子のうち(3)は尖頭部を欠損している。(4)は尖端部が良く残っており鋸歯部分も明瞭である。両者とも柄に使用した木質部が明瞭に残存している。前者は現長約10.1cm、幅約1.1cm、後者は現長約12.9cm、幅約1.2cmを算している。

鉄鋤（第52図(5)）

グリットより出土した鉄製の平根鎌であり、その保存状態は極めて良好である。現長約7.5cm、鎌部の幅約2.6cm、中茎約4.9cmを計測できる。

形態及び周囲の遺構の状況からして、奈良時代に属していると思われる。

(飯塚政典)

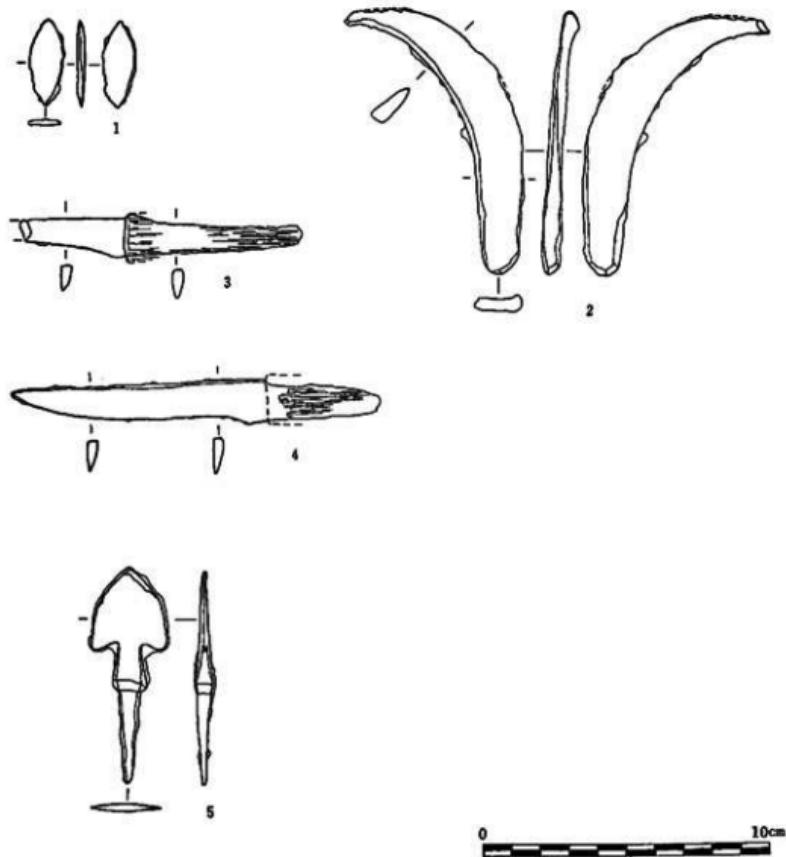


图32图 铁器实测图

第Ⅳ章 まとめ

鳥井田遺跡の発掘において検出された弥生時代の住居址は総数9軒である。これらの住居址を住居址の特徴ごとに述べていくことにする。プランは隅丸方形5棟、隅丸長方形3棟、方形1棟である。主柱穴の形数はすべて4本より成り、整然と配置されていた。ピットが壁外に配列されていたのは7棟あり、その大きさ及び数は一定ではないが、上屋構造及び軒構造についての関係があるのであろうか。床面中央部付近にはほぼ一定の規模で、浅いピットが直列状に検出された住居址がしばしば発見されたが、これは位置及び深さからして、間仕切り的な要素を含んでいるのではないか。

次に主柱穴の形態について簡単に触れておこう。ここでも他の遺跡に見られる超偏平な主柱穴例が大部分であり、割材を用いていることが指摘される好事例であろう。主柱穴内からは柱を埋める時に人为的に入れた黄褐色土層が観察できた。

炉の形態については大部分が埋甕炉の形態を有していた。埋甕炉のなかで新炉、旧炉をもつ住居址としては第1号住居址、第3号住居址、第7号住居址、第10号住居址があり、すべて、正位の状態で出土した。これらの埋没状況及び出土状態については前に実測図で掲載してあるので、今回は省略させていただく。埋甕炉が单一出土の住居址としては第5号住居址、第8号住居址があり、すべて、正位状態で出土した。第12号住居址は当初では埋甕炉の形態を有していたと思われるが、検出時ではわずかに残片が残存しているのみであった。第9号住居址は全く炉は不明。

炉の位置—西側2本の主柱穴の長軸線中間点よりやや西側にあるのは第1号住居址。前述の主柱穴の長軸線中間点にあるのは第8号住居址。北側2本の主柱穴の長軸線中間点よりやや北側にあるのは第3号住居址。東側2本の主柱穴の長軸線中間点よりやや東側にあるのは第2号住居址、第5号住居址、第7号住居址、第10号住居址。東側2本の主柱穴の長軸線中間点にあるのは第12号住居址。

炉内の土器は、基本的に底部の欠けた甕胴部以上を口縁を上にして埋設してあった。床面上にどの住居址にも、貼り床の部分が認められた。この部分の範囲は住居址ごとにばらばらで一定はしていないかった。

遺物—どの住居址からも弥生式土器がかなりの量出土したが、それらの器型は大部分が甕型土器であり、わずかに壺形土器や、高杯型土器も発見された。特殊な土器として第2号住居址から小形手摺型土器が1点出土している。これらは座光寺原式や中島式に含まれると思われる。

石器としては打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、石包丁、石製円板、砥石、横刃型石器、棒状石器、円形状石器、石錐、磨製石錐の出土があった。これらのなかで弥生時代独特の磨製石錐は1点だけの出土に止まった。

第4号、第11号、第13号住居址はカマドを有する奈良時代の住居址であり、伊那市内において単独にこの時期だけの住居址は類例が少ない。

第IV章 まとめ

第2号住居址出土の鉄片は弥生後期時代に伊那市へ鉄が入ってきたことを物語ってくれる貴重な資料である。伊那市内ではこの時期出土としては唯一の遺物である。

最後に今までに伊那市内で発掘調査された遺跡名と所在地を記すと次のようなになる。

和手遺跡—伊那市西春近源訪形，富士山下遺跡—伊那市西春近源訪形，山の根遺跡—伊那市西春近山本，中村遺跡—伊那市西春近中村・下島，東方A遺跡—伊那市西春近東方，砂場遺跡—伊那市手良中坪，堂垣外遺跡—伊那市美鷹笠原，まこもが池遺跡—伊那市富県貝沼
（飯塚政美）

図 版



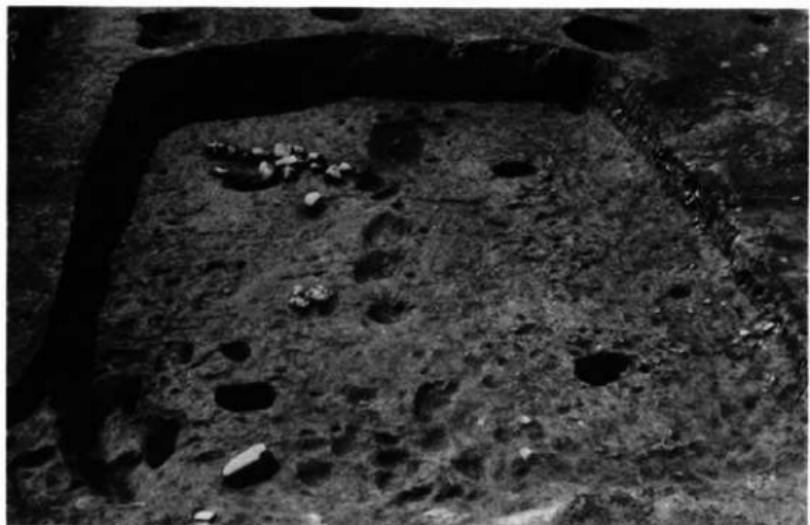
遺跡地を南側より眺む



遺跡地を西側より眺む



遺構配置（東側より既む）



第1号住居址



第2号住居址



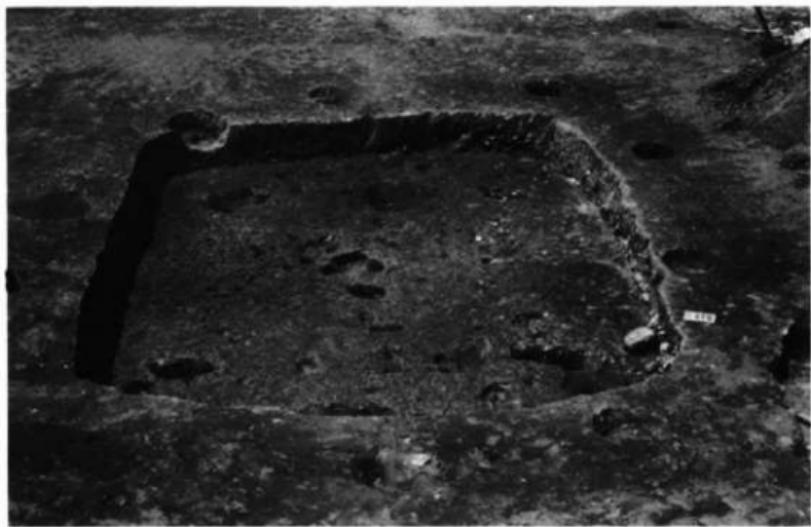
第3号住居跡



第5号住居跡



第7号住居址



第8号住居址



第9号住居址



第10号住居址



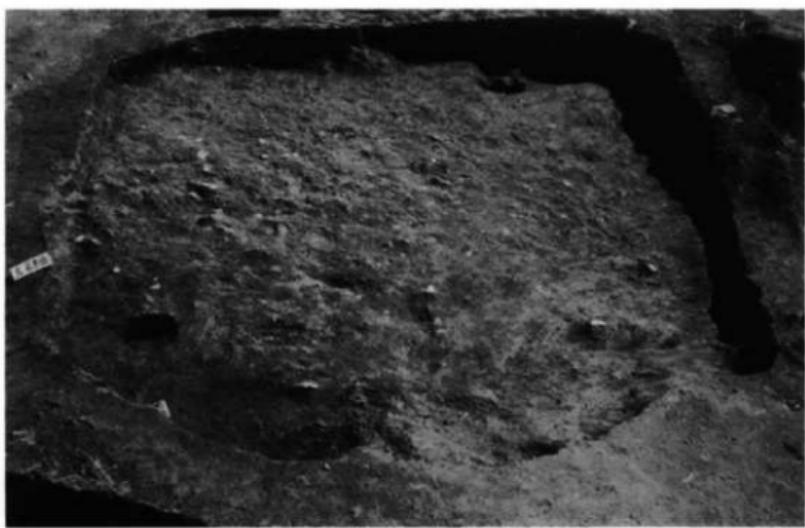
第12号住居址



第4号住居址



第11号住居址



第6号住居址



第1号住居址埋甕炉



第1号住居址埋甕炉断面



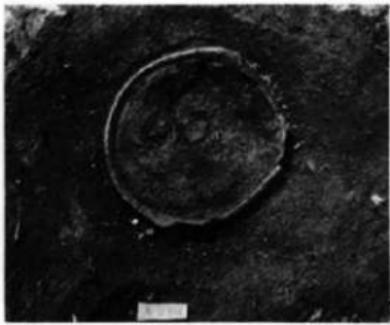
第3号住居址埋甕炉



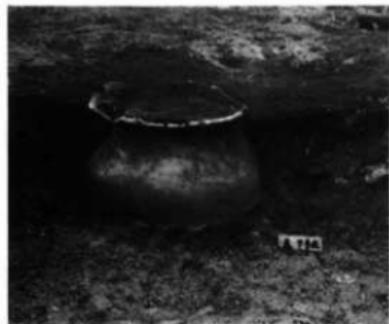
第3号住居址埋甕炉断面



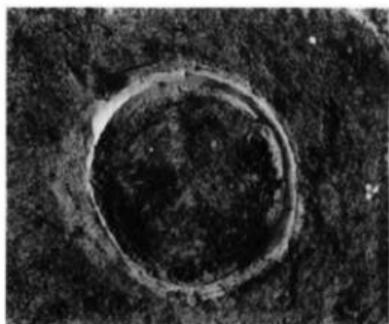
第5号住居址埋甕炉



第7号住居址埋甕炉



第7号住居址埋甕伊断面



第8号住居址埋甕伊



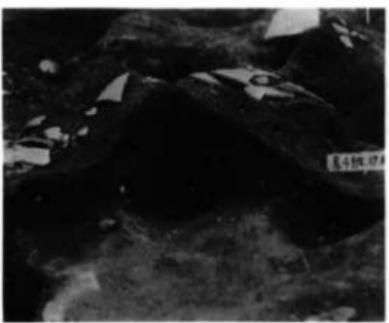
第8号住居址埋甕伊断面



第10号住居址埋甕伊



第10号住居址埋甕伊断面



第4号住居址カマド



土器出土状况



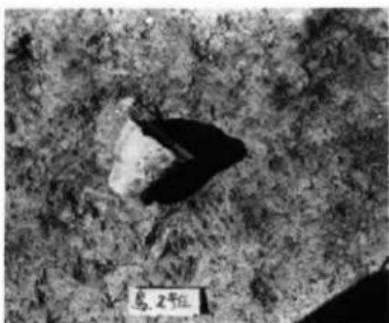
土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况

图版二 遗物出土状况



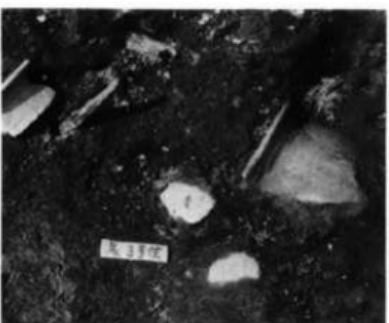
土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土狀況

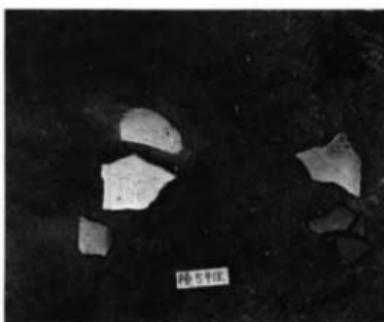


土器出土狀況



5號房
5室

土器出土狀況



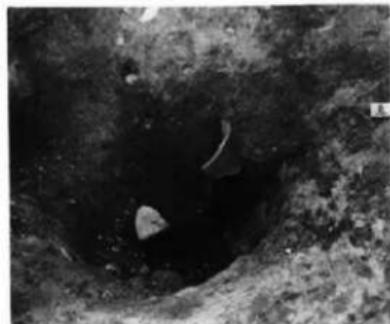
土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



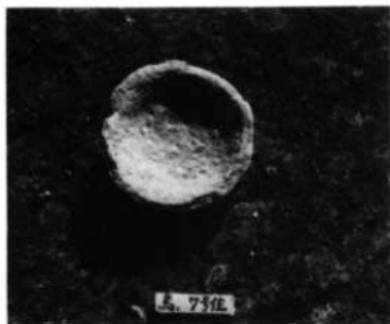
土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



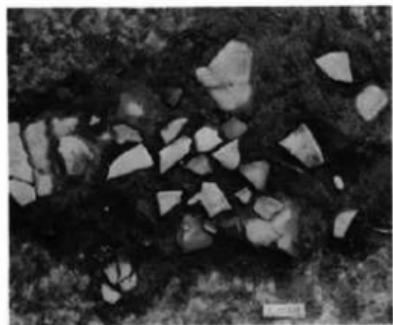
土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



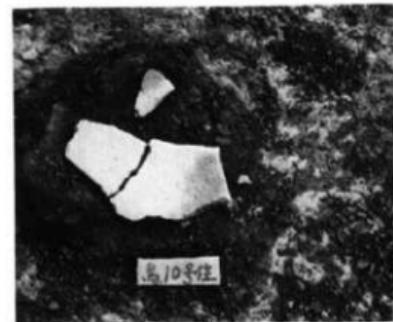
土器出土狀況



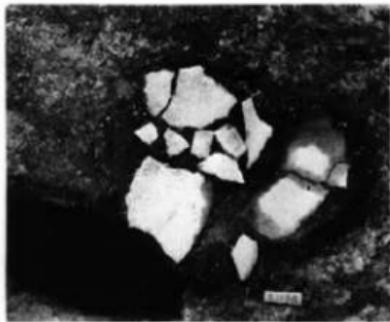
土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



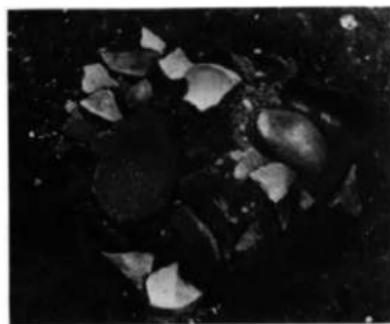
土器出土状况



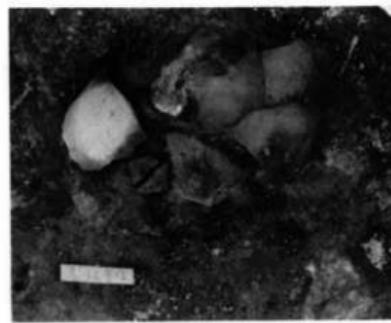
土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



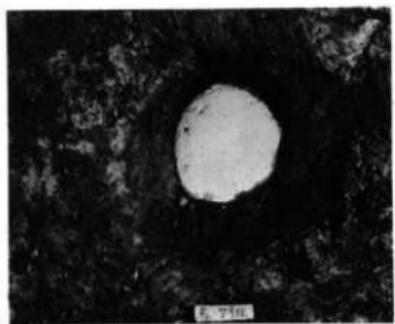
土器出土状况



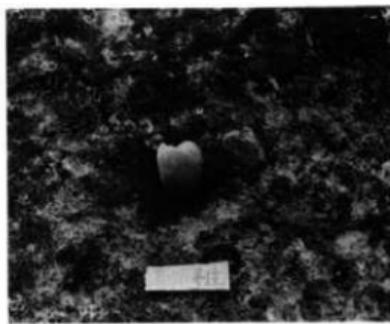
土器出土狀況



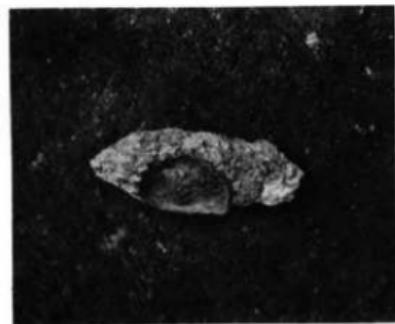
土器出土狀況



石器出土狀況



石器出土狀況



鐵器出土狀況



鐵器出土狀況



1住(1,3) 1住埋甕(2) 2住(4) 3住埋甕(6) 5住(5,7) 5住埋甕(8)



9



10



11



14



12



13

5住(9) 7住堆鹽伊(10) 8住堆鹽伊(11) 8住(12~13) 9住(14)



15



17



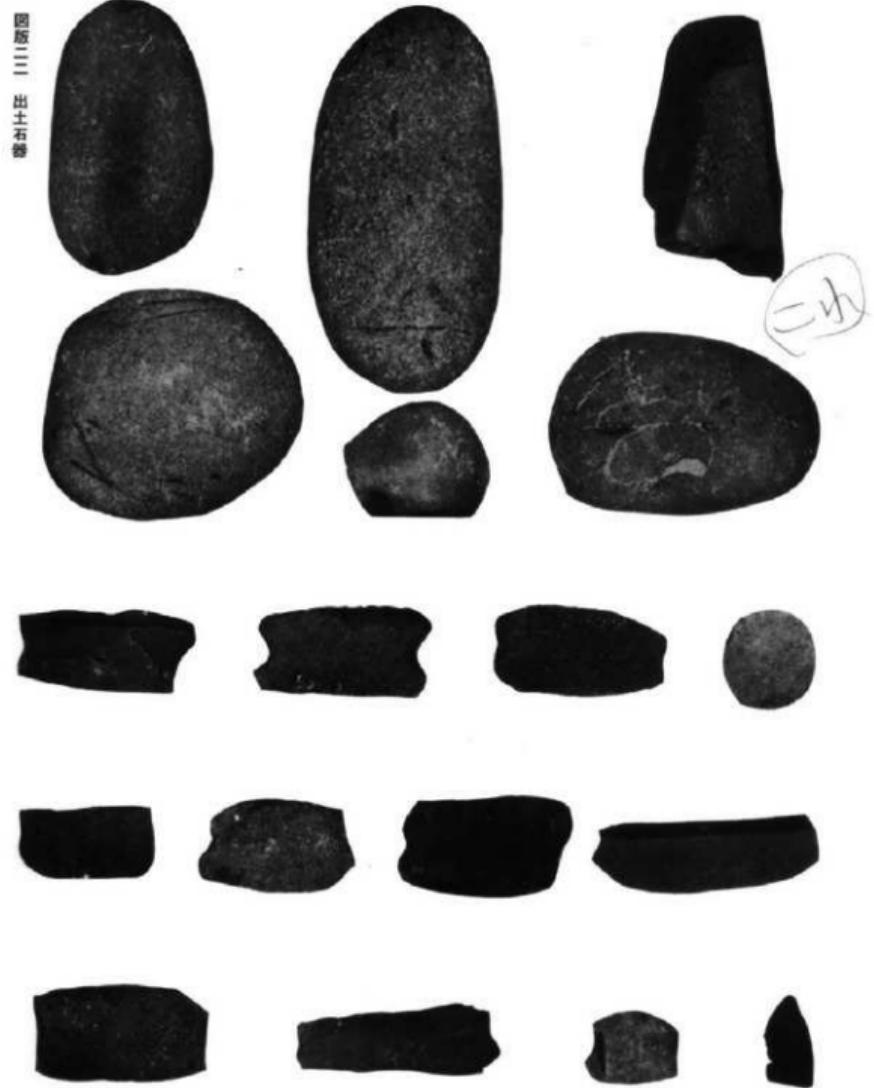
16



18

9住(15) 10住(17) 10住埋燒炉新伊(18) 13住(18)





圖二三 出土鐵製品及び石製品・記念撮影



横 吹 遺 跡

目 次

目 次	(3)
挿図目次	(5)
表 目 次	(6)
図版目次	(7)
 第Ⅰ章 発掘調査の経過	(8)
第1節 発掘調査の経緯	(8)
第2節 調査の組織	(8)
第3節 発掘日誌	(9)
 第Ⅱ章 造 構	(11)
第1節 鏽文時代	(13)
(1) 第2号住居址	(13)
(2) 第6号住居址	(14)
(3) 第9号住居址	(14)
(4) 第10号住居址	(16)
(5) 第12号住居址	(18)
(6) 第13号住居址	(18)
(7) 第14号住居址	(19)
(8) 第16号住居址	(19)
(9) 第1号竪穴	(21)
(10) 第1号土壤	(21)
第2節 赤生時代	(22)
(1) 第3号住居址	(22)
(2) 第4号住居址	(23)
(3) 第7号住居址	(23)
(4) 第8号住居址	(26)
(5) 第11号住居址	(26)
(6) 第15号住居址	(26)

第3節 奈良時代	(29)
(1) 第1号住居址	(29)
(2) 第5号住居址	(29)
第三章 遺 物	(32)
第1節 土 器	(32)
第2節 石 器	(60)
第四章 まとめ	(67)

挿 図 目 次

第1図 地形及び遺構配置図	(11)
第2図 第2号住居址実測図	(13)
第3図 第6・14号住居址、第1号竪穴実測図	(15)
第4図 第6号住居址伏壠断面図	(16)
第5図 第14号住居址炉址断面図	(16)
第6図 第9・10号住居址実測図	(17)
第7図 第9号住居址炉址断面図	(18)
第8図 第9号住居址伏壠断面図	(18)
第9図 第10号住居址炉址断面図	(18)
第10図 第10号住居址埋壠断面図	(18)
第11図 第12・13・16号住居址実測図	(20)
第12図 第12号住居址炉址断面図	(21)
第13図 第13号住居址炉址断面図	(21)
第14図 第13号住居址埋壠断面図	(21)
第15図 第16号住居址炉址断面図	(21)
第16図 第1号竪穴遺物出土状況図	(22)
第17図 第3・11号住居址、第1号土壤実測図	(24)
第18図 第4号住居址実測図	(25)
第19図 第4号住居址埋壠炉断面図	(26)
第20図 第7号住居址実測図	(27)
第21図 第7号住居址埋壠炉断面図	(28)
第22図 第8号住居址実測図	(28)
第23図 第15号住居址実測図	(29)
第24図 第1号住居址実測図	(30)
第25図 第1号住居址カマド断面図	(30)
第26図 第5号住居址実測図	(31)
第27図 第5号住居址カマド断面図	(31)
第28図 鉢文式土器拓影	(33)
第29図 鉢文式土器実測図 6住(1~6)	(35)
第30図 鉢文式土器実測図 6住(7) 9住(8) 10住(9) 12住(10~12)	(37)
第31図 鉢文式土器実測図 12住(13~17) 13住(18)	(40)
第32図 鉢文式土器実測図 13住(19)	(42)
第33図 鉢文式土器実測図 1竪穴(20~22)	(43)

第34図 縄文式土器拓影	2住(1~10) 6住(11~26) 9住(27~32)	
	10住(33~34).....	(44)
第35図 縄文式土器拓影	12住(35~47) 13住(48~57) 14住(58~59).....	(45)
第36図 弥生式土器実測図	4住(1~9).....	(48)
第37図 弥生式土器実測図	4住(10~11) 7住(12~17).....	(50)
第38図 弥生式土器実測図	7住(18~19).....	(52)
第39図 弥生式土器拓影	3住(1~9) 4住(10~11) 7住(12~14)	
	11住(15) 15住(16~17).....	(52)
第40図 土師器・須恵器実測図	1住(1~10).....	(53)
第41図 土師器・須恵器実測図	1住(11) 5住(12~18).....	(59)
第42図 土師器実測図	5住(19~20).....	(60)
第43図 石器実測図	2住(1~3) 6住(4~12).....	(62)
第44図 石器実測図	6住(13~16) 10住(17) 12住(18~19)	
	13住(20~21).....	(63)
第45図 石器実測図	3住(22~26) 4住(27~30).....	(64)
第46図 石器実測図	4住(31) 7住(32~37) 15住(38).....	(65)
第47図 石器実測図	ダリット(39~44).....	(66)

表 目 次

第1表 主要縄文式土器一覧	(34)
第2表 主要弥生式土器一覧	(46)
第3表 主要土師器・須恵器一覧	(54)
第4表 主要石器一覧	(60)

図版目次

- 図版1 遺跡全景
- 図版2 遺構
- 図版3 遺構
- 図版4 遺構
- 図版5 遺構
- 図版6 遺構
- 図版7 遺構
- 図版8 遺構
- 図版9 遺構
- 図版10 遺構
- 図版11 遺構
- 図版12 遺構及び遺物出土状況
- 図版13 遺物出土状況
- 図版14 遺物出土状況
- 図版15 遺物出土状況
- 図版16 遺物出土状況
- 図版17 遺物出土状況
- 図版18 遺物出土状況
- 図版19 出土土器
- 図版20 出土土器
- 図版21 出土土器
- 図版22 出土石器
- 図版23 出土石器

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区的西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島、東方部落、昭和49年度の東方、村岡、城、山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（小字で言う眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢、白沢、南小出部落が、昭和54年度は諏訪形区、昭和55年度は諏訪形、井の久保部落が該当しました。

昭和57年度は諏訪形区の鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡の4カ所が該当し、工事着工以前に緊急発掘調査を実施しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、横吹遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかりました。

第2節 調査の組織

横吹遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊 沢 一 雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福 沢 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤 羽 映 士	伊那市教育委員会委員長
調査事務局	三 沢 昭 吾	伊那市教育委員会教育次長
"	石 倉 俊 彦	社会教育課長
"	柘 植 覧	" " 課長補佐
"	武 田 則 昭	" " 係長
"	沖 村 喜 久 江	" " 主事

発掘調査団

団長	友 野 良 一	日本考古学协会会员
副団長	根 津 清 志	長野県考古学会会員
"	御 子 荣 泰 正	"
調査員	飯 塚 政 美	日本考古学协会会员

調査員 小木曾 清 宮田村考古学友の会会長
 タ 小池 孝 日本考古学协会会员

第3節 発掘日誌

昭和57年9月1日 晴 グリットを設定する前に発掘予定地の草刈りを実施する。草刈りが終了次第ただちにグリットを設定する。グリット名は南から北へ1～26、東から西へA～Hとする。グリット設定後A1から掘りはじめめる。A3付近に落ち込みがみられ、これを第1号住居址とする。第1号住居址のプランを確認していくと、東側に住居址のプランがあり、これを第2号住居址とする。第1、2号住居址を掘り下げていくと、第1号住居址から土師器、須恵器の出土、第2号住居址より縄文中期中葉の土器片出土があった。第2号住居址の北側に北白川下層III C式土器片の出土があった。

昭和57年9月2日 晴 第1～2号住居址の完掘を実施する。発掘予定地区の西、北側によった所にグリットを設けて発掘調査を実施する。どのグリットにも落ち込みがみられ各所に遺構の検出が目立った。夕方までかかって2軒の住居址をほぼ完掘する。完掘の状況より第1号住居址は東壁にカマドを持つ住居址と、第2号住居址は勝坂期ごろの住居址と判明した。午後、伊那市教育委員が現地観察を実施する。

昭和57年9月3日 晴 第3号住居址はグリット設定の北西部に検出され、その北側を第4号住居址、第4号住居址の東側を第5号住居址とする。第3号住居址は用地の都合により東側を掘れる状態だけであった。第3、4、5号住居址の掘り下げを一日中かかって半分くらい掘り下げる。第5号住居址の東側は第6号住居址の上に貼り床をした状態であった。

昭和57年9月4日 晴 第4号住居址、第5号住居址の完掘を実施する。第5号住居址の東側にある第7号住居址の掘り下げ、第7号住居址の南側の第8号住居址、さらにその南側第9号住居址の掘り下げを実施。第9号住居址は縄文中期での発見と、逆位の埋甕の出土があった。

昭和57年9月6日 曇時々雨 土器の洗浄を行う。

昭和57年9月7日 晴 第8～10号住居址、第7号住居址、第3号住居址の掘り下げを実施する。



発掘風景

第1章 発掘調査の経過

第4～5号住居址、第7号住居址のセクション実測と写真撮影を終了する。第7号住居址のベルトをはずす。第5号住居址のカマドのカッティングと実測を実施する。

昭和57年9月8日 晴後雨 午前中、第4号、7号住居址のベルトをはずす。第7号住居址の床面清掃、第8～10号住居址の床面清掃、これらの住居址の柱穴を掘り出す。第3号住居址の清掃。午後、土器洗浄、注記、一部土器復元をする。

昭和57年9月9日 雨時々晴、晴 午前中土器洗浄、注記、一部復元、わずかな雨間を利用して第5号住居址を実測する。

昭和57年9月10日 雨 土器洗浄、注記を実施する。

昭和57年9月11日 雨 土器洗浄、注記を実施する。

昭和57年9月13日 晴 第5号、7～10号住居址の清掃、第12号～13号住居址の掘り下げ、第4、7号住居址の写真撮影終了。第6号住居址の北側に住居址を発見し、これを第14号住居址とする。

昭和57年9月14日 晴 第6号住居址及び第14号住居址の発掘、第3号住居址を南側で切った住居址があり、これを第11号住居址とする。第11～13号住居址の掘り下げを実施、第11号住居址の掘り下げを実施するが、これも第3号住居址と同様に西側が大部分発掘できなかつたので、はっきりとした住居址とはならなかつた。

昭和57年9月16日 晴 第6号、14号住居址の完掘、二つとも縄文中期の住居址と判明した。ただし、第6号住居址は北側で第14号住居址を周溝によって切り、南側を第7号住居址によって切られていた。さらに第6、7号住居址の一部の貼床をとりのぞくと、深く、円形状の竪穴がみられ、これを第1号竪穴とする。この竪穴内からは3個体分くらいの土器がつぶれて出土した。夕方までに前述した2軒の住居址と竪穴一基を完掘する。第6号住居址、第14号住居址は2軒とも石壠戸であった。第12号住居址は西側で第13号住居址を切っており、しかも東側は用地外で発掘不可能、第12号住居址を掘り進めていくと、床面よりかなり上層の覆土中に東海系の加曾利E式の土器がみられた。第12号住居址の炉内を掘り進めていくと、炉底に要がすわっていた。この要は底部を炉底に埋め込まれ、その周辺に土器片を敷いてあった。夕方までに第12号住居址完掘、西側の第13号住居址を掘り始める。

昭和57年9月17日 晴 本日は第1号住居址～第11号住居址、第14号住居址、第1号土壠、第1号竪穴の全面清掃を実施した。さらに第13号住居址の完掘をさせ、清掃をする。午後、前述した全遺構の写真撮影を実施する。

昭和57年9月18日 晴 手分けにて、今まで実測の終らない遺構の実測及び全測図の作製、本日にて発掘調査終了

昭和58年1月～2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ送る。

昭和58年3月 報告書を刊行する。

(飯塚政美)

第II章 遺構



第1図 地形及び遺構配置図



第1節 繩文時代

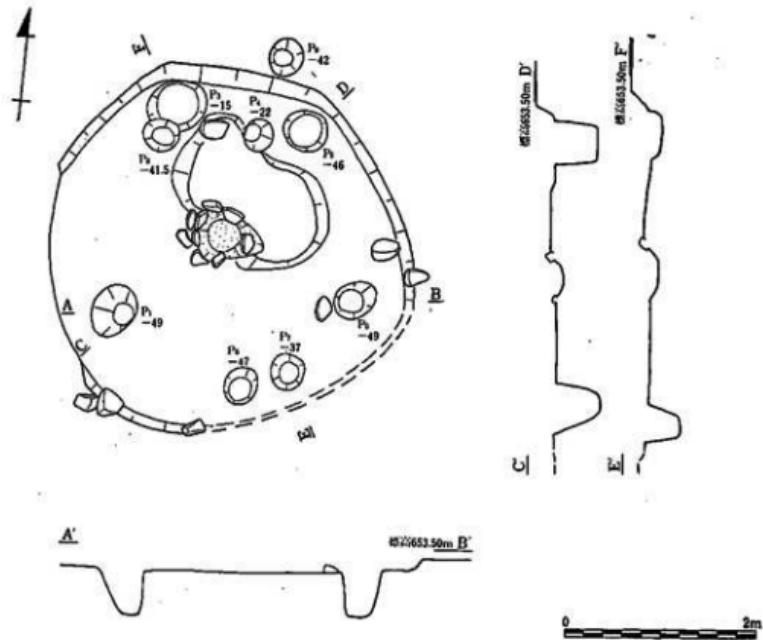
(1) 第2号住居址(第2図、図版2)

本址は発掘調査地区の最南端に発見され、西側は第1号住居址と接している。表土面より30cmくらい下った礫混合のローム層を掘り込み、円形状プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北3m87cm、東西3m83cmを測る。

検出面での壁高は、低く20cm前後である。壁面は外傾気味で、凹凸があり、礫が全面にわたって露出していた。床面は礫混合のローム層面中に構築してあり、わずかなタタキを呈している。レベルは礫が混入しているためにゴソゴソしていて、一定ではなかった。

ピットは全部で9カ所発見されたが、そのうち主柱穴とは深いP₁・P₂・P₃・P₄・P₇・P₈の6本であり、P₉は壁外の補助穴であろう。炉の北側の大穴は貯蔵穴となろう。

炉は住居址の中央よりやや北側にあり、その規模は南北70cm、東西90cmで、不正形の石圓炉であ



第2図 第2号住居址実測図

った。炉縁石はほぼ全周しているが、東側は一部抜き取られた跡があり、西側のは一部は二重になっていた。石質は花崗岩と变成岩が、赤く焼けて変色したものや炭化物が付着していた。

この時期しては土器の出土量は極めて少なかった。散片出土した土器片から察して本址は縄文中期中葉の勝坂期に位置づけできよう。前述したように本址の特徴としては、なぜ故に遺物の出土量が少ないのであろう。

(飯塚政美)

(2) 第6号住居址(第3~4図、図版3)

本址は横吹遺跡の北縁の中央より検出された遺構で、北側の第14号住居址を切り、西側は奈良時代の第5号住居址と重なり、南側は第7号住居址に切られ、その上第1号竪穴と複雑に重なりあつたものである。プランは円形でローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。その規模は南北推定4m 70cm、東西4m 50cmを測る。主軸方向はN-10°-Wで、壁高は西側で25cm、東で20cm、南は第7号住居址に切られているので、不明であるが残存の部分は内頬気味で明確である。床面は炉を中心によく叩いてあり、固く良好である。柱穴は円形で6カ所壁に沿って等間隔に掘られてあるP₁~P₆で平均径40cm、深さ50cm~60cmである。周溝は壁の真下に幅10cm~15cm、深さ15cmで全周している。

炉は住居址のわりに大きく、中央からやや北寄りのところに30cm~40cm大の自然石を11個梢円に並べ、南北に1m 20cm、東西80cmに据えて中心部を10cm程浅く掘って作ってある。炉の内部には焼土が赤く、灰と共に多量に残存している。炉の西側60cmの床面下に伏甕が出土した。底部穿孔のもので、器高30cm、口縁径29cm、波状があり、僅かに外反していて、焼成は良好の深鉢である。この土器は縄文中期後葉のもので、曾利のII~III式に属するものである。東側の壁に近い床面上に砂岩の40cm×30cm大の平石が据えてある。表面をよく磨いてあり使用痕が認められる。研石に使用したものかまたは、石器制作時に使用した作業台石と考えられる。

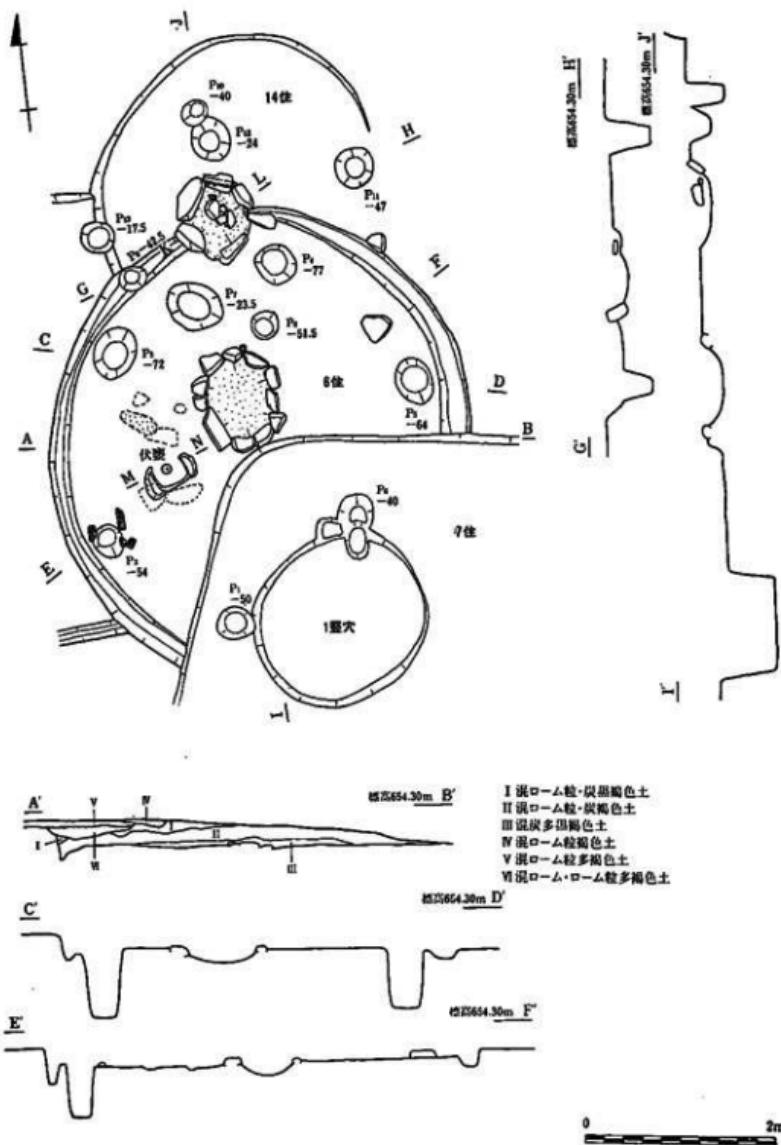
土器片が覆土からはかなり出土したが床面上からは僅かである。縄文中期後葉のものである。石器は主として床面上から出土した。綠泥岩製の乳棒状石斧、一部破損のもの、硬砂岩製の打石斧、硬砂岩製の敲打器、黒耀石の破片小量である。伏甕並びに出土遺物により本址は縄文中期後葉の住居址であると思われる。

(根津清志)

(3) 第9号住居址(第6~8図、図版3)

本址は横吹遺跡の中央より検出された住居址群の一つであって、北側は第10号住居址の一部を切取って、第8号住居址と並んでいる。

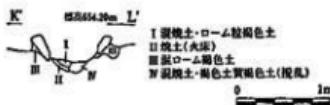
プランはほぼ円形を呈し、南北4m 90cm、東西4m 70cmである。軸方向は概ねWの方向を指す。壁は垂直に近い角度で北側が高く、西が25cm、東側は無い、床面は西が高く僅かに東へ傾いている。小砂利混りで固く叩いてあって良好である。柱穴は4カ所等間隔に検出されたP₁~P₄で平均の径40cm、深さ50cmである。炉は中心部より僅かに西寄りの奥で大きく、南北1m 40cm、東西1m 15cm、深さ50cmで縁石は全部抜きとられていてその跡が段付き状に凹んでいる。中心部は摺鉢形をなしている。内部はかなり火をいたした跡があり、全面的に赤色をなし、かなりの量の炭化物と灰が充満している。炉の近くの東側に平な自然石の40cm大のものが1個据えてあり、その表面はかなりの敲打痕と磨いた部分がみられる。何にかの作業に使用した台石であると考えられる。その石より



第3図 第8・14号住居址、第1号竪穴実測図



第4図 第8号住居址伏堀断面図



第5図 第14号住居址炉址断面図

南1mのところに20cm大の同様な台石が置いてあり使用目的は同一と思われる。炉址の北東50cmのところに底部穿孔の伏堀が床面下5cmの位置に埋められており、口縁は欠損、胴部がややふくらんでおり、無文のもので器高16.3cm、底部直径は8.5cmで、焼成はあまり良く無い。

深鉢の破片が炉の付近より小量と東南の壁の下に小量出土した。文様からみて曾利II式である。石器は打石斧の破れたもの、敲打器の半分のもの等僅かである。遺物よりみて本址は網文中期後葉の住居址であるものと思われる。

(根津清志)

(4) 第10号住居址 (第6、9~10図、図版4)

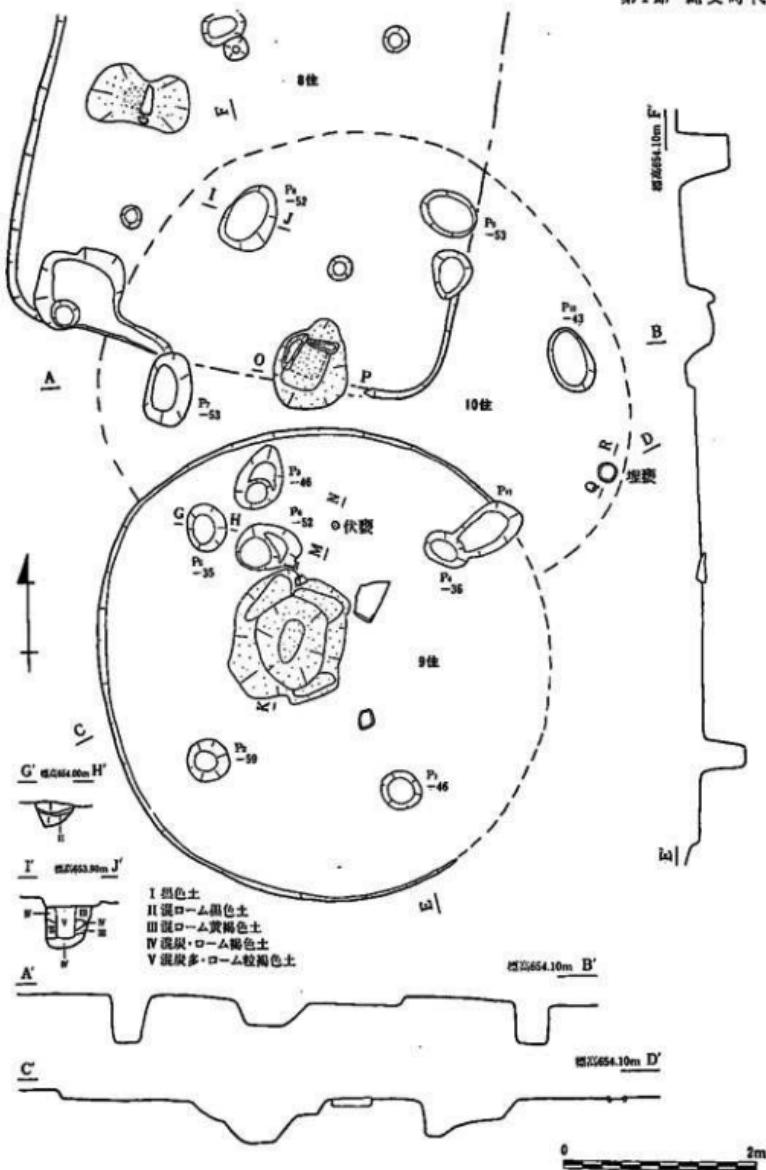
本址は遺跡の中央付近に検出された住居址群中の一つで、北側は第8号住居址と重なり、南は第9号住居址に切られた遺構である。プランは推測であるが円形であると考えられる。規模は同じく推測するに、5m~5.5m 50cm前後のものではないかと思われる。主軸方向は概ねWの方向を指す。壁は全面にわたり無い。床面は北側は第8号住居址に削り取られて、南側は第9号住居址に掘られて不明である。僅かに西の一部と東側が残っている。この部分は平らで固く仕上げてあり良好である。

柱穴は梢円形のもので6カ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ は、第8号住居址の床面下にあり、 $P_4 \sim P_5$ は第9号住居址の床面に掘られている。その大きさは長軸50cm、単軸が40cmが平均で、深さが50cm内外である。炉は中央より少し西寄りに検出され、炉縁石は全部抜き取られていて無いが、石のあった部分にはっきりと段がついており、一部は石の下部の形状に凹んでその跡がついている。南北1m、東西70cm、深さ30cm大のものである。内部からは少量の炭化物と灰に混じって土器片が出土した。炉の壁は赤く焼けて堅く、底部は平らで同じ様に堅く成っている。

東壁があったと思われるところの床面に埋堀が出土した。この場所はこの遺構の出入り付近と考えられる。この堀は口縁が欠損したもので頸部がつぼまっており、胴径21cmのもので、渦巻の突起文がつけてある。

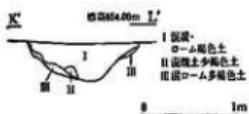
この遺構の特長はこの時期にしては炉が小さく柱穴が梢円形で大きく深い。他の遺構と重なりのため遺物が少なく埋堀と炉内の土器片によって判断するのに、本住居址は加曾利E式期のものと思われる。埋堀自体の文様はごく一般的なものであった。埋堀は正位の状態で出土し、前述したように埋堀としては小さな方に属しているものと思われる。

(根津清志)

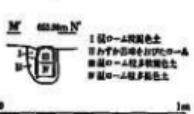


第6図 第9・10号住居址実測図

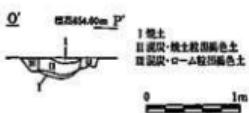
第II章 造 構



第7図 第9号住居址炉址断面図



第8図 第9号住居址炉址断面図



第9図 第10号住居址炉址断面図



第10図 第10号住居址炉址断面図

(5) 第12号住居址 (第11~12図、図版4)

本址はA・B-17, 18, 19, 20グリット内に検出された。西側で第13・16号住居址を切り、東側は調査地区外の住居址の3分の1くらいが未調査となつた。平面プランは東側が不明であるが、長軸約5.5m、短軸約5.0mを測る規模のやや不整形の方形に近い円形状を呈するものと思われる。主軸方位はN-48°-Wを示す。壁高は20~48cmを測り、西側の一部を除いてはややゆるやかな傾斜である。壁面は砂礫層を掘り込んだ為ざらざらしている。周溝は幅10~20cm、深さ10cm前後を測定する。主柱穴はP₁・P₂・P₄の3個検出され、P₁は70×60-47cmを測り、底から20cm上った所に中段の平らな面がある。P₂は65×70-42cmで、P₁と同じく5cm上った所に一段平らな面を検出したが、立替のあったものとも考えられる。P₃は60×45-27cmを測り、底は角底になっていた。P₃・P₅は支柱穴と思われる。P₇・P₁₂は第13号住居址に所属する柱穴であり、P₆は47×44-6cmを測る。浅い円形で、底は堅く叩かれ、周囲に焼土が2~3cm貼りついていた。大甕の置かれた跡だろうか。

床面は堅く踏み固められ良好であるが、西側には小礫が一面に入っていた。覆土上部に遺物が多く、押し潰された状態であり、3~4個復元可能とみられ、この事実は投げ込みかと思われる。炉は方形石窯炉で1.4×1.3m、深さ44cmを測り、7個の石で不整形ながら四角に組まれ、壁面は砂礫層で凹凸のある摺鉢形で、底には1個体の土器（加曾利E I式に併行される）を表し、底部を真中に正位に埋め、周囲に残りを貼ってあった。

（小木曾 清）

(6) 第13号住居址 (第11, 13~14図、図版5)

本址はA・B・C-17, 18, 19, 20グリット内に検出された。東側で約5分の1程度第12号住居址に切られ、北側では第16号住居址の大半と複合して約7cm前後埋立て構築してある。平面プランは東壁が第12号住居址に切られ不明であるが、柱穴の位置等から推測して、長軸約5.7m、短軸約4.6m前後を測る規模で、楕円形を呈するものと推定する。主軸方位はS-15°-Eを示す。壁高は13~28cmを測り、やや垂直に立上っている。周溝は幅15~24cm、深さ10~18cmを計測する。

主柱穴は6個検出され、P₇・P₈・P₉・P₁₀・P₁₁・P₁₂である。P₇は48×27-27cm、P₈は53×38-63cm、P₉は52×33-56cm、P₁₀は47×40-51cm、P₁₁は56×33-49cm、P₁₂は50×28-26cmを測り、形態は楕円形を呈し、ほぼ垂直に掘り下げる底は平らである。P₇・P₁₂は第12号住居址に入っている

為に、第12号住居址と本址との床面の比高差約40cmを加えて修正すれば、柱穴の深さは67cm前後となり、形態位置から見て妥当であると思われる。床面は南西側の面に小砂利が多く入っていて小さな凹凸があるが、良好な叩きになっているか、他は貼り床で荒れていた。炉は中央南寄りに位置し、石囲炉で、約1.1mの四角形で、10個の石を平らに据え、約10cm程土中に埋めてある。深さは28cmの丸底で、底に僅か焼土が検出された。埋甃は入口と思われる北側に正位の状態で埋設されていた。本址は縄文中期後葉と思われる。

(小木曾 清)

(7) 第14号住居址(第3、5図、図版3)

本址は遺跡地の北縁に検出された住居址群の一つで、最北端に発見されたものである。本址の中央より南側は第6号住居址により切り取られており、南西の一部は第5号住居址と重なっている。プランは少し歪んだ円形のもので、その規模は東西、南北共に3m前後である。主軸方向はN-10°-Wを指す。壁は僅に外傾して東側ではなく、西側が10cm、北側が20cmで多少軟弱であまりよくなない。床面は僅かに西が高く、東へ傾いている。炉の付近は固く叩いて良いが壁の近くは軟く一部擾乱されたところもある。柱穴は等間隔に4カ所あるが、そのうち2カ所は第6号住居址内に掘られている。平均径40cm、深さ50cmのものである。炉は中心部よりやや西寄のところに検出されて、南北1m、東西が90cmのもので、炉様石は30cm~50cm大の角張った自然石を6個積円形に並べて組み、中心部を少し凹ぼめた状態に作られている。この石は花崗岩・硬砂岩・緑泥岩等を使用している。炉の内部には炭化物と灰が残存し、石器の原石と思われるものが大小5個放置してある。本住居址はこの時代のものにしては小形のものである。遺物は深鉢の破片、打石斧等ある。これからみて、縄文中期後葉の住居址である。

(根津清志)

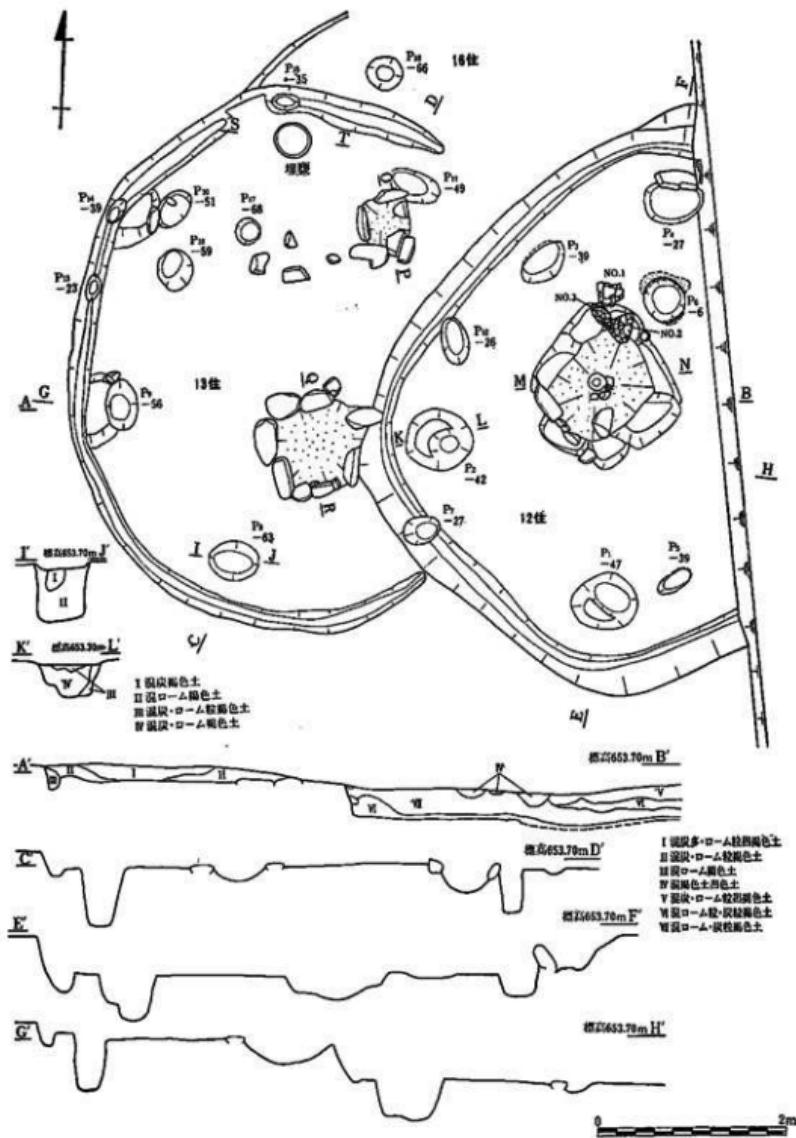
(8) 第16号住居址(第15図、図版5)

本址はA-18、19、20グリット内に検出された。第13号住居址に破壊されて辛うじて炉址が残存し、東側は第12号住居址に切られている。

総的に見て農耕による擾乱、破壊が重なり床面は既に消滅し、平面プランは全く確認できない状態であった。第13号住居址との床面の比高差は不明確ではあるが、炉石の高さから見ると、約5cm前後本址の方が低くなっている。遺物は炉の西側からP₁₇あたりに出土しているが、いずれの住居址のものか不明である。壁は削り取られてなく、柱穴は精査に精査を重ねた結果、P₁₇・P₁₈の2個が検出された。P₁₇は28×26-68cm、P₁₈は36×34-66cmで円形をなし、垂直に掘り下げ、底は平らで堅くなっていた。この両柱穴は炉の中心より1.5mの等間隔の位置にあり、形態も似ていることから、本址の柱穴であると考えられ、他は第12号住居址内にあり、消滅したものと思われる。

炉は石囲炉で、60×55-55cmを測り、四角に6個の石組からなり、第13号住居址に比べ、小さくてしかも深い。西と東側の石組は縦に28cmの石板を使用し深く埋めてあった。

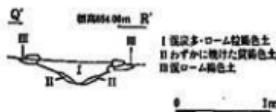
(小木曾 清)



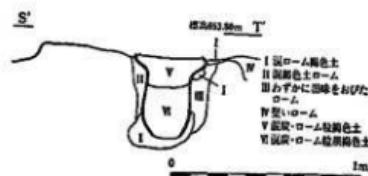
第1節 繩文時代



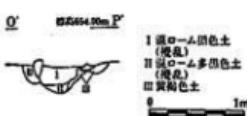
第12図 第12号住居址伊址断面図



第13図 第13号住居址伊址断面図



第14図 第13号住居址塙断面図



第15図 第18号住居址伊址断面図

(9) 第1号竪穴 (第3, 16図, 図版5)

本址は横吹遺跡北縁に検出された住居址の中で第6号住居址の南側を掘り込み第7号住居址の北西部と重なって発見された竪穴造構である。プランはローム層の中へ掘り込んだ円形のもので、その規模は東西2m35cm、南北2m80cm、深さは東側で83cm、西側で1mを測る。壁は僅に外傾して、ロームはよく削られて明確である。床面は平らでよく叩いて堅く仕上げてあり、良い状態で保存されている。北東の壁を切る様にして柱穴が掘ってあるが、これは第6号住居址のものである。この竪穴の中心部に南北に並んで深鉢形の土器が床面より僅かに上のところから、2個は横に押し潰され、その一部は東側に移動した状態で出土し、小形で胴部より下の部分のみの土器は垂直に据えてある様な状態で出土する。これらの土器は多量であるが復元可能である。北側より出土した胴部の張った土器は底部が欠損しており、中央と東側に分散して出土した。深鉢は口縁部が開き、胴部が僅かに張り、底部が小さくスマートであるが安定感が少ない。これらの土器はいずれも器形文様により判断して加曾利E式期に属するものである。この竪穴は重なっている第6号住居址と同時期のものではあるが、独立した造構であるかまたは第6号住居址と関連性があるかは不明である。出土した遺物によりこの竪穴は縄文中期後葉の造構である。

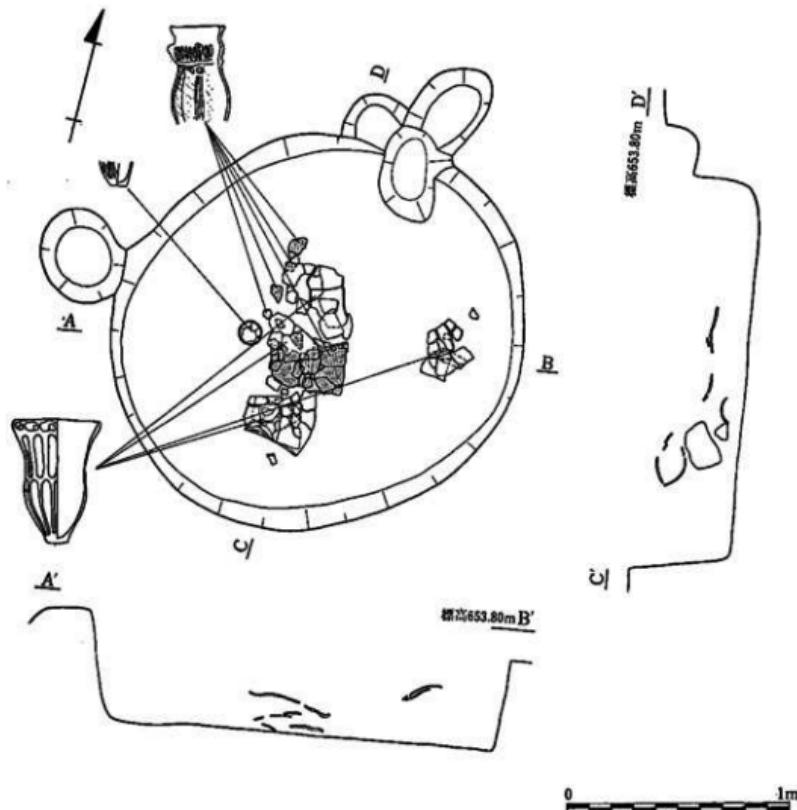
(根津信志)

(10) 第1号土壙 (第17図, 図版6)

本造構は東側に第5号住居址、西側に第3号住居址が近接している。ローム層を掘り込んでおり、南北1m30cm、東西1m10cmくらいの規模を有し、その深さは約55cmを測る。壁面は東では垂直に近く、西壁はなだらかに内傾していた。

床面は軟弱で、凹凸が多く、特に中央部は深くくぼんでいた。遺物の出土は何もなかったが、形態からして縄文中期ごろに位置づけられると思われる。

(飯塚政美)



第16図 第1号竖穴遺物出土状況図

第2節 弥生時代

(1) 第3号住居址 (第17図、図版6)

本址はG・H・I-20, 21, 22, 23, 24グリット内に第11号住居址を切って検出された。西側は調査地区外に当たり、全貌を知ることができず一部分の調査に終わり残念であった。平面プランは方形または長方形を呈すると思われるが、規模は不明である。壁高は36~24cmを測り、ゆるやかな傾斜となっていた。周溝は幅20~65cm、深さ11~24.5cmを測る。床面は全面貼り床で焼土とロームの叩きになって凹凸が多く不安定だが、西側は良好であった。床面には鉄器をはじめ須恵器・土器器の破片が出土した。柱穴はP₁で柱の南側に小石を入れ詰めにし、盛り上った状態が半円形に湾曲していた。P₁は上部に貼り床され、P₂と列P₁は上部に貼り床され、P₂の内側50cm間隔に並び12cm深く、本址の建替を裏付けるものである。弥生後期土器片の出土も多かった。 (小木曾 譲)

(2) 第4号住居址(第18~19図、図版7)

本址は発掘地区的最北部、最西部に位置し、南側に第3号住居址、第15号住居址、東側は第5号住居址に接続している。本址は重複もなく、覆土が非常に黒かったため、検出は容易であった。

プランは隅丸方形であるが、東側、西側がやや外に張り出す。したがって、東、西側は若干丸味を呈す。南北5m45cm程、東西6m93cmを測る。壁は北、西、南で鋭く、東で鈍くローム層を掘り込んでいるが、状態は全体的に良好である。壁高は西40cm、南35cm、北30cm、東20cmくらいであり、西から東に低くなっている。

床面はかたい叩きで、ブロック的に凹凸があった。主柱穴と思われるビットはP₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇であろう。部分的に貼床が残存しており、後述するが旧炉、新炉がある。旧炉に該当する柱穴はP₂・P₃・P₄・P₅・P₇である。新炉に該当する柱穴はP₁・P₃・P₄・P₆である。P₉・P₁₀・P₁₁・P₁₂・P₁₄は直線状に配列されている。明確なる結論は出ないが、一種の間仕切り的なものに用いられたのであろうと思われる。

炉は住居址の東側の近いところにあり、埋甕炉の形態をもっている。西側のが旧炉であり、東側のが新炉である。旧炉は直径30cm、新炉は直径28cmくらいの大きさを持ち、両炉とも周囲に焼土が堆積していた。旧炉は底面に正位に土器片が残存していたが、まわりには土器はなかった。新炉は正位の状態でまわりに土器が埋まっており、底面には土器片を數いてある。

遺物は赤生後期土器片が多量に出土したが住居址の時期決定は埋甕炉に使用した土器が適当であろう。それによると下伊那でその本拠地が確認されている中島式土器の一派がこの埋甕炉に使用されている。旧炉と新炉の土器には若干の時代差があると思われる。

(飯塚政美)

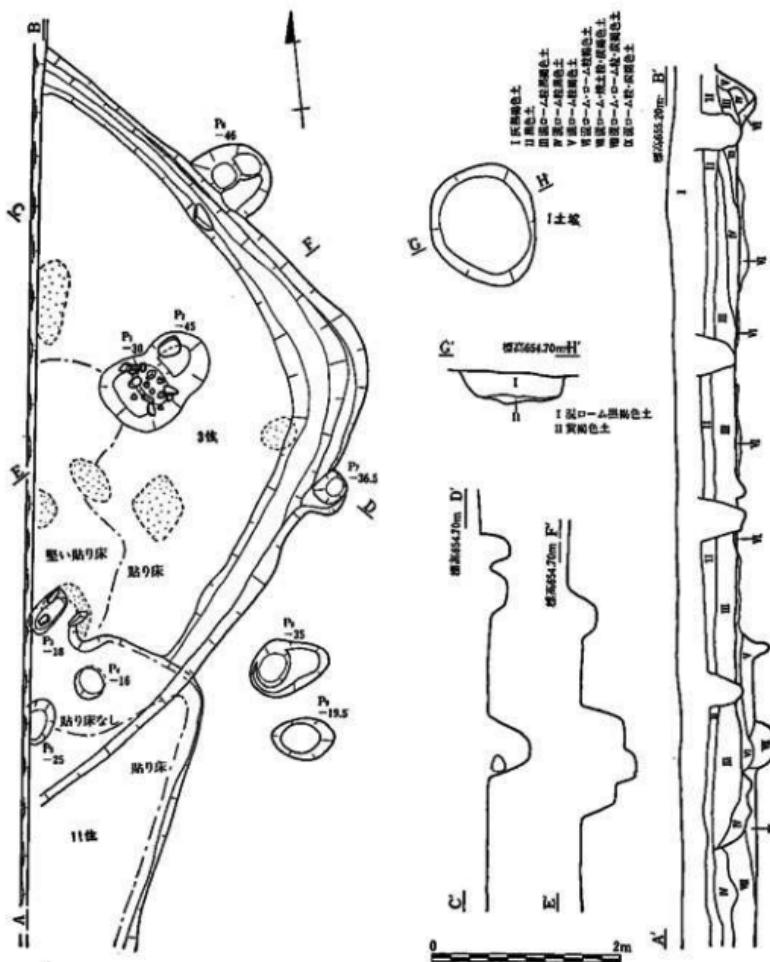
(3) 第7号住居址(第20~21図、図版7)

本址は遺跡地の北縁より検出された住居址群の一つで、北側の第6号住居址を切り、第1号竪穴が中央より北西の位置で重なっている。南は第16号住居址が接し、北東は遺構らしきものと切り合っているが攪乱がひどく不明である。プランは隅丸方形でローム層へ掘り込んだ竪穴住居址である。規模は、東西推定6m、南北6mを測る。主軸方向は概ねEの方向を指す。壁は垂直に近い角度で東側は検出をみない。壁高は西側で30cm、南は低く19cm程度である。床面は炉の付近をのぞき他は全面にわたり小砂利混りの貼床で固く叩いて仕上げてある。

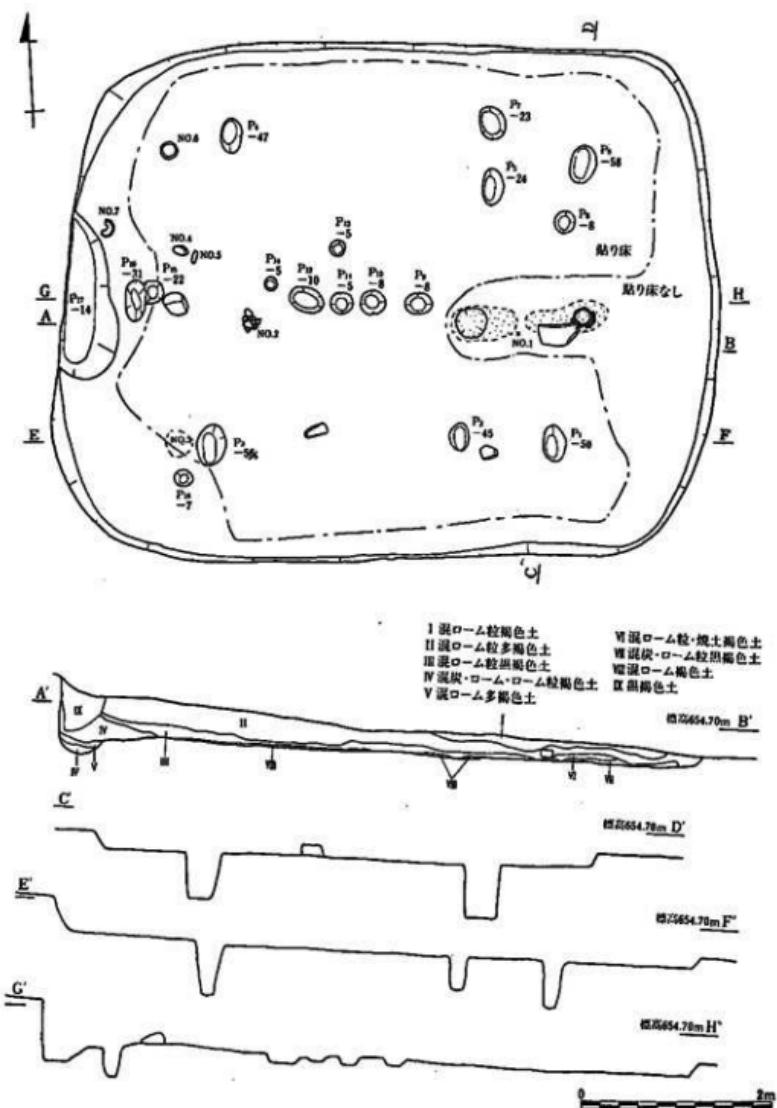
柱穴は4本等間隔に梢円形のものが4カ所検出した。P₁30cm×40cm、深さ55cm、P₂40cm×35cm、深さ60cm、P₃50cm×30cm、深さ52cm、P₄60cm×35cm、深さ59cmである。炉は東側の柱穴の中間に床面下に埋められた埋甕炉である。口縁部と底部が欠損した胴の張った壺形土器で胴の径が25cmあり、帶状に浅い櫛形文が描いてある。埋甕炉として使用したので全体が赤く変色してろくなっている。炉の内部には少量の炭化物と灰が充満し、その付近の床面はかなり赤く焼けて固くなり、僅かに凹んでいる。西壁中央に、長軸4m35cm、単軸50cm、深さ1m65cmの梢円形の大穴があるが、これは出入り付近にあたるので本遺構のものであるかは疑問である。西南の隅と東南の隅に不明なるビットを4カ所検出した。

床面上に角ばった自然石が10個放置したごとく出土した。主として硬砂岩である。よくみるとそ

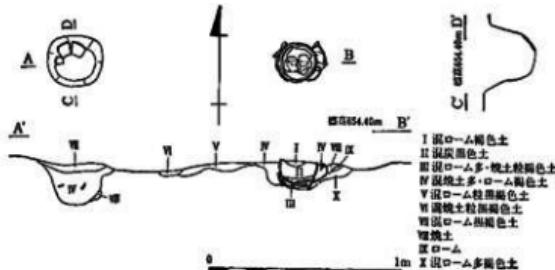
それぞれ僅かであるが敲打痕、または磨いた使用痕が認められる。石器を作るための原石かまたは一部作業のための台石と思われる。壺と甕の土器片が壺の付近と南隅に少量出土した。流水文と櫛目文のもので弥生時代後期に属するものである。石器は緑泥岩製の敲打器が出土した。出土遺物並に埋葬炉に使用した土器からみて、本址は弥生時代後期の住居址であると思われる。（根津清志）



第17図 第3・11号住居址、第1号土塙実測図



第18図 第4号住居址実測図



第19図 第4号住居址埋葬炉断面図

(4) 第8号住居址(第22図、図版6)

本址は横吹跡内中央住居址群の一つで第10号住居址と重なり、東側は第13号住居址が接し、南側には第9号住居址が並んである。プランは隅九方形で、その規模は南北5m 10cm、東西4m 70cmを測る。軸方向は概ねWの方向を指す。壁は垂直に近い角度をもち東側の一部と南側が擾乱のため無い。壁高は西で25cm、北で26cmであるが軟らかくあまりよくない。北東の隔壁外に径1m、深さ26cmの大穴がある。多分食料貯蔵穴と考えられる。柱穴はほぼ等間隔に4ヵ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ は円形で、径25cm、深さ平均35cmである。床面は全般的に軟らかく、特に南側には凹凸があり擾乱の跡が歴然としている。炉は西側の柱穴の中心部を東西1m、南北60cmに浅く掘った地床炉で、35cm大の自然石を枕石に使用してある。炉の中は炭化物と灰に混じって土器片が少量出土した。その他不明なるピットが西南の隅に不整形をなして掘られてある。出土遺物よりみて本址は弥生時代の後期に属する住居址であると思われる。

(根津清志)

(5) 第11号住居址(第17図、図版6)

本址はH・I-19, 20, 21グリット内に検出されたが、西側は調査地区外のため、遺構の確認のみに終わり、平面プランは東北側のコーナーの一部で、北壁は第3号住居址に切られている。

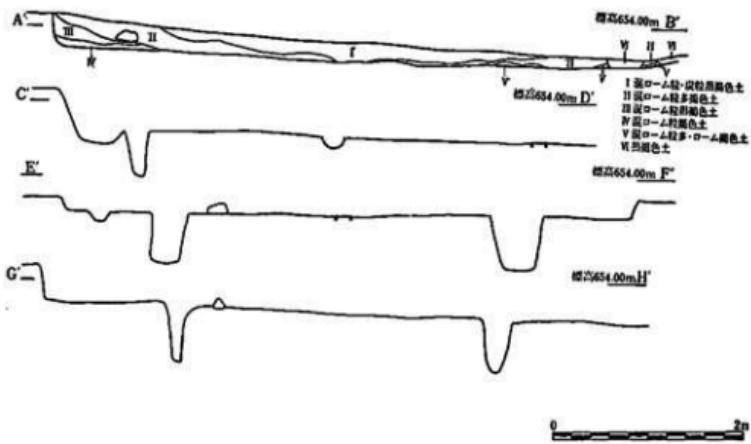
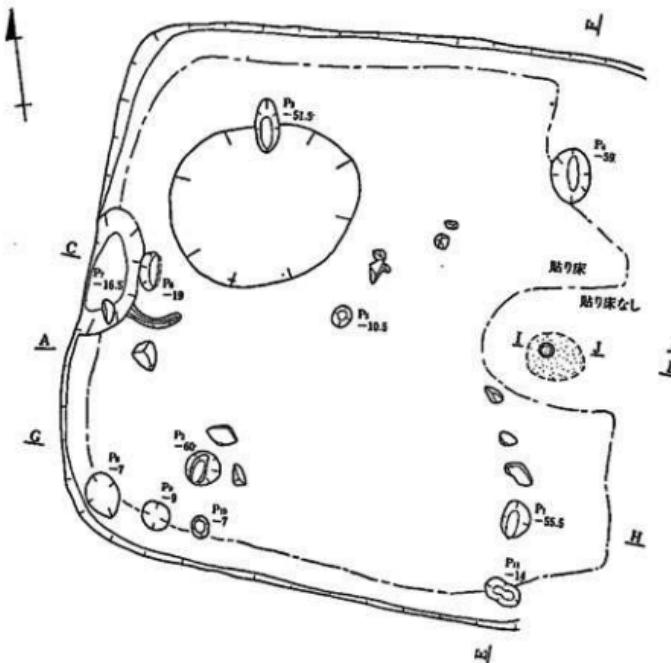
北側の床面上には第3号住居址の貼床が10cm程あり、その下に、 $P_4 \sim P_5$ が検出された。壁高は22~44cmを測り、垂直に立上っていた。床面は平坦で、やや軟弱気味であった。

遺物は切り合いの関係と搅乱で土師器・須恵器の破片が出土し、床面に2片であるが弥生時代後期に比定される土器片が検出された。

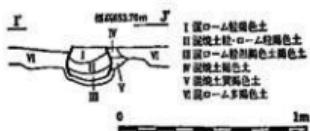
(6) 第15号住居址(第23図、図版6)

本址は第3号住居址の貼り床の下に検出され、貼り床は約7cm前後で、燒土混じりのロームで埋められ中に遺物が散乱していた。平面プランは不明確で、第3号住居址が、本址のそのままの建替か、拡張かで相違があると思われる。柱穴は P_{11} で、 P_{10} は第3号住居址のものである。床面には9個のピットが検出されたが、いずれも焼土とロームで埋められていた。

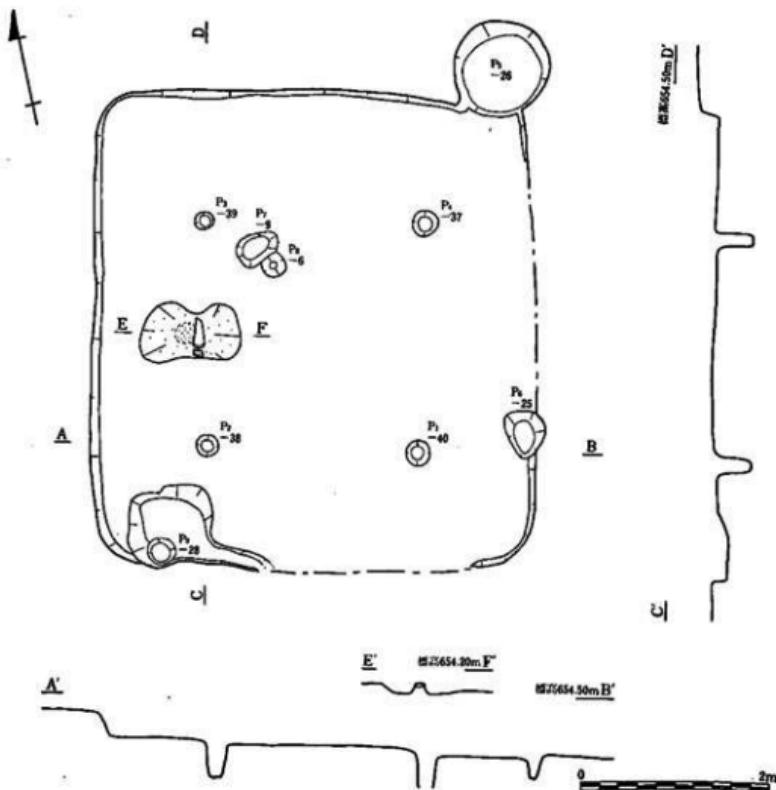
(小木曾 清)



第20図 第7号住居址実測図



第21図 第7号住居址埋甃断面図



第22図 第8号住居址実測図

第3節 奈良時代

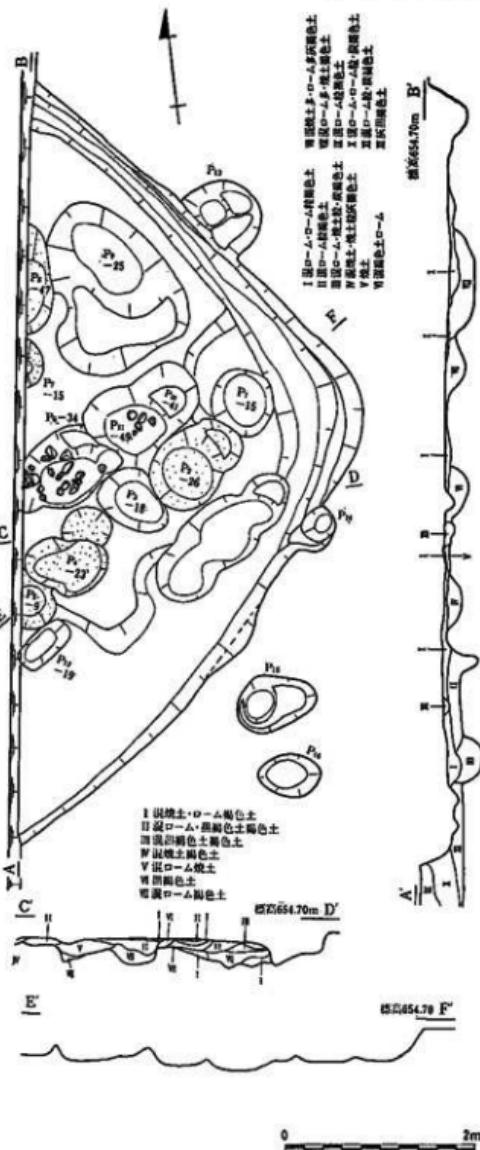
(1) 第1号住居址(第24図)

本址は東側で第2号住居址と接し、南北5.5m、東西5.4mを測り、隅丸方形を呈する竪穴住居址である。壁は外傾気味で凹凸が多い。壁高は10cm~30cmくらいを示す。床面は堅いローム層の叩きで、ところどころに凹凸があった。柱穴は4本主柱穴と思われる。カマドは東壁の中央にあり、石組粘土カマドで残存状態は悪く、わずかに南側の袖石が残っており、周囲に焼土の堆積が多量にみられた。遺物は土師器片が出土し、奈良時代に属していると思われる。

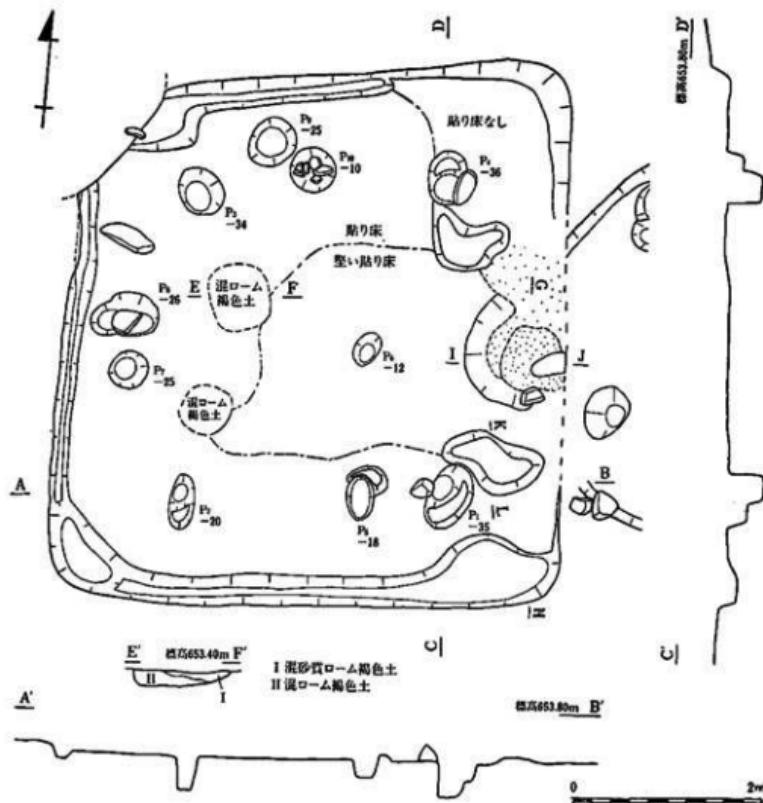
(飯塚政美)

(2) 第5号住居址(第26図)

本址の東側は第6号住居址の上に一部貼床して構築しローム層へ掘り込んだ隅丸長方形の竪穴住居址である。規模は南北4.5m、東西3.5mを測り、小形のものである。壁は北側が深く南は浅く僅かに外傾して一部軟弱で不安定である。床面は多く貼床で、カマド付近は焼土が広範囲にわたり検出された。柱穴は壁に沿って4ヵ所等間隔に掘られている。カマドは北壁の中央に作られ石組粘土固めのものであったが石が抜き取られ多少攪乱されている。土師器窓・坏の破片が出土し、これからして奈良時代の住居址である。(根津清志)



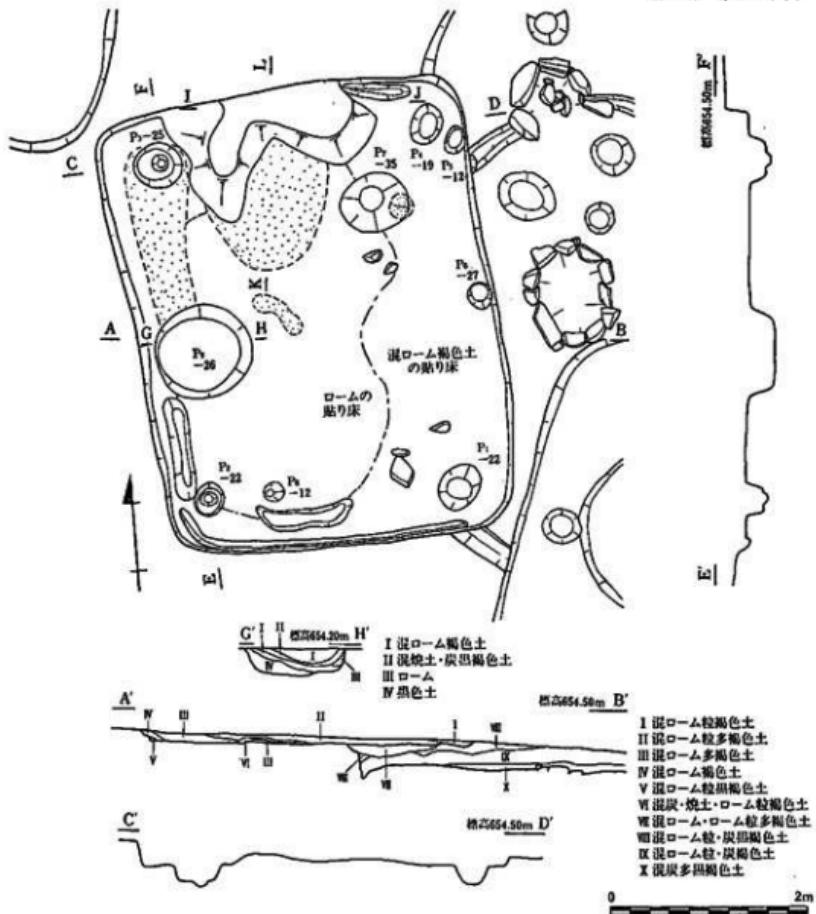
第23図 第15号住居址実測図



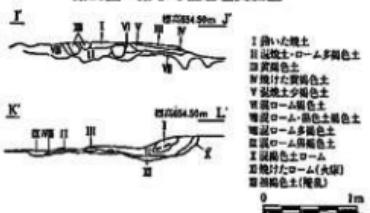
第24図 第1号住居址実測図



第25図 第1号住居址カマド断面図



第26図 第5号住居址実測図



第27図 第5号住居址カマド断面図

第Ⅲ章 遺 物

横吹遺跡で検出された16軒の住居址及びグリットから出土した遺物は相当量を数える。その中でも数量比重が最も重いものは土器である。土器以外には石器がある。土器のうち、ある程度の数量の実態が把握できるのは縄文前期、土師器、須恵器であって、縄文中期、弥生土器はその数は知らず未だその実数を知り得ない。以下に各種遺物の観察結果を記すが、記述方法は遺物を個別的に取り扱い、その属性を統一した表現で処理するために表を多く採用した。

縄文前期土器片は伊那市内では類例が少ないので、文章にて表現した。遺物の総数が多いために、遺物の個別記載のみで、予定の紙数を超すので、拓影の部分は割愛させていただく。その理由としては、前述した実測図と文様及び時期において差異があまり無いので、このような処理方法を採用したわけである。

第1節 土 器

(1) 縄文式土器

横吹遺跡内より出土した縄文式土器は前述したような結果であった。これらの出土した状況は8軒の竪穴住居址と、1基の竪穴等々であり、ある程度、その規則性、偏向性、その他もろもろの条件が判明した。これらのうちでも第28図縄文式土器拓影に記載された土器片は出土例の少ないものである。住居址及び竪穴より出土した土器はすべて縄文中期後葉に属しているものと思われる。

第28図はすべて薄手式土器の一派に含まれている。(1~6)、(8~12)は斜縄文地に低い隆帯を貼り付け、その上にC字状の爪形文を押捺してある。薄手式土器の一派であることからして、それぞれの器厚を記しておく。(1・9)は6mm、(5・8・10)は5mm、(2~4, 6・11~12)は4mmを計測できる。

(7)は荒い斜縄文地に低い隆帯を横位につけ、その上に隆帯を押しつぶすようにして細い沈線を數本縱走させてある。黒褐色を呈し、焼成は良好であり、器厚は4mmを計える。

(13~14)は荒く、幅広の斜縄文地に高く、断面カマボコ状の隆帯を横位に1本貼り付け、その上に細く、鋭利な連続爪形文を密に施してある。(13)は赤褐色、(14)は黒褐色を呈している。胎土中に雲母、長石、石英粒を含み、焼成は普通である。器厚は7mm(13)、6mm(14)である。ほかの土器と比較してやや厚いのが特徴的である。

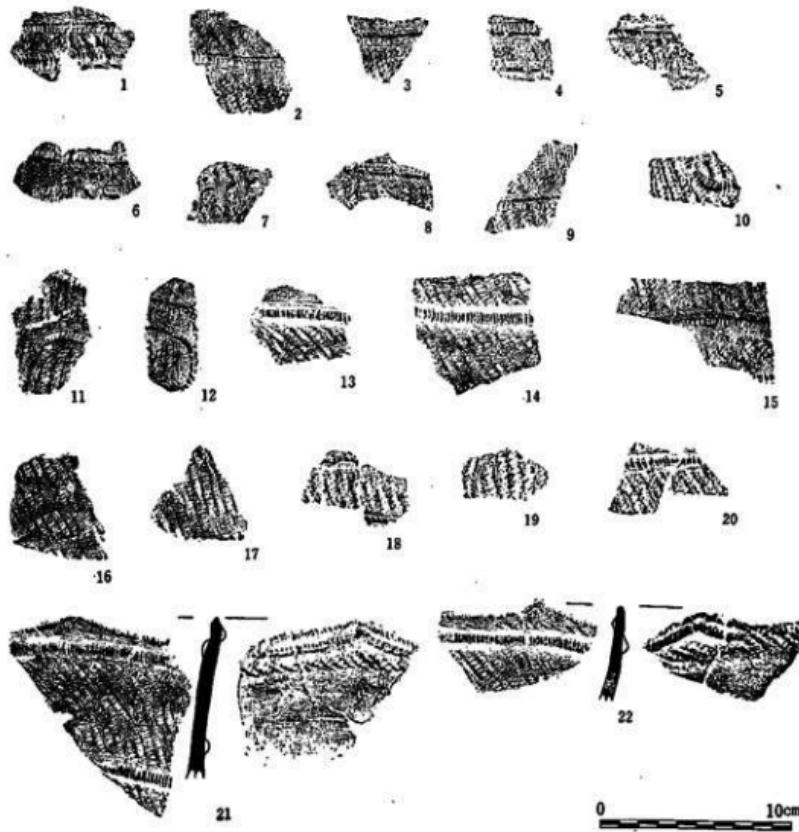
(15, 18)は荒い幅広の斜縄文地に低い隆帯を横位に2本貼り付け、大型のC字状爪形文を間隔を密にして連続的につけてある。隆帯の位置は(15)では下部と中部に、(18)は下部と上部につけてある。两者とも茶褐色を呈し、焼成は良好である。器厚は(15)は5mm、(18)は4mmを計る。

(16~17, 19)は幅広の荒い縄文が斜走している。色調はすべて黒褐色を呈し、焼成は良好で、雲母、石英、長石を含んでいる。器厚は(16)は6mm、(17)は7mm、(19)は5mmをそれぞれ計測できる。

第1節 土器

(21)は波状口縁を呈し、わずかに外反したりしている。口唇部は内反ぎ気味である。外面は荒い斜縞文地に高い隆帯を横位に2本貼り付け、その上に連続爪形文を意匠してある。口唇部に刻目を押捺し、文様効果を増している。内面は斜縞文地の上部に波形に沿って隆帯を貼り付け、その上に刻目をつけてある。下部は擦痕が横走している。(22)の文様構成は(21)と大差はない。色調は(21)は黒褐色、(22)は茶褐色を呈し、焼成は中位で、胎土中に雲母、石英、長石粒がみられる。内面施文の状態からみて、縄文前期最終末に位置づけられる土器と思われる。以上、述べてきた22片の土器は第2号住居址の段土上層面より出土したが、この住居址とは直接的な関係はないものと推測できる。

(飯塚政美)



第28図 縄文式土器拓影

第三章 造 物

第1表 主要縄文式土器一覧（法量は現況を記す）

実測図番号		第29図(1)				実測図番号		第29図(2)				
出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径	29.4cm		出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径			
	トレンチ		器 高	30.8cm			トレンチ		器 高			
	区		最大径	29.4cm			区		最大径			
	深 さ		壁 厚	0.9cm			深 さ		壁 厚			
	器 形		底 径	10.3cm			器 形		底 径			
口 縁 部	器 形	波状口縁。わずかに外反				口 縁 部	器 形	環状把手付				
	文 標	陰線を横位や縱位にはりつけ、その終末は渦巻状を呈す。その上に刻目を加飾し、それらに囲まれた中に沈線を斜走させてある。					文 標	把手の頭は若干凹み、その中に円形状に沈線を2本配し、その中に連續刻文を押捺してある。下部は縦帶を直線状や弧状あるいは円形状に貼り付け。その中、あるいは周囲にある程度規則的に刺突文をつけてある。				
	器 形	肩部はわずかにふくらむ					器 形					
	文 標	陰線をワラビ手状、直線状に重下させ、その上に刻目をつけてある。それらの周間に沈線を斜走させてある。					器 形					
底 部	穿孔平底	燒 成	良好			底 部	欠損	燒 成	普通			
色 調	茶褐色	出土造構	6住住堅			色 調	暗茶褐色	出土造構	6住フク土			
胎 土	雲母	時 期	加曾利E			胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E			

実測図番号		第29図(3)				実測図番号		第29図(4)				
出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径	15.7cm		出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径	18.0cm		
	トレンチ		器 高	6.8cm			トレンチ		器 高	20.2cm		
	区		最大径	16.0cm			区		最大径	19.9cm		
	深 さ		壁 厚	0.9cm			深 さ		壁 厚	0.7cm		
	器 形		底 径				器 形		底 径			
口 縁 部	器 形	平縁でわずかに外反し、口唇は外そぎ				口 縁 部	器 形	平縁で大きく外反する。				
	文 標	太くて高い縦帶を帯状形に区隔し、その中に沈線を縱位に施す。					文 標	口縁上部内面は肥厚する。細い沈線を2本横走させ、その中に刷突文を連鎖状に配す。				
	器 形	わずかにくびれる。					器 形	ややふくらむ。突唇貼付				
	文 標	下部は大部分欠損。沈線をハの字状に施す。					文 標	上部は連續状突刺文を山形状につける。下部は縦帶を数条盛りさせ、その間に沈線をハの字状につける。				
底 部	欠損	燒 成	普通			底 部	欠損	燒 成	不良			
色 調	赤褐色	出土造構	6住フク土			色 調	暗茶褐色	出土造構	6住フク土			
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E			胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E			



第29図 繩文式土器実測図 6住（1～6）

第三章 造物

実測図番号		第29図(5)		
出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径	15.5cm
	トレンチ		器 高	12.3cm
	区		最大径	14.8cm
	深 さ		壁 厚	0.7cm
器 形		底 径		
口 縁 部	器 形	1つの大きな環状把手と小突起がある。		
	文 横	低い縦帯が一条横走し、その縁に沿って刺突文を押捺してある。		
肩 部	器 形	肩部が若干つぼまる。		
	文 横	低い縦帯を円形状に貼り付け、それらの間に沈線が弧状や横走している。		
底 部	欠損	焼 成	不良	
色 調	茶褐色	出土遺構	6住フク土	
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E	

実測図番号		第29図(6)		
出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径	21.9cm
	トレンチ		器 高	12.1cm
	区		最大径	29.6cm
	深 さ		壁 厚	1.0cm
器 形		底 径		
口 縁 部	器 形	平縁の複合口縁		
	文 横	縫帶が蛇行状に横走、上下に刺突文が縫帶に沿ってある。		
肩 部	器 形	肩部に最大径をもつ		
	文 横	斜窓文地を弧状やワラビ手状の沈線が切っている。		
底 部	欠損	焼 成	普通	
色 調	黒茶褐色	出土遺構	6住フク土	
胎 土	長石・石英	時 期	加曾利E	

実測図番号		第30図(7)		
出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径	16.9cm
	トレンチ		器 高	20.9cm
	区		最大径	22.9cm
	深 さ		壁 厚	0.7cm
器 形		底 径		
口 縁 部	器 形	平縁、ゆるやかなカーブ内反、口縁は内 方		
	文 横	縦縞を横位や渦巻状に貼り付け、それら の縁に沿って刺突文をつけてある。		
肩 部	器 形	下部に行くにつれてカーブを描くよう につぼまる。		
	文 横	縦縞を渦巻状につけ、それらの周囲に沈 線を不規則につけてある。		
底 部	欠損	焼 成	不良	
色 調	明赤褐色	出土遺構	6住フク土	
胎 土	雲母・石英	時 期	加曾利E	

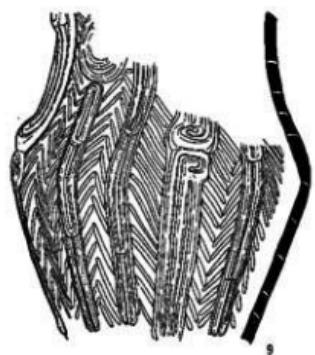
実測図番号		第30図(8)		
出 土 地 点	地 点	法 量	口縁径	
	トレンチ		器 高	16.3cm
	区		最大径	
	深 さ		壁 厚	
器 形		底 径	8.5cm	
口 縁 部	器 形			
	文 横	無文、上部欠損		
肩 部	器 形	ややふくらむ		
	文 横	無文		
底 部	平底穿孔	焼 成	不良	
色 調	赤褐色	出土遺構	9住伏窓	
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E	



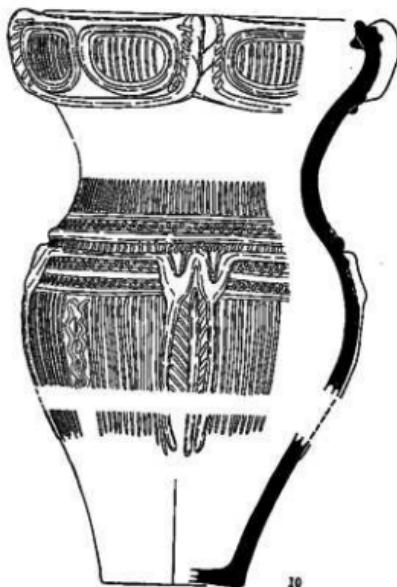
7



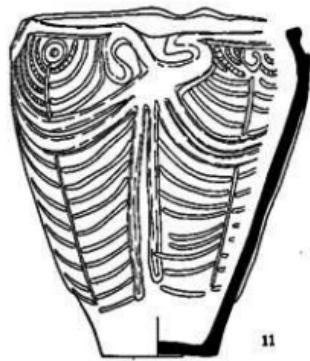
8



9



10



11



12

0 10cm

第30図 圖文式土器実測図 6住(7) 9住(8) 10住(9) 12住(10~12)

第三章 遺 物

実測図番号		第30図(9)		
出 土 地 点	地 点	法 	口縁径	
	トレンチ		器 高	23.1cm
	区		最大径	21.1cm
	深 さ		壁 厚	0.8cm
器 形	甕	底	底 径	
	甕		底 径	
口 縁 部	器 形	ややつぼまり気味(推定)		
	文 標	隆帯を2本づつ東にして重下させ、それはところどころで渦巻状の突起を呈す。これらに沿された中に沈線を斜走させてある。		
	-			
肩 部	器 形	ややつぼまる。		
	文 標	口縁部文様と同じである。		
	-			
底 部	欠損	焼 成	不良	
色 調	青褐色	出土遺構	10住埋甕	
胎 土	砂	時 期	加曾利E	

実測図番号		第30図(10)		
出 土 地 点	地 点	法 	口縁径	26.0cm
	トレンチ		器 高	39.9cm
	区		最大径	23.6cm
	深 さ		壁 厚	1.1cm
器 形	甕	底	底 径	10.0cm
	甕		底 径	
口 縁 部	器 形	口唇はわずかに外反し、口頸部は大きくくぼむ。		
	文 標	低い隆帯によって梯形文を形成し、内に沈線を縱走してある。		
	-			
肩 部	器 形	大きくふくらむ		
	文 標	上部は沈線を縱走。中部は沈線を横走させ。その中に円形状の刻文文を押捺。下部は沈線及び強線が長く垂下している。		
	-			
底 部	平底	焼 成	不良	
色 調	茶褐色	出土遺構	12住炉内	
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E	

実測図番号		第30図(11)		
出 土 地 点	地 点	法 	口縁径	19.5cm
	トレンチ		器 高	24.3cm
	区		最大径	21.2cm
	深 さ		壁 厚	0.8cm
器 形	甕	底	底 径	8.1cm
	甕		底 径	
口 縁 部	器 形	波状で若干内反		
	文 標	ところどころに突起状の隆帯や弧状の隆帯を貼り付け、そのなかに同心円状の沈線を記し刻目を付加してある。		
肩 部	器 形	下端へ行く程につぼまる。		
	文 標	隆帯を2本重下させ、それらの間に沈線を連続状に加飾してある。		
底 部	平底	焼 成	普通	
色 調	茶褐色	出土遺構	12住フクタ	
胎 土	雲母・長英・長石	時 期	加曾利E	

実測図番号		第30図(12)		
出 土 地 点	地 点	法 	口縁径	18.0cm
	トレンチ		器 高	4.4cm
	区		最大径	
	深 さ		壁 厚	0.5cm
器 形	深鉢	底	底 径	
	器 形		平盤。わずかに内反し口唇は丸くなっている。	
口 縁 部	文 標			
	器 形	欠損		
	文 標			
底 部	欠損	焼 成	不良	
色 調	茶褐色	出土遺構	12住フクタ	
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	紀文中期初頭	

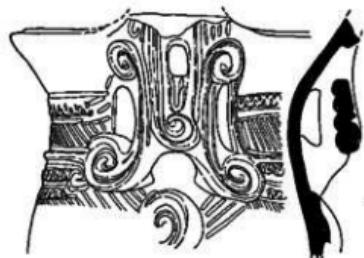
第1章 土器

実測図番号		第31図(13)		
出土地点	地点	法 西 高	口縁径	
	トレンチ		16.0cm	
	区		最大径	
	深さ		盤 厚	0.9cm
器 形	深鉢	底 径		
	器 形		平縁で外反し、口唇は外そぎである。	
	文 横		上部から中部にかけて環状突起をつけてある。上部は無文である。中部から下部にかけて大きな渦巻状の突起と沈縫が斜走している。沈縫のなかには波形のもある。	
	口 縁 部			
底 部	欠損	焼 成	普通	
色 調	暗茶褐色	出土遺構	12住床面	
胎 土	砂	時 制	加曾利E	

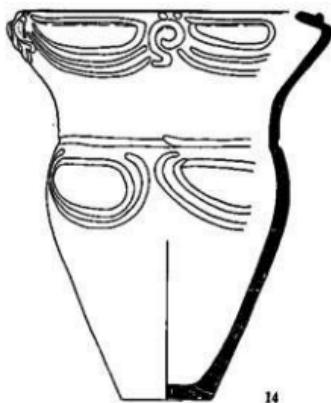
実測図番号		第31図(14)		
出土地点	地点	法 器 高	口縁径	20.1cm
	トレンチ		器 高	26.8cm
	区		最大径	22.9cm
	深さ		盤 厚	0.6cm
器 形	深鉢	底 径		
	器 形		平縁、大きいくくの字状に外反	
	文 横		幅広の沈縫を筋文風につけてある。中央部は沈縫をS字状につけてある。	
	口 縁 部			
周 部	器 形	上部は幅広の沈縫を横位に、その下には沈縫を円形状につけてある。		
	文 横			
	底 部			
	色 調			
底 部	平底	焼 成	普通	
色 調	茶褐色	出土遺構	12住(No.1)	
胎 土	雲母・石英・長石	時 制	加曾利E	

実測図番号		第31図(15)		
出土地点	地点	法 器 高	口縁径	26.3cm
	トレンチ		器 高	19.7cm
	区		最大径	24.1cm
	深さ		盤 厚	1.0cm
器 形	深鉢	底 径		
	器 形		平縁でわずかに外反し 口唇は丸い。	
	文 横		上部文様帶は沈縫を縱走、その中に沈縫状の陰線、下部文様帶は沈縫を縱走、粘土縫を波状に横走させてある。	
	口 縁 部			
周 部	器 形	上部はくびれ、下部は開く		
	文 横		上部文様帶—沈縫を縱走、中部文様帶—沈縫を横走、下部文様帶—沈縫を長く縱走させ、波状の粘土縫の貼付	
	底 部			
	色 調			
底 部	欠損	焼 成	不良	
色 調	暗茶褐色	出土遺構	12住フク土	
胎 土	雲母・砂	時 制	西中期初期	

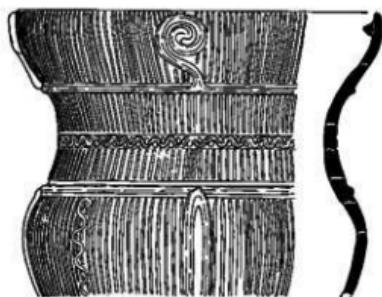
実測図番号		第31図(16)		
出土地点	地点	法 器 高	口縁径	18.2cm
	トレンチ		器 高	18.5cm
	区		最大径	15.2cm
	深さ		盤 厚	0.8cm
器 形	深鉢	底 径		
	器 形		平縁で、やや外反	
	文 横		素面で下部は横位に隆脊をつけてある。	
	口 縁 部			
周 部	器 形	やや下部に行くにしたがってつぼまる。		
	文 横		ヘラ先による沈縫が無数に縦位に走っている。	
	底 部			
	色 調			
底 部	欠損	焼 成	普通	
色 調	明茶褐色	出土遺構	12住フク土	
胎 土	雲母	時 制	加曾利E	



13



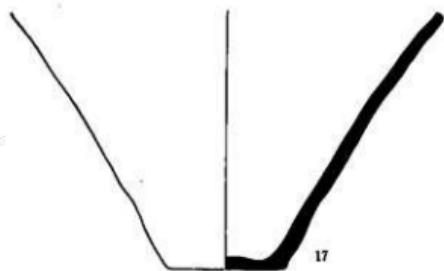
14



15



16



17



18

0 10cm

第31図 圓文式土器実測図 12住 (13~17) 13住 (18)

第1節 土 器

実測図番号		第31図(17)		
出 土 地 点	地 点	法 器	口縁径	
	トレンチ		器 高	18.2cm
	区		最大径	
	深 さ		壁 厚	0.9cm
器 形	形	量	底 径	18.5cm
	器 形			
	文 様		欠損	
口 縁 部	器 形			
	文 様		大部分欠損 外面かわるい縦位ナデ。内面横位ナデ	
底 部	平底		焼 成	普通
色 調	茶褐色		出土遺構	12住戸土
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E	

実測図番号		第31図(18)		
出 土 地 点	地 点	法 器	口縁径	13.6cm
	トレンチ		器 高	13.0cm
	区		最大径	10.4cm
	深 さ		壁 厚	0.8cm
器 形	形	量	底 径	
	器 形			
	文 様		深鉢	
口 縁 部	器 形		平縁でわずかに外反	
	文 様		粘土紐で区画されたなかに、縦位に比較を配す。口唇部は丸味を呈す	
肩 部	器 形		下部へ行くにしたがってわずかにふくらむ。	
	文 様		荒い斜細文地にS字状の沈線が垂下している。	
底 部	欠損		焼 成	普通
色 調	黒褐色		出土遺構	13住床面
胎 土	雲母・長石	時 期	加曾利E	

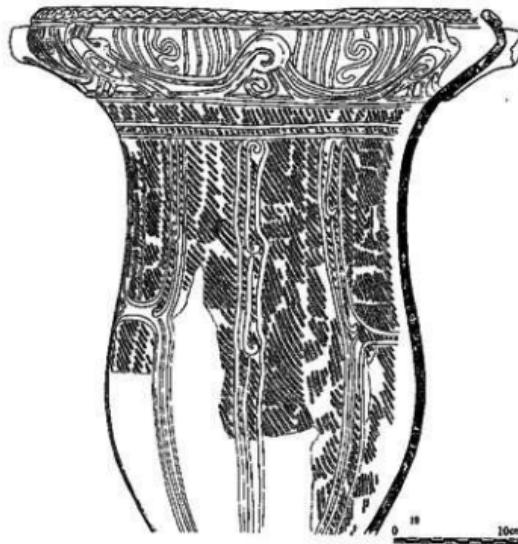
実測図番号		第32図(19)		
出 土 地 点	地 点	法 器	口縁径	3.63cm
	トレンチ		器 高	45.0cm
	区		最大径	
	深 さ		壁 厚	0.7cm
器 形	深鉢	量	底 径	
	器 形			
	文 様		大きいくの字に外反し、突起がつく。 深い縦帯を弧状に貼り付け、それは一部 巻き状を呈し、その中に縦位の沈線を配す。	
口 縁 部				
	器 形		上部はくぼり、下部はややふくらむ。	
	文 様		縦位LRの斜細文地に蛇行状とワラビ手 文状の沈線が垂下	
底 部	欠損		焼 成	普通
色 調	暗黄褐色		出土遺構	13住埋蔵
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E	

実測図番号		第33図(20)		
出 土 地 点	地 点	法 器	口縁径	19.7cm
	トレンチ		器 高	26.3cm
	区		最大径	20.2cm
	深 さ		壁 厚	0.8cm
器 形	深鉢	量	底 径	
	器 形			
	文 様		平縁でわずかに外反	
口 縁 部			上部は無文、下部は太い縦帶が渦巻状を 呈す。突起あり、縦帶を間に沈線が縱走 している。	
	器 形			
	文 様			
肩 部	器 形		ややふくらむ	
	文 様		斜細文地に入形状や波状の沈線が垂下	
			している。	
底 部	欠損		焼 成	良好
色 調	墨茶褐色		出土遺構	1号壁穴
胎 土	雲母・長石	時 期	加曾利E	

第三章 遺物

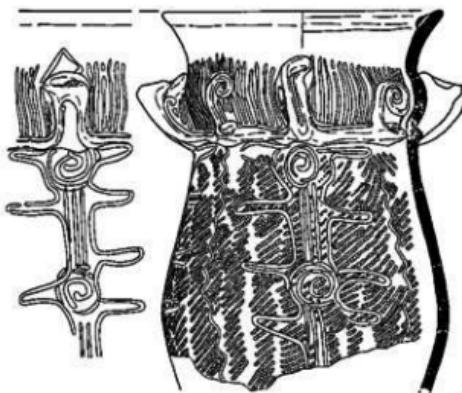
実測図番号		第33図(21)		
出 土 地 点	地 点	法 器 高	口 縁 径	
	トレンチ		18.2cm	
	区		最大径	11.7cm
	深 さ		壁 厚	0.7cm
器 形	形	量 底 径	深鉢	
			6.1cm	
口 縁 部	器 形	上部欠損、わざかに外反		
	文 様	波状の細かな沈線が斜走している。上部に陸帯が横位につく		
副 部	器 形	ややふくらむ円筒形		
	文 様	口縁部文様と類似		
底 部	平底	焼 成	普通	
色 調	茶褐色	出土造形	1号窓穴	
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E	

実測図番号		第33図(22)		
出 土 地 点	地 点	法 器 高	口 縁 径	38.5cm
	トレンチ		器 高	46.4cm
	区		最大径	
	深 さ		壁 厚	1.1cm
器 形	形	量 底 径	深鉢	
			10.3cm	
口 縁 部	器 形	平縁で、斜目に外反		
	文 様	沈線を渦巻状に配し、その中に縦文を施す。		
副 部	器 形	上部はツギまり、下部はややふくらむ		
	文 様	沈線を長梢円形状に配し、それを區隔し、そのなかに縦文がみられる。		
底 部	平底	焼 成	良好	
色 調	黒茶褐色	出土造形	1号窓穴	
胎 土	雲母・石英・長石	時 期	加曾利E	



第32図 繩文式土器実測図 13住(19)

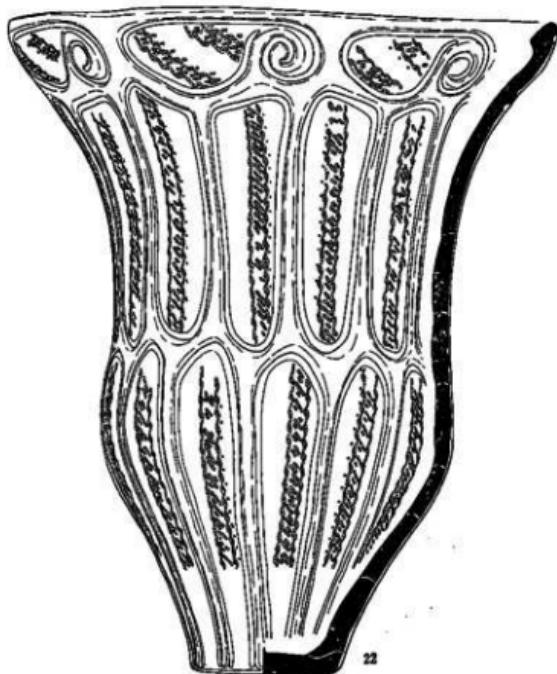
第1節 土 器



20



21



22



第33図 楩文式土器実測図 1型穴 (20~22)



第34図 繩文式土器拓影 2住 (1~10) 6住 (11~26) 9住 (27~32) 10住 (33~34)



第35図 繩文式土器拓影 12住 (35~47) 13住 (48~57) 14住 (58~59)

第Ⅲ章 造 物

(2) 弥生式土器

今回の発掘中、縄文式土器について相当量出土した土器である。先に述べたように紙数の都合で表を用いて説明を加えていくことにする。

説明項目は実測図番号・出土地点・器形・法量・口縁部・胴部・底部・色調・胎土・焼成・出土遺構・備考等である。最初に住居址番号の早い順に実測図を掲載し、それに順じて表によつて説明を加えていくことにする。

後の方には拓影図を先に述べたように住居址番号の早い順に掲載する。拓影図は文様が際立つて特色のあるものだけを選択して掲載したわけである。その割合は出土した土器总数の1割くらいと考えてもらいたい。

ただし、紙数の関係上拓影の説明は今回省略させていただきますので御承知下さい。

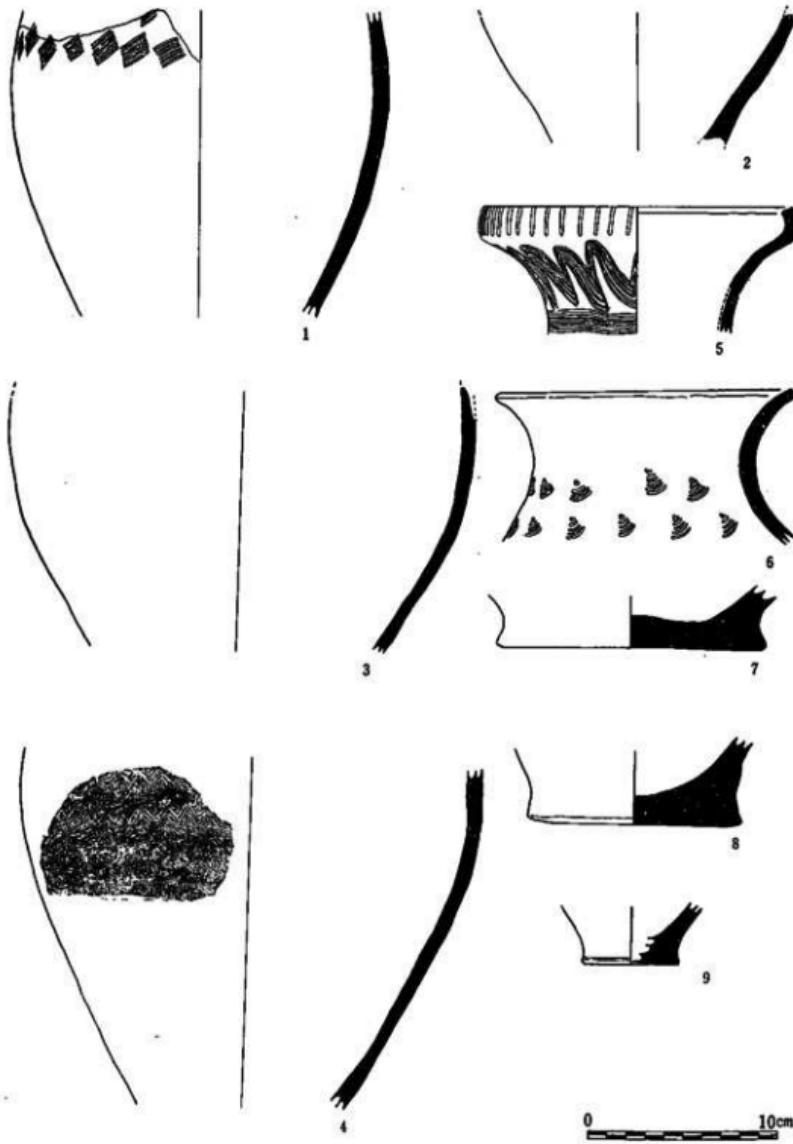
（飯塚政美）

第2表 主要弥生式土器一覧（法量は現況を記す）

実測図番号	第36図(1)	第36図(2)	第36図(3)
出土 地 点			
トレンチ			
区			
器 形	壺	壺	壺
口 縁 高 (cm)			
高 高 (cm)	16.0	7.2	13.6
最大胴径 (cm)	20.2		24.2
壁 厚 (cm)	0.9	0.8	0.7
底 径 (cm)			
口 縁 部	上部欠損、櫻唐 波線文が斜走。 外面上部荒い横 位ナデ外面下部 荒い斜位ナデ、 内面荒い横位ナ デ		上部欠損、無文 外面斜位ナデ 内面横位ナデ
		欠損	
胴 部	外面荒い縱位ナ デ 内面も同様であ る。無文		上半部分欠損、 無文、外面荒い 縱位ミガキ、内 面荒い斜位ナデ
底 部	欠 损	欠 损	欠 损
色 調	黄褐色	暗茶褐色	茶褐色
胎 土	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼 成	普 通	普 通	普 通
出 土 遺 構	4 住新炉	4 住旧炉	4 住新炉
備 考	埋甕炉使用	埋甕炉使用	埋甕炉内窓に 使用

第1節 土 器

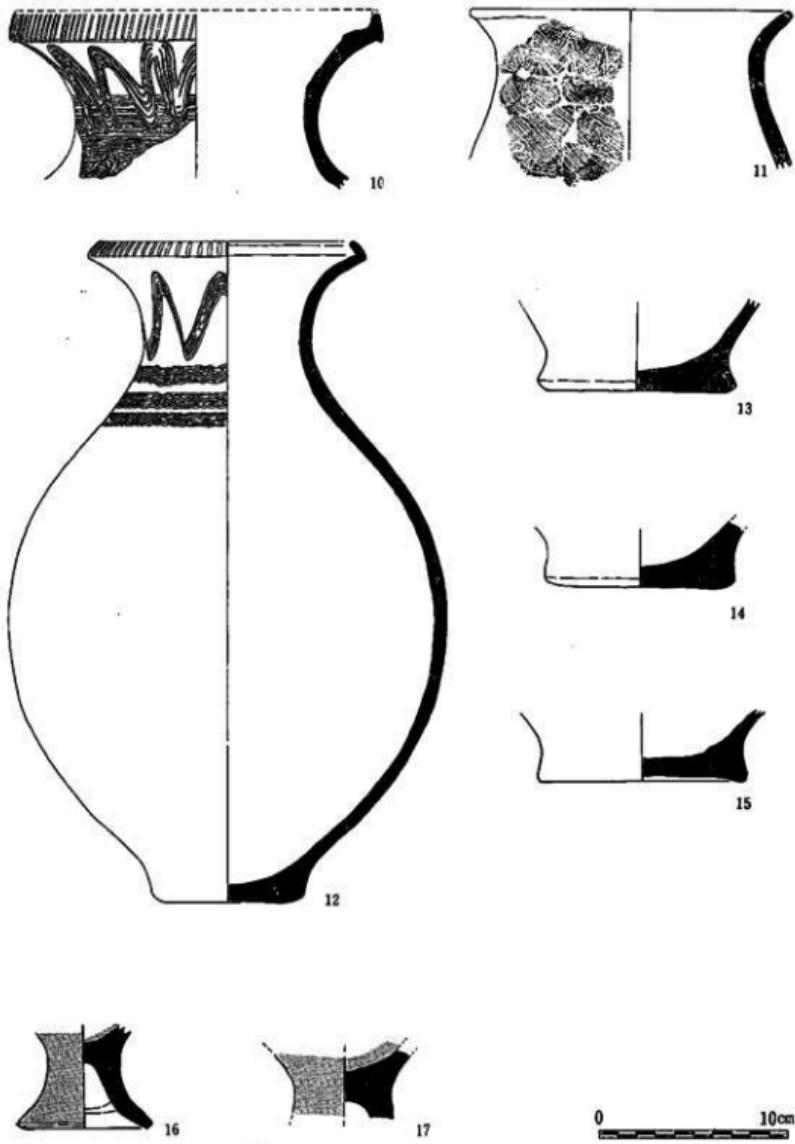
実測番号		第36区(4)	第36区(5)	第36区(6)	第36区(7)	第36区(8)	
出土地点	地 点						
	トレンチ						
	区						
器 形		壺	壺	壺	壺	壺	
法 量	口 径 横 (cm)		16.6	15.9			
	高 度 (cm)	18.5	6.7	8.2	2.7	3.4	
	最大肩幅 (cm)	24.1					
	底 厚 (cm)	0.8	0.6	0.8	1.6	1.6	
	底 径 (cm)				14.2	11.4	
口 着 部		上部欠損。縦描沈 線文が枝を打ちな がら横走 外、内面横位ナデ 下部ゆるやかな 波で横走	くの字状に外反。 口唇は内そぎ上部 は沈線が斜走 中部は横描波状文 が大きな波で横 走 下部ゆるやかな 波で横走	大きく外反し、口 唇は丸味を呈す。 上部は無文、下部 は $\frac{1}{4}$ 円弧文を配 す。 内外面とも横位ナ デ		欠 損	欠 損
肩 部		下部欠損。外、内 而横位ナデ 外面は僅分的に思 要	大部分欠損	大部分欠損	大部分欠損 外面横位ナデ	大部分欠損 外面横位ナデ 横位ナデ	
底 部		欠 損	欠 損	欠 損	平 底	平 底	
色 調		暗黄褐色	赤褐色	暗黄褐色	赤 色	暗黄褐色	
胎 土		石英	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	
焼 成		良 好	普 通	不 良	普 通	不 良	
出 土 遺 情		4住薪窯	4住床面	4住フク土	4住フク土	4住フク土	
備 考		煙突の周囲に 利用					



第36図 弥生式土器実測図 4住(1~9)

第1節 土器

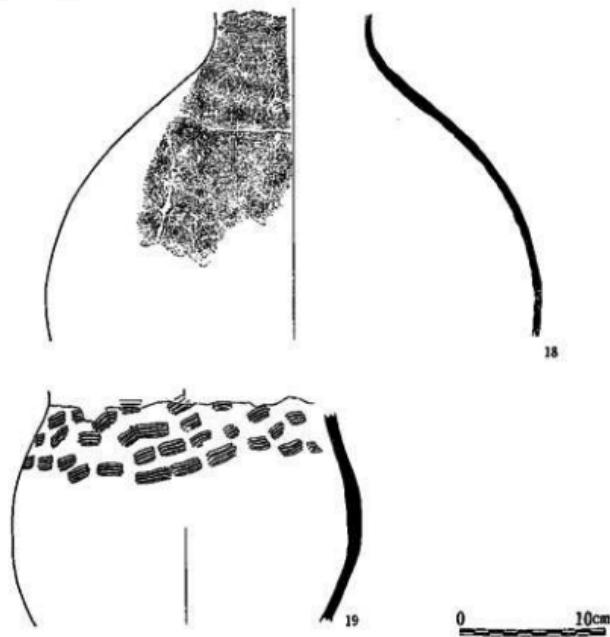
実測図番号		第36図(9)	第37図(10)	第37図(11)	第37図(12)	第37図(13)
出土地点	地 点					
	トレンチ					
	区					
器 形	甕	壺	甕	壺	甕	甕
法	口縁径 (cm)		19.7(推定)	17.2	14.9	
量	器 高 (cm)	3.1	8.9	8.0	35.1	4.7
	最大肩径 (cm)				23.2	
	壁 厚 (cm)	1.5	0.8	0.7	0.8	1.4
	底 径 (cm)	5.2			8.1	9.8
口 縁 部	欠損	ゆるやかなカーブを描き外反。上部は沈線が斜走。中部は彫刻された波状文が大きな波で横走。下部は小さな波で横走。外面横位ナデ内、面横位ミガキ	平縁でゆるやかに外反。口唇は外そぎ、上部は彫刻された波状文が大きな波で横走。下部は彫刻された波状文が斜走。外・内面横位ナデ。外面上ス付着	くの字状に外反。上部は彫刻された波状文が大きな波で横走。下部は小さな波で横走。外、内面ヘラ状工具による横位ナデ		欠損
肩 部	大部分欠損 外面横位ナデ	大部分欠損	大部分欠損。外・内面横位ナデ	肩部がややふくらむ。無文 外面横位ナデ 内面部状工具による横位ナデ	大部分欠損 外面横位ナデ	
底 部	平 底	欠 損	欠 損	平 底	平 底	
色 調	黒茶褐色	茶褐色	茶褐色	黄褐色	茶褐色	
胎 土	石英	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	輝石・石英・雲母	雲母・石英・長石	
焼 成	普 通	不 良	不 良	不 良	普 通	
出 土 遺 構	4住フク土	4住フク土	4住フク土	7住床面フク土	7住フク土	
備 考				器上復元		



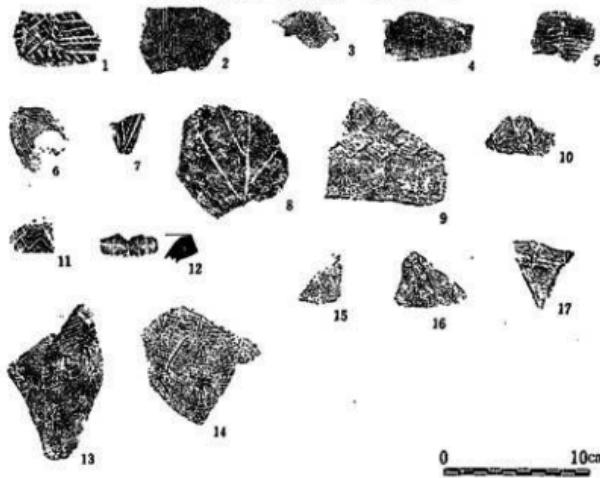
第37図 弥生式土器実測図 4住(10~11) 7住(12~17)

第1節 土器

実測番号		第37回(14)	第37回(15)	第37回(16)	第37回(17)	第38回(18)	第38回(19)
出土地点 トレンチ 区	地 点						
	器 形	甕	甕	高环	高环	甕	甕
	口縁 横 (cm)						
法 量	器 高 (cm)	3.1	3.2	5.5	4.3	22.7	16.3
	最大肩径 (cm)					34.7	24.5
	壁 厚 (cm)	1.5	1.3			0.6	1.1
	底 径 (cm)	10.2	11.1	7.2	5.5		
口 縁 部		欠損	欠損	欠損	欠損	口唇部は欠損。上部に横溝沈線が横走。中部は沈線が大きな波を描いて横走。下部は沈線による4分の1の円弧文をつけてある。 外面縦位ナデ	上部欠損、横状工具によつて4本一束の沈線が斜走。外面縦位ナデで細かい、内面横位ナデやや荒い。 外面縦位ナデ
脚 部		大部分欠損。 無文 外面横位ナデ 内面斜格	大部分欠損。 無文 外面縦位ナデ 内面斜格	脚部は完型 外面。内面は赤彩色陶	脚部の外面・内面は赤色胎 彩、外面縦位ミガキ、内面 やや斜格	ややふくらむ 下部は欠損。 外面縦位ミガキ	ややふくらむ 文様の施文方法は口縁部と同じ。施文方向は向かって右から左。外 面横位ナデで細かい。 内面横位ナ デで、やや荒い。
底 部		平 底	平 底			欠 損	欠 損
色 艶		暗黄褐色	黄褐色	暗黄褐色	明茶褐色	暗赤褐色	赤褐色
胎 土		雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母	石英	雲母・石英・長石	石英・長石・雲母
燒 成		普通	普通	不良	不良	普通	普通
出 土 造 構		7住フク土	7住フク土	7住フク土	7住フク土	7住床面	7住炉
備 考							堆肥炉



第38図 弥生式土器実測図 7住 (18~19)



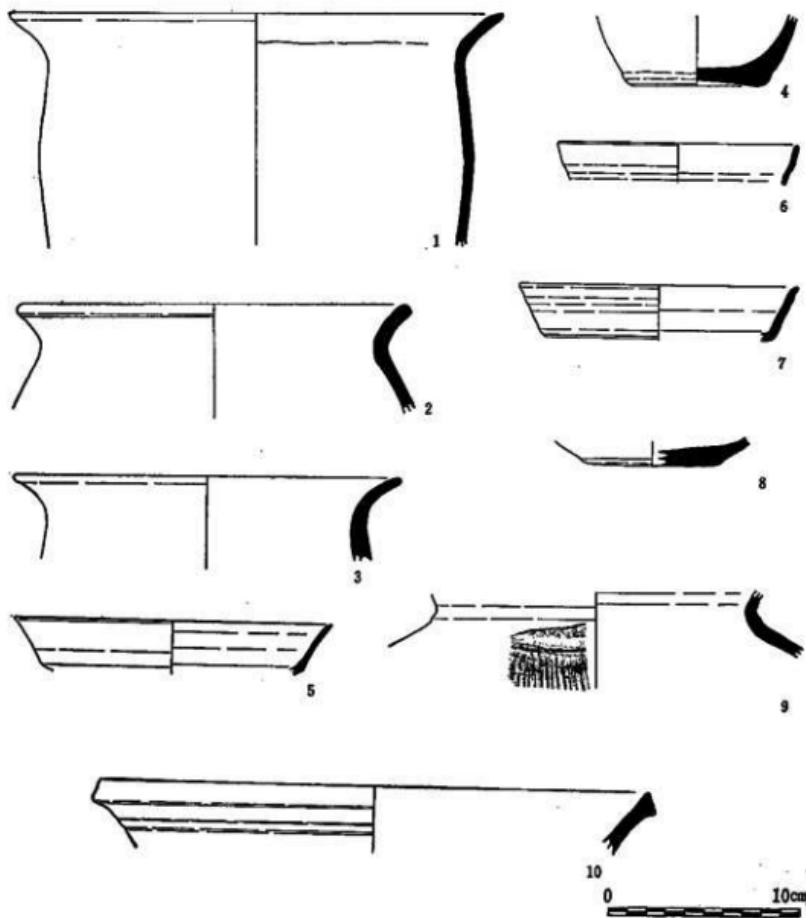
第39図 弥生式土器拓影 3住 (1~9) 4住 (10~11) 7住 (12~14) 11住 (15)
15住 (16~17)

(3) 土師器・須恵器

今回の発掘中、縄文式土器、弥生式土器に次いでわずかに出土した土器及び陶器である。紙数の都合上、表を利用して説明する。

説明項目は実測図番号・出土地点・器形・法量・口縁部・胴部・底部・色調・胎土・焼成・出土遺構・備考等である。最初に住居址番号の早い順に実測図を掲載し、それに順じて表によって説明をする。

(飯塚政美)



第40図 土師器・須恵器実測図 1住 (1~10)

第三章 遺物

第3表 主要土師器・須恵器一覧（法量は現況を記す）

実測図番号	第40図(1)	第40図(2)	第40図(3)	第40図(4)	
出土地点 トレンチ 区					
器 形	甕	甕	甕	甕	
法 値	口 緑 径 (cm)	26.2	20.5	21.0	
	器 高 (cm)	15.0	4.4	5.5	
	最大胴径 (cm)	23.1			
	壁 厚 (cm)	0.6	0.8	0.7	
	底 径 (cm)			1.0	
口	器 形	口縁が大きく外反。 口唇部は丸味を呈す。	大きくての字状に外反。 口唇部は丸味を呈す。	大きく外反 口唇は丸味を呈す。	欠損
	縁 整形 部	表 ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
肩 部	裏 ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
	器 形	やや中央でふくらむ	下部は大部分欠損	下部は大部分欠損	上部は大部分欠損
	縫 形 部	縦位及び斜位ミガキ	縦位カキ目	横位ナゲ	カキ目
底 部	表 横位ナデ	横位ナデ	横位ナデ	横位ナデ	
	裏				
色 調	欠損	欠損	欠損	平底	
胎 土	茶褐色	暗赤褐色	茶褐色	暗茶褐色	
燒 成	普通	普通	普通	普通	
出 土 造 構	1住床面	1住床面	1住床面	1住床面	
備 考	土師器	土師器	土師器	土師器	

第1節 土 器

実測図番号		第40圖(5)	第40圖(6)	第40圖(7)	第40圖(8)
出土 地 点	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	坏	坏	坏	坏	
法 量	口 横 長 (cm) 唇 高 (cm) 最大開口 (cm) 壁 厚 (cm) 底 径 (cm)	17.0 2.8 — 0.4 —	12.7 5.1 — 0.3 —	14.7 2.9 — 0.4 —	1.2 — — — 7.3
口	器 形	わずかに外反、内そぎ 口唇は丸味を呈す。	わずかに外反、口唇は 丸味を呈す。	わずかに外反し、口唇 は見事な丸味を呈す。	欠損
縁 部	表	ロクロ	ロクロ	ロクロ	
	盛形	裏	ロクロ	ロクロ	
肩	器 形				欠損
	表	ロクロ	ロクロ	ロクロ	
部	盛形	裏	ロクロ	ロクロ	
底 部	欠 損	欠 損	欠 損	—	平 底
色 調	黒灰色	黒灰色	黒灰色	—	黒灰色
胎 土				—	
燒 成	あまい	緻 密	緻 密	—	あまい
出 土 遺 物	1住床面	1住床面	1住床面	—	1住床面
備 考	須恵器	須恵器	須恵器	—	須恵器

第三章 造 物

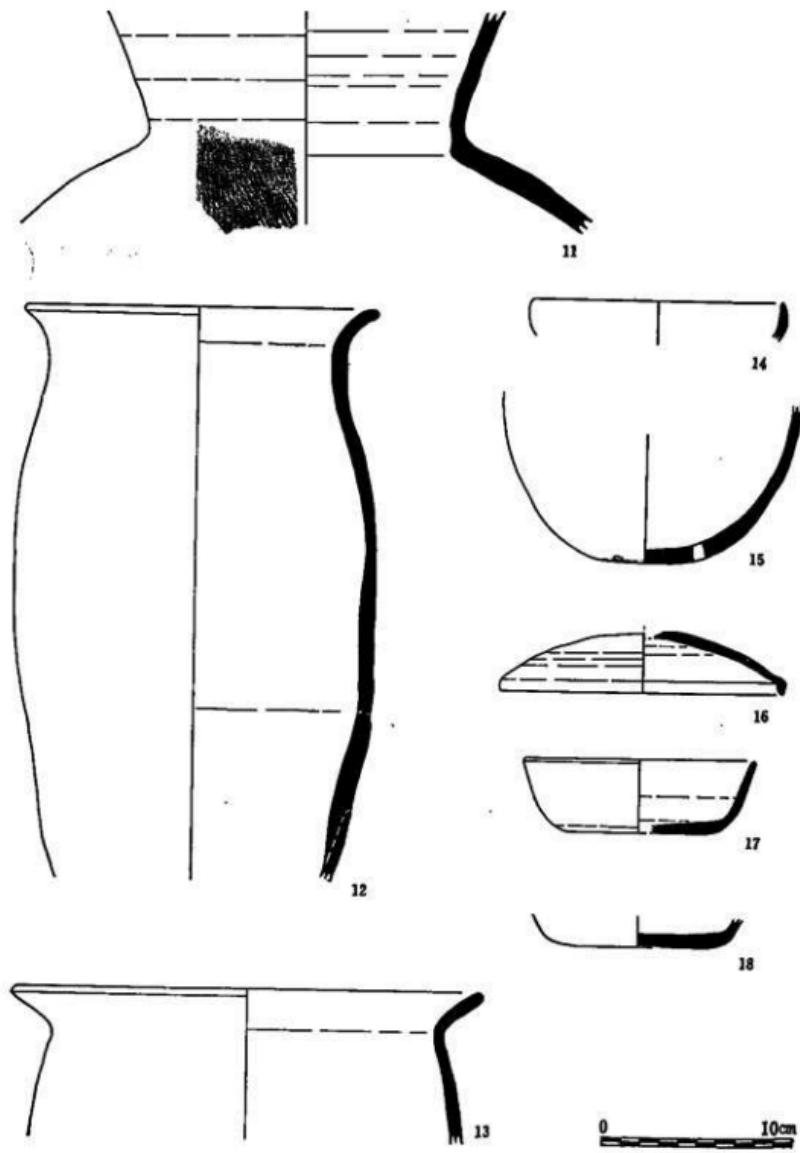
実測図番号		第40図(9)	第40図(10)	第41図(11)	第41図(12)
出土 地點	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形	要	要	要	長頸甕	
法 盆	口 線 長 (cm)		29.4		18.8
	器 高 (cm)	5.0	3.5	11.0	30.2
	最大胴径 (cm)				18.7
	壁 厚 (cm)	0.7	0.7	1.2	1.1
底 径 (cm)					
口	器 形	大きくくびれる。	大きく外傾し、口唇は外そぎ	下部で大きくくびれる。	わざかに外反、口唇は丸味を呈す。
縁 部	表	タタキ目 ロクロ	自然黏アリ ロクロ	ロクロ	ヨコナデ
	裏	ロクロ		ロクロ	ヨコナデ
肩 部	器 形	欠 構	欠 構	中央部が大きくふくらむ	中央部がややふくらむ
	表			タタキ目	縦位ナデ 縦位ミガキ
縁 部	裏			ロクロ	縦位ナデ 横位ナデ
底 部	欠 構	欠 構	欠 構	欠 構	欠 構
色 調	黒灰色	黒灰色	黒灰色	茶褐色	
胎 土					蟹母・長石
焼 成	緻 密	緻 密	緻 密	普 通	
出 土 造 構	1 住床面	1 住床面	1 住床面	5 住カマド	
備 考	須恵器	須恵器	須恵器	土師器	

第1節 土 器

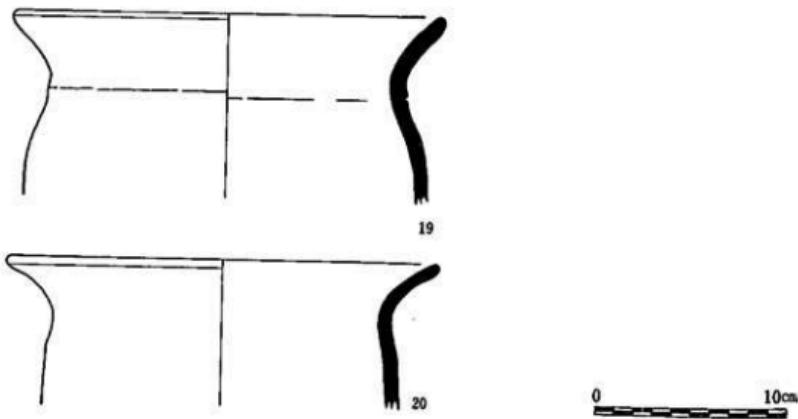
実測番号		第41回(13)	第41回(14)	第41回(15)	第41回(16)
出土地點 トレンチ 区	地 点				
	トレンチ				
	区				
器 形		要	塊	振	蓋
法 量	口 径 (cm)	25.1	13.3		15.2
	器 高 (cm)	8.0	2.1	9.1	3.6
	最大周径 (cm)		13.7	15.7	
	壁 厚 (cm)	0.6	0.5	0.9	0.5
	底 径 (cm)				
口	器 形	大きく外反。口唇は丸味を呈す。口底部はややうすい。	わずかに内反。口唇は丸味を呈す。	欠 損	
	縁 部	表	ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ ロクロ
胴 部	整 形				ケズリ ロクロ
	器 形	中央ややふくらむ 下部欠損	欠 損	上部欠損 塊状を呈す	
	縁 部	表	縦位ナデ	斜位ケズリ	ロクロ
底 部	整 形			炭化物付着	ロクロ
		裏	横位ナデ		
底 部		欠 損	欠 損	孔あり	
色 調		明赤褐色	明茶褐色	赤褐色	黒灰色
胎 土		雲母・長石・石英	輝 石	雲母・石英・長石	
燒 成		不 良	不 良	不 良	緻 密
出 土 造 剥		5住床面	5住カマド	5住カマド	5住カマド
備 考		土師器	土師器	土師器	須恵器

第三章 遺物

実測図番号		第41図(17)	第41図(18)	第42図(19)	第42図(20)	
出土場所 点						
		トレンチ				
		区				
器 形		壺	壺	甕	甕	
法 盆	口 径 (cm)	12.3		22.9	22.9	
	器 高 (cm)	3.9	1.6	9.5	7.5	
	最大胴径 (cm)			21.0	19.0	
	壁 厚 (cm)	0.6	0.7	0.8	0.7	
	底 径 (cm)	7.6	7.9			
口	器 形		欠損	ゆるく外傾。口唇は丸味を呈す。	ゆるく外反。口唇は丸くなる。	
	縁部	表	ロクロ		ヨコナデ	
脛部		裏	ロクロ		ヨコナデ	
器 形		欠損	ややふくらむ	ややふくらむ		
脛部	縁部	表	ロクロ		縦位ナデ	
		裏	ロクロ	底部にケズリ	横位ナデ	
底 部		平 底	平 底	欠 損	欠 損	
色 調		黒灰色	墨灰色	明茶褐色	茶褐色	
胎 土				鐵母・石英・長石	鐵母・石英・長石	
焼 成		緻 密	緻 密	普 通	不 良	
出 土 遺 物		5住カマド	5住フク土	5住カマド	5住床面	
備 考		須恵器	須恵器	土師器	土師器	



第41圖 土器・須恵器実測図 1住(11) 5住(12~18)



第42図 土器実測図 5住 (19~20)

第2節 石器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図・番号・名称・器形・石質・出土遺構等である。

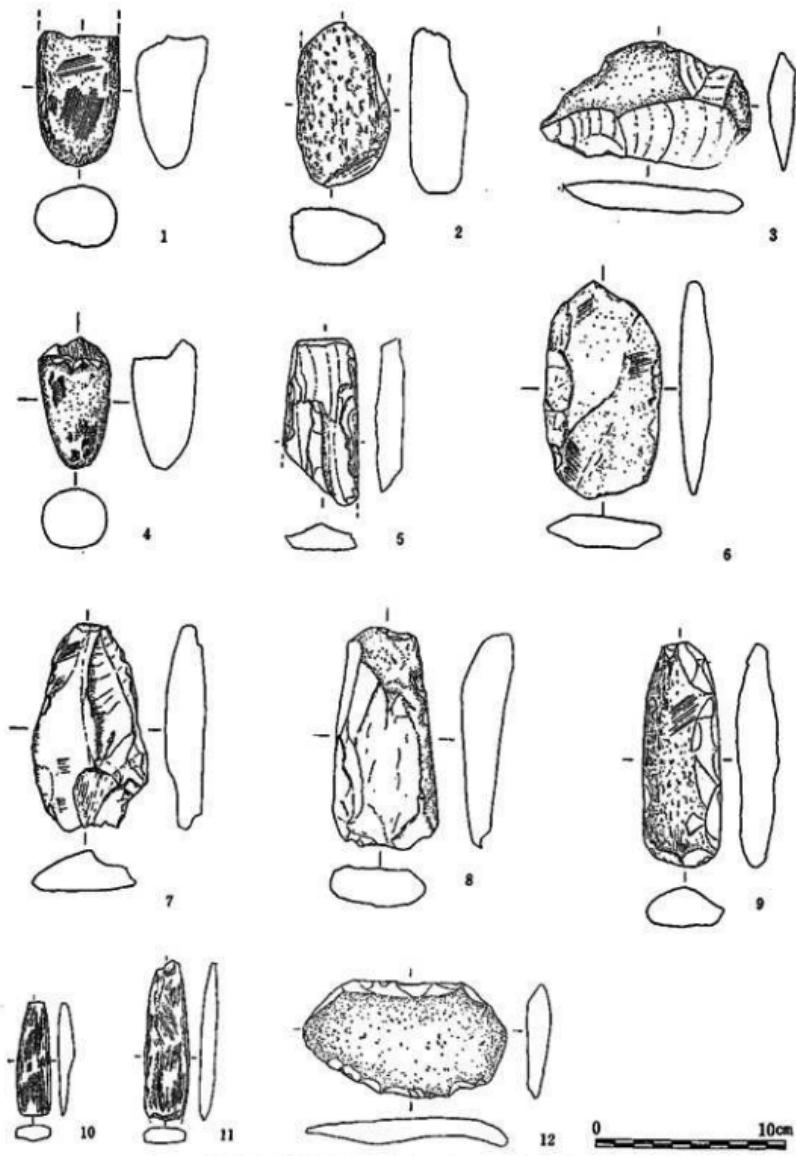
(飯塚政美)

第4表 主要石器一覧

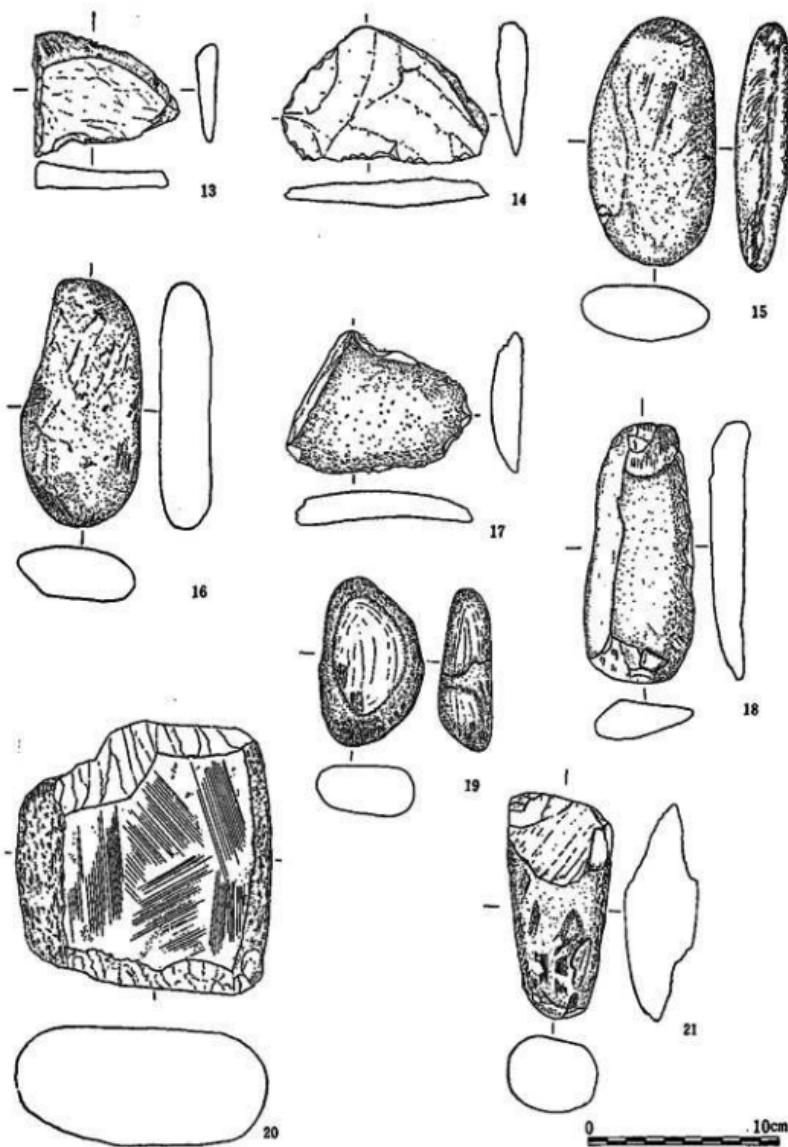
図	番号	名 称	器 形	石 質	出 土 遺 構	
第43図	1	磨 製 石 斧	乳 棒 状	綠	泥 岩	第2号住居址
"	2	磨 石		"		"
"	3	横 刀 型 石 器		"		"
"	4	磨 製 石 斧	乳 棒 状	"		第6号住居址
"	5	打 製 石 斧	短 册 型	"		"
"	6	"	短 直 形	硬	砂 岩	"
"	7	"	"	绿	泥 岩	"
"	8	"	"	"		"
"	9	"	短 直 形	"		"
"	10	磨 製 石 斧	定 角 式	"		"
"	11	"	"	"		"
"	12	横 刀 型 石 器		硬	砂 岩	"
第44図	13	"		"		"
"	14	"		"		"
"	15	踏 石		"		"
---	16	"		"		"
"	17	横 刀 型 石 器		"		第10号住居址

第2節 石 器

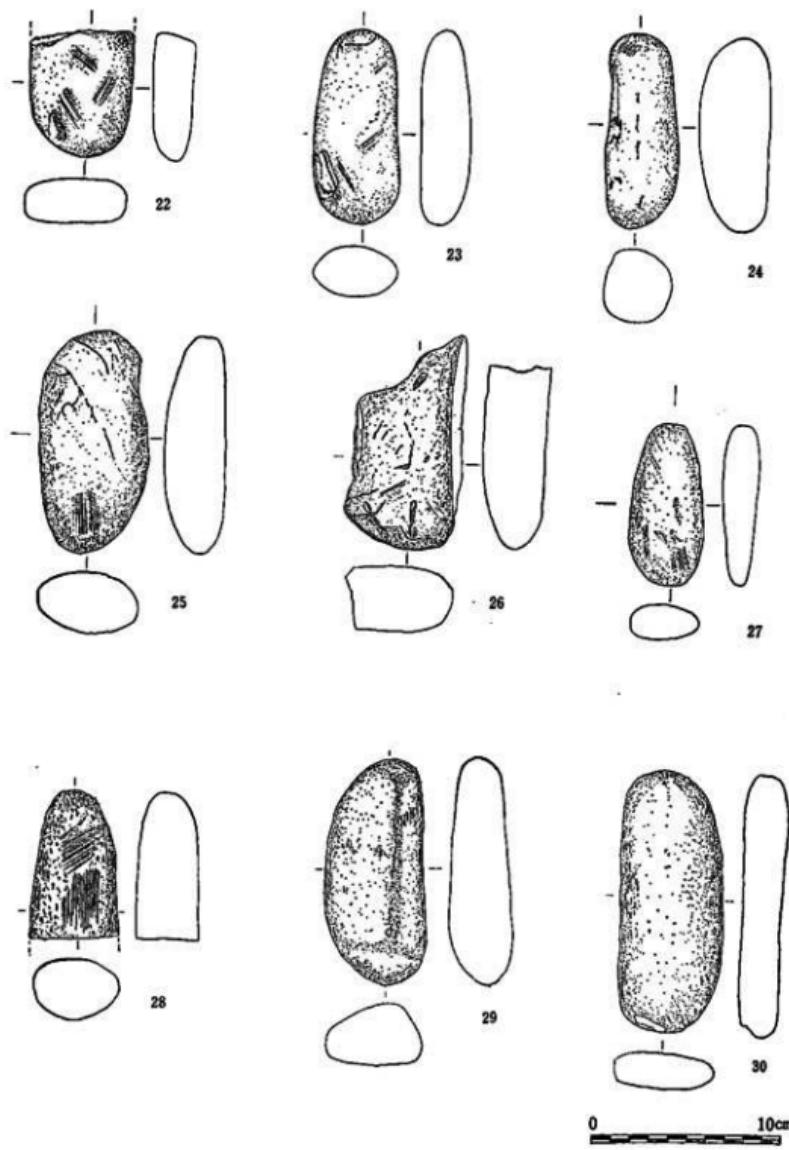
図	番号	名 称	器 形	石 質	出 土 造 構
第44図	18	打 製 石 斧		綠 泥 岩	第12号住居址
"	19	磨 石		"	"
"	20	砥 石		"	第13号住居址
"	21	磨 製 石 斧	乳 檉 状	"	"
第45図	22	敲 磨 砥	石	硬	第3号住居址
"	23	"	石	砂 岩	"
"	24	"	石	"	"
"	25	敲	石	"	"
"	26	打 製 石 斧	棱 形	"	"
"	27	磨 製 石 斧	乳 檉 状	綠 泥 岩	第4号住居址
"	28	磨 製 石 斧	乳 檉 状	綠 泥 岩	"
"	29	敲	石	硬	"
"	30	"	石	砂 岩	"
第46図	31	"		"	"
"	32	磨 製 石 斧	乳 檉 状	綠 泥 岩	第7号住居址
"	33	打 製 石 斧	棱 形	硬 砂 岩	"
"	34	敲	石	綠 泥 岩	"
"	35	砥	石	"	"
"	36	磨	石	砂 岩	"
"	37	"		"	"
"	38	敲	石	"	第15号住居址 ダリット
第47図	39	打 製 石 斧	棱 形	"	
"	40	"	"	"	"
"	41	"	"	"	"
"	42	磨	石	"	"
"	43	"		"	"
"	44	横 刀 型 石 器		綠 泥 岩	"



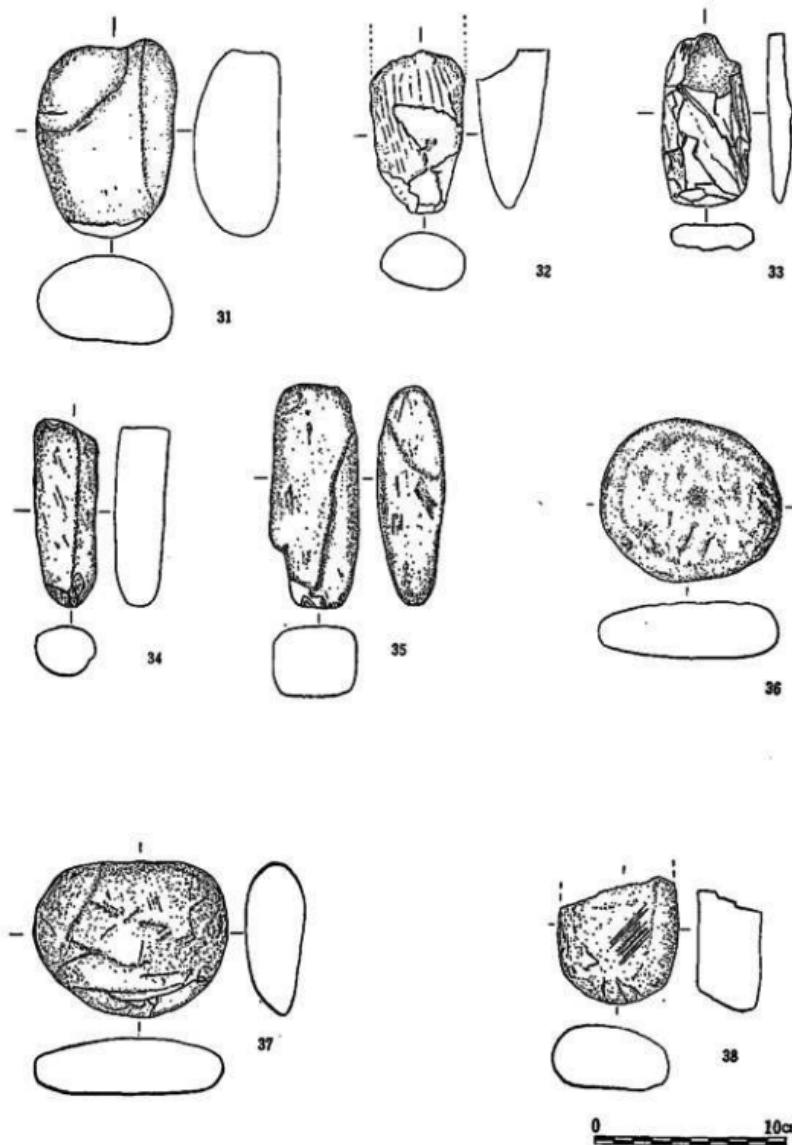
第43図 石器実測図 2住(1~3) 6住(4~12)



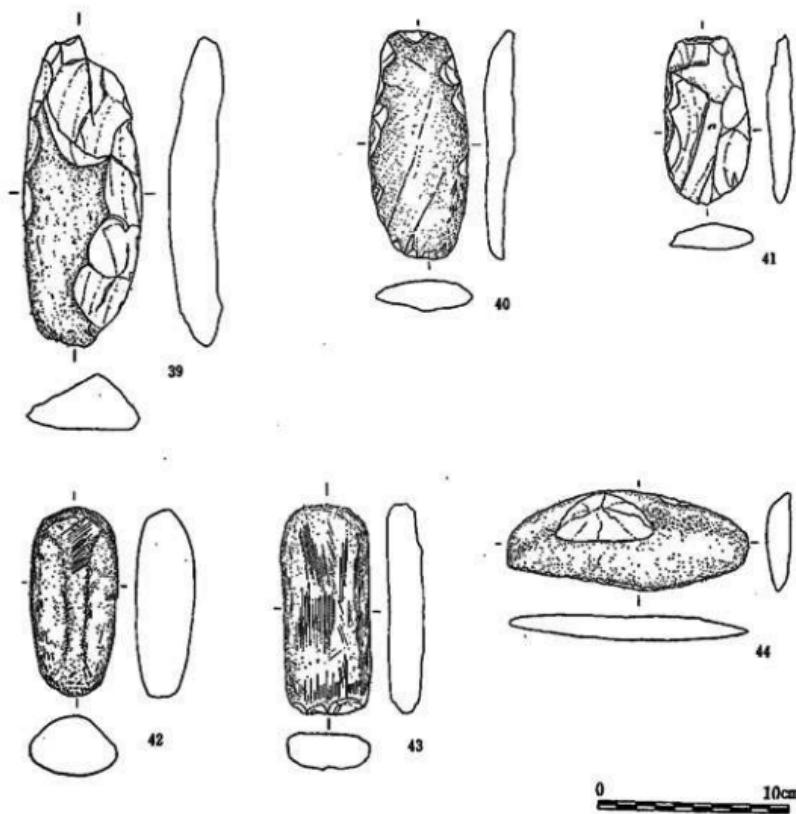
第44図 石器実測図 6住 (13~16) 10住 (17) 12住 (18~19) 13住 (20~21)



第45図 石器実測図 3住 (22~26) 4住 (27~30)



第48図 石器実測図 4住(31) 7住(32~37) 15住(38)



第47図 石器実測図 グリット (39~44)

第Ⅳ章 まとめ

単年度事業の緊急発掘ということで時間的制約があるため十分な考察及び検討を加えることはできないが、現時点においてわざることを記しておきたい。

造構は縄文中期中葉の竪穴住居址1軒、縄文中期後葉の竪穴住居址7軒、縄文中期後葉の竪穴1基、縄文中期の土壙1基、弥生時代後葉の竪穴住居址6軒、奈良時代の竪穴住居址2軒であった。縄文中期中葉の住居址の概要を記すと次のようである。

プランは円形であり、6本主柱穴を成している。炉は石圓炉であり、炉縁石は大部分残存していた。勝坂期に位置づけられると思われる。勝坂期にしては遺物量は極めて少なかったのが際立った特徴であった。

縄文中期後葉の住居址は第6号住居址、第9号住居址、第10号住居址、第12号住居址、第13号住居址、第14号住居址、第16号住居址である。これらの住居址を個別に様相及び特徴を記すと次のようになる。

第6号住居址は切り合い関係で検出され、全面は不明であるが、円形プランと思われ、6本主柱穴である。炉は楕円形状の石圓炉である。際立った特徴としては底部穿孔の伏堀がほぼ完型の状態で出土したことである。

第9号住居址は切り合い状態になってはいるが推定するにプランは円形状と思われ、したがって主柱穴は4本を呈している。炉は摺鉢形を成してはいるが、検出状況から察してみて構築時は石圓炉であったと思われる。底部穿孔の伏堀が本住居址の記すべき特色である。

第10号住居址は南、北側で切り合い関係になっており、したがって全容は不明瞭であるが付近の状態からして円形プランを呈しているものと思われる。東壁に埋堀が出土したが、文様はごく一般的であったが、埋堀としては小型であった。このことは今後、もう少し類例の増加をまたないと結論的な段階にまで到達しないものと思う。

第12号住居址は切り合い関係になっており、しかも平面プランは方形に近い円形状を呈しており、このプランは時期的にみて類例を搜し出すのに一苦労する資料となろう。諸事情はあらうが全面発掘が可能であったならばよかったですと思う次第である。この住居址から出土した土器のなかに混じってかなりの量の東海系の土器が含まれており、推測ではあるが、本址は東海地方の住居址構築方法の影響があるのでないかと思われる。

第13号住居址と第16号住居址は切り合い関係が複雑なため、これら二つの住居址の様相は良くわからない。

第14号住居址は検出された住居址のうちで最も整った石圓炉を有していた。

第1号竪穴は土器が何層にもわたって積み重なって土器が検出され、土器出土状況について多くの疑問点が含まれている。おそらく廃棄的に土器を入れたものであろうと思われる。

弥生後期の住居址は第3号住居址、第4号住居址、第7号住居址、第8号住居址、第11号住居址、第15号住居址である。これらの住居址のうちで完全な姿で検出されたのは第4号住居址、第7

第IV章 まとめ

号住居址である。その他は切り合い関係あるいは用地外のために住居址の全貌は把握できなかつた。

第4号住居址は隅丸方形で、主柱穴は一般的に4本である。主柱穴の配置は炉の位置と密接に関係しているものと思われる。本址においては新炉と旧炉があり、ともに埋甕炉の形態をなしており、したがって柱穴は何本もあるが炉の移動によって柱穴も変動するので新旧の柱穴の判別には慎重さが要求される。

第7号住居址は隅丸方形プランの竪穴住居址で、主柱穴は4本から成り、埋甕炉を有していた。

奈良時代の住居址は第1号住居址、第4号住居址であり、ともに石組粘土カマドを有していた。カマドの位置は第1号住居址は東側に、第5号住居址は北側に、それぞれある。両住居址内からは土師器・須恵器が出土しており、灰釉陶器が1片も出土しなかつたので、奈良時代の住居址と決めたわけである。

遺物のうち土器については、もっとも古いものは縄文時代前期後半のいわゆる北白川下層III式併行であると思われる。それもわずかに22片であった。これに付随する遺構の検出は何もなかつたが横吹遺跡には5000年以上前から人が住み、しかもこの土器は関西系土器である点からして、東西交通路が開けていたことがうなづける。

次に続く土器群は縄文時代中期中葉の時代のもので、いわゆる講坂式の古い時期のものである。その次は縄文時代中期後葉の時代のもので、いわゆる加曾利E式と呼ばれている。これらのなかに前述した東海系の土器が相当量みられた。これは編年上咲烟式と呼ばれる一派であることを付加しておく。

弥生時代後期の土器片はすべてと言って良い程、座光寺原式、あるいは中島式の一派に含まれている。

奈良時代の土器片は土師器については真間式に、須恵器については須恵Ⅲ式の中に入ると思われる。

最後に、発掘実施の日程を炎熱酷暑の最中に組んだわけでありますが、作業員の皆様方が真剣な態度で実に熱心に発掘調査に取り組んだ姿は本当に感謝に堪えません。

真夏の太陽の下で作業する私たちにとって、さわやかな休憩の一時は、作業への意欲を新たにする大切な時間がありますが、進んで休憩時の接待を引き受け、心のこもったお茶や菓子を用意して下さった女性作業員の各氏には改めて謝意を表します。

最後に、調査会、事務局の方々及び文化財保護にご理解をいただいた南信土地改良事務所ならびに地元土地改良区役員の各位に対し謹んで感謝の意を表し、この報告書のまとめといたします。

(飯塚政美)

図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を東側より眺む



遗槽配置



第2号住居址



第8·14号住居址



第9号住居址



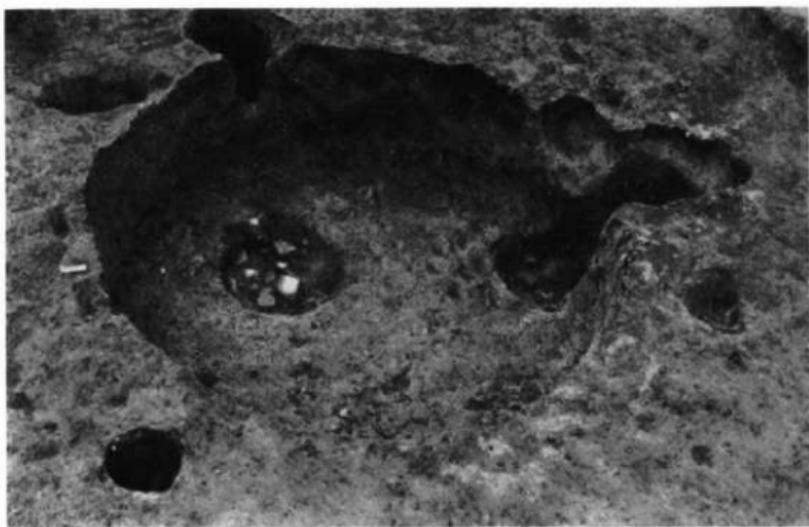
第10号住居址



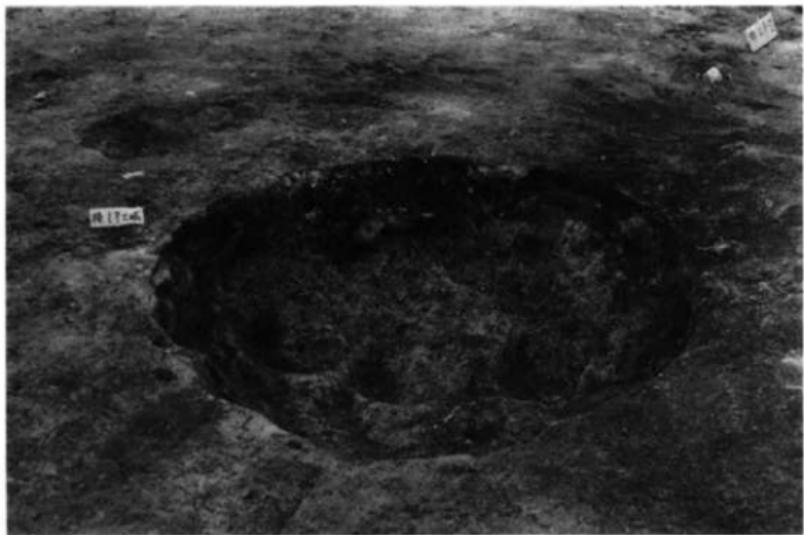
第12号住居址



第13·18号住居址



第1号竖穴



第1号土壠



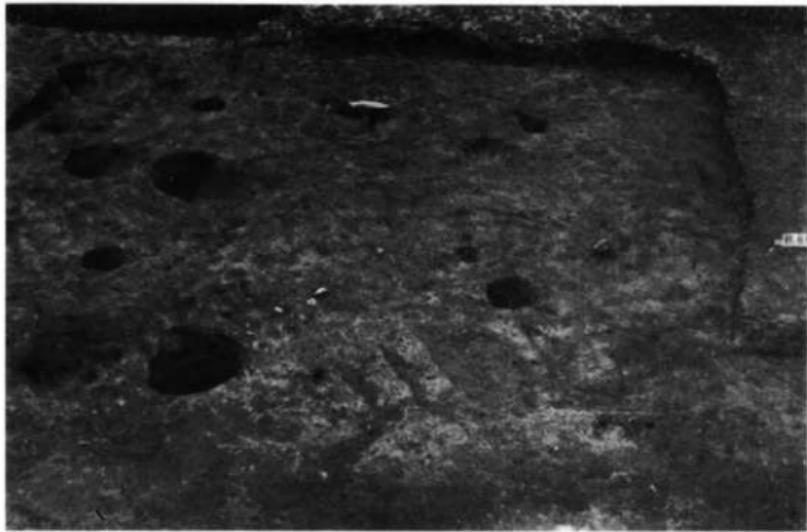
第3・11号住居址



第4号住居址



第7号住居址（手前）



第 8 号住居址



第 1 号住居址



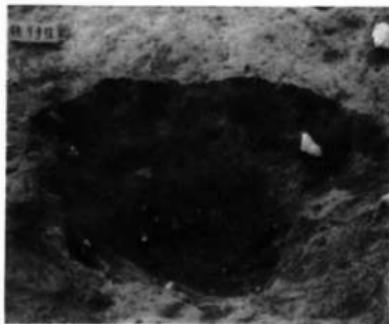
第5号住居址



第2号住居址炉址



第6号住居址炉址



第9号住居址炉址



第12号住居址炉址



第13号住居址炉址



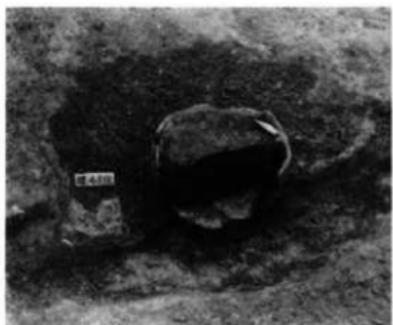
第14号住居址炉址



第15号住居址炉址



第4号住居址埋藏炉



第4号住居址埋廻伊断面



第8号住居址炉址



第7号住居址埋廻伊



第1号住居址カマド



第7号住居址埋廻伊断面



第1号住居址カマド断面



第5号住居址カマド断面

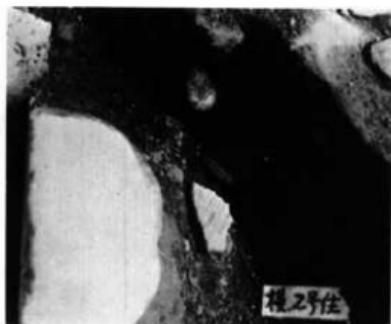


第1号窯穴土器出土状況

圖版一三 遺物出土狀況



土器出土狀況



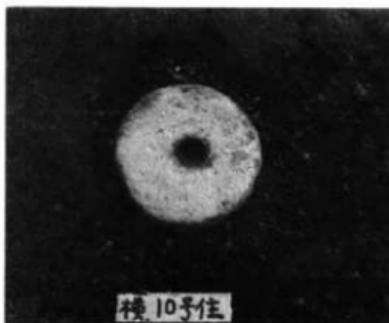
土器出土狀況



土器出土狀況（伏堀断面）



土器出土狀況（埋廻）



土器出土狀況（底面）



土器出土狀況（埋廻断面）



土器出土狀況（堆變斷面）



土器出土狀況



土器出土狀況

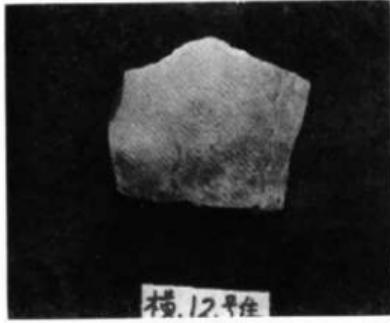


樓 12 平住

土器出土狀況

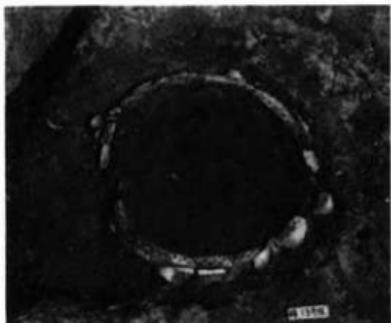


土器出土狀況



樓 12 平住

土器出土狀況



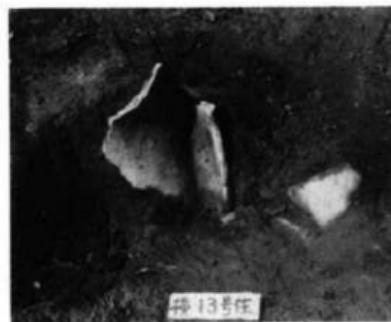
土器出土状况（埋藏）



土器出土状况



土器出土状况（埋藏断面）



土器出土状况



土器出土状况



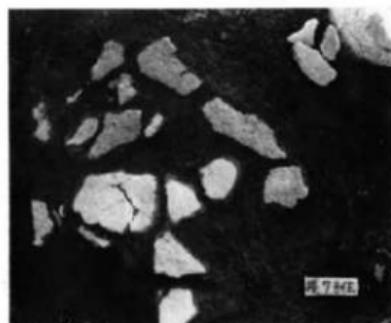
土器出土状况



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



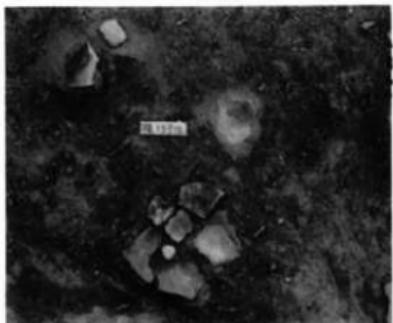
土器出土狀況



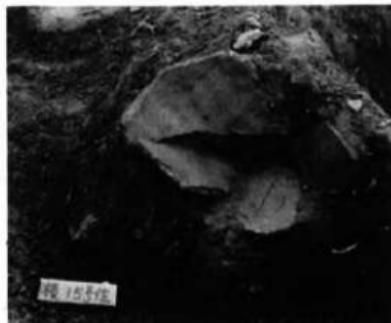
土器出土狀況



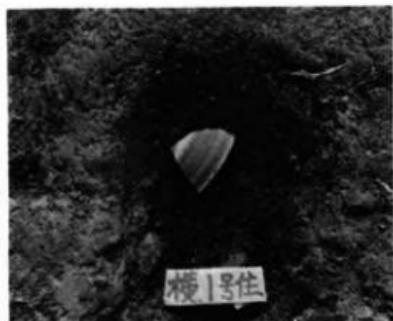
土器出土狀況



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



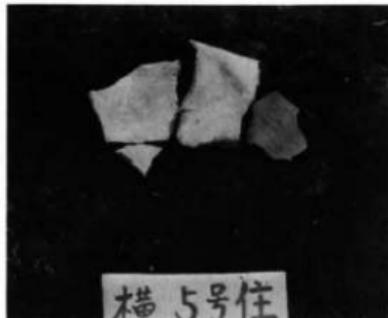
土器出土状况



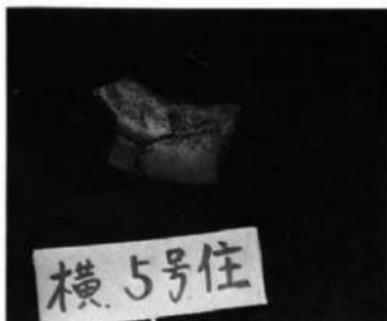
土器出土状况



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



8住(1, 3) 8住伏甕(2) 10住壠甕(4) 12住(5~6)



7



8



9



10



11

12住(7~9) 13住埋甕(10) 13住(11)